
メゾン・ド・コシュマール～悪夢の館～

鷹守諫也

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

メゾン・ド・コシュマール〜悪夢の館〜

【Nコード】

N2760E

【作者名】

鷹守諫也

【あらすじ】

いじめで退職を余儀なくされた元教師・憂未^{ゆみ}は、友人の紹介で一夏だけの住み込み家庭教師のアルバイトに出向く。そこはN県山中の別荘地。別荘とは思えぬほど立派な黒い洋館で、生徒の沙羅^{サラ}が憂未を待っていた。奇病で陽光を避ける美少女と美しきその兄。さらに館の奥深くには謎めいた病人が。むせかえるほどの百合の香りに、憂未は次第に幻覚に捕らわれてゆく。彼らの正体は、目的は一体…。ミステリアスなゴシック耽美ホラー。

序章

あなたの願いをかなえてあげる。

「あなたの願いをかなえてあげるわ」

耳元で囁いた少女が、花びらのような唇に秘密めかした微笑を浮かべる。

まるで開く直前のつぼみのように、それはえも言われぬ期待を抱かせる絶妙の色合いとかたちをしている。

わたしはぞくぞくしながら薄桃色の唇を見つめ、ほとんど崇拜するように少女の碧い瞳に魅入った。

その瞳は、いつか父の腕に抱かれて見下ろした、鬼気せまるほどに美しい紅葉の折り重なる渓谷の、どこまでも静まり渡る深甚の淵を思わせた。

それはわたしにとって思い出しうる最初の記憶だ。

紅葉の季節ならたくさんのお客がいたはずなのに、そんな賑わいしさも騒がしさも思い出の光景からはきれいに抜け落ちている。

ただ父の腕の固さとジャケットの布地のきめ細かな手触り、吸い込まれそうに碧い淵と燃えるように赤い紅葉の影。それだけが切り取られた一場面となって記憶の底に焼きついている。

澄みわたる碧い淵の水面には小波ひとつたたず、大きく張り出し

た枝の紅葉が鏡のように見事に映り込んでいた。

幼いわたしは目を瞠り父に尋ねる。

『パパ、水の下にも紅葉は咲くの』

父は喉の奥でゆったりとわらう。かすかに咳き込むようなその笑い方が、わたしはとても好きだった。

『あれは上の紅葉が水面に映っているのさ。鏡みたいだね』

わたしは父の腕の中から水面に向かって身を乗り出した。

紅葉が水に映るのならば、わたしの姿も映るはず。紅葉と一緒に淵の水面に映ったら、水底の国から見上げているもうひとりのわたしが見えるはず。

わたしは身を乗り出し、手を伸ばす。

無言のままに何処かへ誘うような、碧い淵の静寂にむかって。その後の記憶はない。

わたしは落ちたのだろうか。……いや、きっと父が慌てて抱き留めたのだろう。いまこうしてここにいるのだから。

わたしの目の前で微笑んでいる少女は、あのとときの淵と同じ目をしている。わたしを捕えて離さない、深淵の瞳だ。

少女は長い睫毛をゆっくりと瞬き、あまやかな声で繰り返す。

「何があっても心配しないで。あなたの願いはわたしがすべてかなえてあげるから」

「……すべて？ 全部ってこと？」

「ええ、そうよ。わたしはあなたが大好き。だから、あなたを幸せにしてあげたいの」

大好きと言われてわたしは嬉しくなった。出会ってこのかた、わたしは少女に夢中だった。この美しい少女はわたしにとって神のごときもの。それまでお気に入りだった人形にはもう見向きもしない。少女はどんな精巧な人形よりも美しく可愛らしく完璧だったから、まがいものの人形などもういらぬのだ。

「じゃあ、ずっと一緒にいてくれる？」

「もちろんよ」

囁いた少女の唇がわたしの頬に触れる。やわらかなその感触にわたしは恍惚となった。少女は先細りの白い指でわたしの髪をくしけずった。まばゆく煙る光のごとき少女の髪とは対照的に、わたしの髪は量だけはいけれどそのぶん黒々と重い。少女の指が触れるとそんな不細工な髪さえ内側からしんと輝きだすようで、わたしはうっとり少女にもたれかかり、時が経つのを忘れた。

「ずっと一緒にいるわ。たとえあなたが忘れても、わたしはずっとここにいます……」

少女の声は子守歌のようにわたしを眠りに誘う。逆らうことなく身をゆだね、夢に沈む。碧い淵がわたしを引き込む。

水底の国でわたしは眠り、空中の楼閣で誇らかに少女はうたう。あるかなきかの小波がほんのいつとき水面を揺らし、閉ざされた楽園は記憶の襞に隠される……。

「君の夢をかなえてあげよう」

青年は、謎めいた微笑を浮かべる目の前の人物を黙って見返した。悠然と微笑みながら自分を見つめている、文句のつけようもなく整った端正な顔。それが何故か奇妙にいびつに感じられて、青年はうつろに目を瞬いた。改めて見返した顔はどこもゆがんでないなかつた。

当然だ。自分の目の方がおかしいに決まってる。

最近は何事すべてがゆがんで見えるのだ。気のいい微笑みは嘲笑に、心配そうな顔は侮蔑に。不眠のせいだと自分に言い聞かせながら本当は知っている。世界をゆがめてしまったのは自分自身なのだ。

男の優雅な微笑みは、さしずめ悪魔の愚弄か。ゆがんだ世界の裂

け目から現れたかのごときこの男を、青年は知らない。気がついたらこの男と差し向かいに座っていたのだ。

「夢……」

苦く吐き出した。

何を馬鹿なとなけなしの理性がわめく。

何が夢だ。

すでに何もかもぶちこわしなんだ。

水に浮かぶ月を掬おうとして、ブルドーザーで池を浚ったようなもの。俺は誰よりも大切な人を泥靴で踏みにじった。

薄甘い幻想を夢見る資格すら、俺にはもうないのだ。

「……夢なんか糞食らえ」

呪詛めいた呟きにも男の優雅な微笑はゆるがない。すでに獲物を手にした蜘蛛みたいに余裕綽々なのだ。男はわずかに身を乗り出すようにして囁いた。

「元に戻りたいんだろう？ 彼女を傷つけてしまったすべての出来事を、なかったことにしたい。すべてを元に戻して彼女の望む自分であり続けたい。そうだね」

青年は啞然と男を見返した。

この男は悪魔か。どうして知っているんだ。誰にも話していないのに。誰も知らないはずなのに。自分と彼女以外には。

にこり、と男は邪気のない笑みを浮かべる。腹の中は真っ黒、真っ赤な口の中は何枚舌だ？ なのに笑顔はまるで慈愛に満ちた天使のよう。笑わせる。

「できるよ。何もかも望みどおりに」

嘲笑しようとして絶句し、青年は微笑む男を睨んだ。すでにかつちりと絡め捕られていることを知りながら、最後の抵抗をこころみる。

「なぜだ」

「君は必要な存在だから。彼女の『幸せ』のためには、欠けてはならない大切なピースのひとつなんだ。彼女は『幸せ』にならないと

いけないんだよ。そうでないと
「
そうでないと……？」

青年は先を促そうとして、ふと違和感に目を瞬いた。いつのまにか男の傍らに少女が座っていた。けぶるような金髪の美しい少女だ。少女は無言で青年を見つめていた。薄桃色の唇が蠱惑的な笑みのかたちに変わる。

『そうでないと、困るのよ』

少女の声が頭のなかに直接響いた。

『約束したんだもの。すべての願いをかなえてあげるって。その代わりに』

無邪気に少女が微笑む。

淵のごとく深く碧いその瞳は、青年の意識を完全に呑み込んだ。たそがれゆく世界で少女が囁く。

「……あなたの願いをかなえてあげるわ。だから、ね……」
かすかな笑い声は闇に溶けて消えた。

第1章 霧の径

副都心の一角、駅にほど近い商業ビルの二階にあるカフェで、ひとりの女性がぼんやりと物思いに沈んでいた。

肩胛骨のあたりまである豊かな髪は、一度も染めたことのない黒ストレート。ただ、やや癖があつてゆるやかにうねっている。

ひかえめな薄化粧をほどこした顔は小作りな細面で、華奢な鼻筋や伏目がちな瞳から受ける印象は清楚だが、左右上下の均衡のよい唇にはどこか毅然とした風情がある。

ただ、彼女は大変顔色が悪かった。元々色白ではあるのだが、今は白いというより青ざめている。

「憂未。ねえ、大丈夫？」

心配そうな友人の声に、藤崎憂未は目を瞬いた。

テールを挟んで気づかわしげにこちらを見つめているのは学生時代からの友人、大谷智子だ。

金茶色に染めた髪を襟元でふんわり巻いた智子は、マスカラを重ね塗りした睫毛を瞬き、パールピンクのグロスをぬった唇を尖らせると、毛先を指にからめながら小首を傾げてじつと憂未を見つめた。

自分とは対照的に、念入りにほどこされた化粧。学生時代から、智子は化粧に最低一時間はかけていた。時々不思議になる。服装も趣味も共通点がほとんど見当たらないのに、どうして智子と友情が続いてきたのか。

憂未は急いで笑顔になった。何故だかわからないけど、智子と一緒にいるのは気が置けなくて楽なのは確かだ。たぶん彼女も同じなのだろう。

「平気。ぼーっとしてごめん」

「そんなに緊張することないよ。うちの社長は気さくでいい人だし、それにもうほとんど本決まりなんだからさ」

「うん、それは有り難いと思ってる」

「他に何か心配事でもあるの？」

「そういうわけじゃ、ないんだけど……」

歯切れの悪い憂未の口調に、智子はますます首を傾げる。その仕種に、ふわふわした羽毛に包まれた小鳥を連想してしまった。

「ね、どしたの？」

「ん……、今朝がた変な夢を見て寝覚めが悪かっただけ」

「どんな？」

先を促され、憂未はためらいながらぼそぼそと話した。

「霧のなかを歩いているの。一メートル先も見えないような、すごい霧で。自分の手どころか鼻先も見えないみたいなの」

「ひょえー」

「でね、歩いてると後ろで足音がするの。それがどう考えても人間の足音じゃなくて……、絶対四つ足動物の足音なんだ。あたしが止まるとそれも止まって、同じ距離を保ってついてくるの」

「ひー、怖ッ。それで？」

「怖くて走り出したいんだけど、霧で全然見えないでしょ。そうしたらいきなり誰かがあたしの手を掴んで走り出したのよ」

「誰誰？ 知ってるひと？」

「それが、霧で全然見えないの。掴まれてる自分の手も見えないくらいなんだもん。あたしが走り出したら、後ろの足音も一緒に走り出して、後ろで何か叫んでるみたいなんだけど、妙に遠くて聞こえないの。足音は近いのに。変でしょ」

「うーん。夢だからね」。で、それからどうしたの？」

「後ろが気になって、手を引っ張られながら見てたら突然霧が晴れて、目の前に家が建ってたんだ。気づいたら、引っ張ってくれた手も後ろから追いかけて来たものも消えてたの……」

「どんな家？」

興味津々に尋ねる智子に、憂未は眉をひそめて微笑した。

「それが、真っ黒な家なの。立派な洋館みたいんだけど、壁もドアも真っ黒。ただ、窓枠と鎧戸だけが真っ白で。見たこともない家

なのに、何故だか入らなければいけないような気がして、蔓草模様の真鍮のノブに手をかけたら　　目が覚めた」

「えー、それで終り？」

息を詰めて身を乗り出していた智子はがっかりした顔で椅子の背に凭れた。

「誰が住んでるのか気になるじゃん。開けてみればよかったのに」

「ちょうどその時目覚ましが鳴ったんだよ」

「そっかー。寝起きが悪いと一日響くよね」

腕を組み、智子はしかつめらしくうんうん頷いた。

曖昧に頷き、憂未は目の前のカップを両手で包んだ。智子には黙っていたが、本当は夢のなかでほんの少しだけドアを開けてみたのだ。カチリ、とノブが小さな音をたてたとたん、切羽詰まった誰かの怒鳴り声に遮られた。驚いて手を止めた瞬間に、セットしておいた目覚ましが鳴ったのだ。

憂未はその声の主を知っていた。夢の中では確かに誰の声だかわかったのだ。それなのに、目覚めると同時にわからなくなってしまう。つた。

智子が細眉をひそめてじつと憂未を見つめる。

「それにしても憂未、顔色悪すぎ。今日はやっぱりやめとく？」

憂未は慌てて両手を振った。

「本当に大丈夫だってば。ここちょっと冷房きつくて寒いだけ」

「そお？」

半袖のブラウス一枚で平然としている智子を羨ましく思いながら、薄手のコットン・カーディガンの前をきっちり閉じ合わせる。憂未は冷房が苦手で、どんなに暑い日でも出かける時は何か一枚羽織るものを手放せない。

省エネだのエコだの声高にうたっているわりに、どの店も冷やしすぎではないか？　こんなに冷やすくらいなら、少し暑くて団扇でも使った方がずっとましだ。

「あたしにはこれくらいがちょうどいいな。うちのオフィス、暑く

てさ。机の上でミニ扇風機回してるよ」

襟の開いたブラウスの下にはブラしかつけていないと思われる薄着の智子は、平然とアイス・コーヒーのストローをくわえる。憂未の前にあるのはぼってりした大きめの白いカップに入ったカフェ・オレ。もちろんホットだ。

「パソコンがいつぱいあるからじゃない」

「うん、それはあるかもねー」

カフェ・オレをすすった憂未は寒そうに腕をさすりながら店内を見回した。休日の昼時で、席はあらかた埋まっている。だが、憂未のように寒そうな様子をしている客はいない。智子の言うように、特に冷やしすぎというわけではないのかもしれない。自分が過敏すぎるのだ、きっと。

「憂未、香港に行ったら凍死するね」

ニヤニヤする智子を憂未を軽く睨んだ。

「なんでよ。香港は亜熱帯でしょ」

「ガンガンに冷房してるもん。冷凍庫なみだよ」

そういえば、そんな話を聞いたことがあったっけ。冷凍庫はおおげさと思うが。

「冷房はお嫌いですか」

突然、横から男性の声がした。びっくりして見上げると、いつのまに現れたのか、テーブルの脇にすらりとした青年が立っていた。

年頃は憂未とそう変わらない。二十代の後半といったあたり。涼しげな麻のジャケット姿で、軽く後ろに撫でつけた頭髪から幾筋か短い髪が白皙の額にこぼれ落ちている。

しっかりとしているが決して太すぎない眉の下で、瞳の大きな真っ黒な目が微笑んでいる。薄めの上唇に較べてやや厚い下唇の官能的なラインが、ともすれば冷たく見えがちな全体の印象をやわらかく補っていた。

異性の目を惹くにはじゅうぶんすぎるほど整った容貌の青年だ。しかし憂未を驚かしたのは容姿の端麗さではなかった。

それはもう見慣れている。

憂未が驚いたのは青年の顔だちそのものだった。憂未はその顔を知っていたのだ。

「社長！」

一オクターブ跳ね上がった智子の声に、憂未はびくりと身を竦めた。

「やあ、大谷さん。待たせて悪かったね」

「いーええ、それほどでもお」

智子はにっこりと営業スマイルを浮かべ、席を詰めて隣に座るよう促す。腰を降ろした青年は、憂未に向かって軽く会釈をした。

「藤崎さんですね。キサラギ・セイジユです。お呼び立てしておきながら遅れて申し訳ない」

「いえ、とんでもないです……」

まだシヨックが抜けきらず、憂未はかすれがちな声で呟いた。

（この人が……？ 本当に、この人がそうなの？）

助けを求めるように智子を見ると、ただならぬ様子に気づいた智子が目を睨った。

「憂未、そんなに寒いのか？ 真っ青だよ」

「え？ い、いえ、そうじゃなくて……」

「出ましようか」

唐突に青年が言い出し、面喰らう。彼はにっこりと憂未に笑い返した。

「お昼まだでしょう？ レストランに席を予約してありますから、

詳しい話はそこで」

「社長、あたしは？」

「もちろん、君の席もあるよ」

「やったー」

小さくガッツポーズする智子。憂未は曖昧な笑みを浮かべた。青年は当然のごとくふたりが取った飲み物の伝票をもってレジへ向かう。後を追いながら、智子は不思議そうに憂未を眺めた。

「どしたの、憂未。もしかして社長と知り合いだったとか？」

「ち、違うよ。ちょっとびっくりしただけ」

「あー、わかるわかる。ハンサムだもんねー。芸能人なみでしょ。

いや、上かな？」

(そういう意味じゃ、ないんだけど……)

説明してもわかってもらえないはずがない。憂未は適当に相槌を打った。

支払いを済ませた青年に、智子が無邪気に礼を言う。声を揃えながら、憂未はひどく現実離れた感覚を味わっていた。

彼の顔を、憂未は知っていた。会ったこともないのに、知っていたのだ。

もつずっと何年も前から。

それは夢に繰り返し現れた、この世には存在しないはずの恋人の顔だった。

会社の上司が住込みの家庭教師を探している。

失業中の憂未にそんな情報を持ってきてくれたのは智子だった。

教員免許を取っても正式採用されず、臨時教員として不安定な立場で働かざるを得なかった。勤め先は小学校から大学までの一貫教育を売りにした私立校で、裕福な家庭の子女が多かった。

そのぶん親の権利意識は強烈で、しばしば理不尽な苦情や要望が持ち込まれる。また、甘やかされて育った生徒による教師への嫌がらせも陰で横行していた。

ターゲットとしては若い臨時採用教員が狙われやすく、憂未もまた質の悪い生徒の標的となった。

ことあるごとに父母からも八つ当たりのような突き上げをくらった。一年も経たないうちに精神的にも体力的にも追い詰められ、ある日突然布団から起き上がれなくなった。

通勤できなくなり、憂末は学校を辞めた。

大学で親しくなった智子もまた契約社員という不安定雇用だったが、憂末を気遣って時々様子を見に来てくれたり、買物に誘ったりしてくれた。

そんなとき、社内の雑談でたまたま社長が妹の家庭教師を探しているという話が出た。即座に憂末を思い出した智子はさっそくアピールしてくれたのだ。

報酬としてはかなりの額なので、いくらでもなり手はいそうに思われたが、条件が少々変わっていて、なかなかこれという人材が捕まらないらしい。

まず、通いではなく住込みであること。これで大半の希望者が引く。さらに、勤め先は東京ではなく、地方の、それもかなり田舎であること。そして極めつけ、生徒は病身の少女であるという。要するに求めているのは家庭教師兼世話係みたいなもので、仕事とプライベートをはっきりとわけるのが難しい。そういう仕事は昨今では嫌われがちだ。

憂末も少し前だったら断ったはず。だが、今は何でもいいから環境を変えて心機一転したい気分だった。もっとはつきり言えば、逃げ出したかったのだ。

すべての嫌な記憶から。

如月聖樹がふたりを連れて行ったのは瀟洒なフレンチレストランだった。予約席は少人数の会食用の個室で、気を利かせた聖樹が冷房を弱めにしてくれるよう、店員に頼んでくれた。

改めて名刺を渡され、ようやく脳内で名前の漢字変換ができた。変わった名前だと思っていると、聖樹は見透かしたようにニヤリとした。

「クリスマス生まれなんですよ。ホーリー・ツリーというわけです。

死んだ両親がカトリックでね。あ、僕は無宗教ですから」

「じゃあ、クリスマスのお祝いもしないんですかあ？」

首を傾げる智子に、聖樹は笑った。

「あれはもう日本の年中行事と化してるからね。妹が大はしゃぎで盛大にやってるよ」

食事をしながら雑談を挟んで勤務条件についての確認をし、デザート前に正式採用となった。

どうやら聖樹は最初から憂未を採用するつもりでいたようだ。家庭環境などについてはほとんど訊かれなかった。もつとも、興信所とかに依頼してとつくに調べ上げているのかもしれない。

「あの。どうしてわたしなんですか」

思い切って尋ねると、聖樹は面食らったように目を瞬いた。失礼な質問をしてしまったと、慌てて言い添える。

「つまり、その、わたしよりもずっと経験豊富な方がいらっしやると思うのですが」

「妹の希望ですよ」

聖樹は気にしたふうもなくにこりと微笑んだ。

「おわかりのとおり、ただ勉強を教えてくださいらう家庭教師ではないのでね。一つ屋根の下に住むわけだし、妹の希望に沿った方をお願いしたい。妹はあなたの写真を見てとても気に入ったようで、この人がいい、この人でなきゃいやだと言い張りましてね」

そういえば、履歴書の他にスナップ写真を何枚か出すように言われて適当にアルバムから抜いたものを送ったのだった。

「妹は病身ですが、そのぶんとても勘が鋭いのです。きっとあなたとなら話が合うと感じたのでしょう」

「……努力したいと思います」

「そんな気負わなくていいですよ。大丈夫、妹は気難しい娘ではありません。とても穏やかで優しい性質ですよ。少々甘ったれですがね。ああ、そうだ。写真をお渡ししておきましょう」

差し出されたのは何かの記念日なのか、お洒落なワンピースを着

て古風なソファに座っている澄まし顔の少女の写真だった。覗き込んだ智子が歓声を上げる。

「わあ、可愛い！ モデルみたいですね」

憂末も無意識に頷いていた。お世辞ではなく、写真に映っていたのは実際、大変な美少女だったのだ。

光の加減か、茶色がかって見える髪はふんわりと波うつて背にかかり、まっすぐカメラを見つめている瞳は期待を込めたきらめきにあふれている。少し不可解なのは口角のつり上がったその唇で、顔全体として見れば無邪気な微笑なのに、それだけをとって見るとまるで憫笑しているように見えなくもないのだった。

改めてまた連絡すると言われ、食事の礼を述べて店の前で聖樹と別れた。その背が雑踏に消えるまで見送り、智子はうきうきと憂末に腕を絡めた。地下街のショッピングモールへ向けて歩きだしながら、我がことのように智子はニコニコしていた。

「よかったねえ、憂末。山の中の別荘だから、天然クーラーで涼しいよ、きつと。遊びに行きたいな。ねえ、週末は休みなんだから行ってもいいよね」

「いいと思うけど。さっき訊いとけばよかったのに」

「そんなこと訊けないよー。憂末の就活の邪魔しちゃいけないでしょ。それに、仕事とプライベートの区別もつかない女だなんて思われたくないもん」

智子はつんと唇を尖らせた。あれだけ飲み食いしてもグロスの光沢が消えていない。何かコツがあるに違いない。

憂末はこつんとこめかみを智子のそれにあてた。

「ありがと、智子。あなたのおかげで立ち直れそう」

「大丈夫だよー。つらいことがあったら次にはきつといいことがあるんだから。サトちゃん法则を信じなさい」

「何それー」

「もちろん、智子サマが発見したこの世の真理よ」

ぷつとふたりして吹き出す。本当にいい友人だ。けっきょく自分は恵まれていると思う。決して孤立無援ではないのだから。

「ところで、来週末には出発なんですよ。恵吾くんはそれまでに帰ってくるの？」

憂未は一瞬こわばった顔を無理やり何気なく装った。

「さあ、どうかな」

「行き違いになっちゃったら、家に入れなくて困らない？」

「大丈夫よ。鍵持ってるもの」

「あ、そうか。そうだよな」

憂未は出来る限りさりげなく話題を逸らす。

「それより、お店見ようよ。セールやってる。あたし靴買いたい」

「あつ、あたしも。行こ行こ」

とたんに張り切りだす智子に調子を合わせ、憂未は心の底で頭をもたげた黒い影をさらに深く封印した。

数日後、出発の準備を整えた憂未は、弟の部屋の前で足を止めた。恵吾が出て行って以来、この部屋には足を踏み入れていない。以前は時折ついでに掃除機くらいはかけてやったものだが、今はドアにさえ触れるのが忌まわしい。

家族として、空気の入れ替えくらいしてやるべきなのだろう。この気候では、閉ざされた部屋は炎熱地獄のようになっていくはずだ。しかも恵吾の部屋は西日があたる。

弟は登山に出かけたと言っておいたが、本当はどこに行ったのか知らない。目が覚めた時にはもういなかった。それからずっと帰って来ない。

帰って来られないのだろう。自分がここにいる限り、きっと恵吾

は帰って来られない。

だから出て行く。たとえこの仕事を辞めてもここにはもう帰って来ない。

決意を書き記した短い手紙を台所のテーブルに残し、憂未は住み慣れた家を出た。まだ早朝なのに、早くも太陽がじりじりと路面を焦がしていた。

第2章 影の館

憂未は茫然とその館の前に立っていた。

信じられない。

これは現実なのか。それとも夢を見ているのか。 。
辺りは濃い霧がたちこめ、周囲もろくに見えなかった。タクシーでここまで来る間は、白樺林の広がる夏の高原らしいさわやかな景色を満喫していたのに、別荘へ通じる私道に入ってまもなく、どこからともなく霧がわいてきた。

目的地に近づくにつれ、霧は濃くなった。憂未を降ろすとタクシ―は押し寄せる霧から逃れるように走り去って行った。車影はあつというまに白い霧に飲み込まれ、走行音もすぐに途絶えた。

気がつくとも憂未は濃霧に閉ざされた見知らぬ場所にひとり取り残されていたのだ。

立ちすくんでいるうちに、風に押されたのか霧が流れ始めた。辺りの景色がぼんやりと浮かび上がってくる。

周囲はこれまで通ってきたのと同様、クヌギやミズナラの雑木林だった。あまり伐採をしていないようで、樹間が混んでいて見通しがききにくい。

不安感から落ち着かなく辺りを見回していると、突然目の前に雲つくばかりの巨大な黒影が現れた。ぎよつとして思わず飛びのいたが、それは巨人でも怪物でもなく、一軒の豪壮な洋館だった。

憂未は愕然と眼を見開いた。

それは、いつか智子ちこに話した奇妙な夢に出てきた館にそっくりだった。薄らいでいた夢の記憶が鮮烈によみがえる。

誰かに手を引かれて走った、霧に閉ざされた世界。現れる黒い家。扉に手をかけて、開けようとして、誰かが止める。

知っているのに知らない声。

あれは何と言っていた？

焦燥にかられた悲痛な声で、あれは何と叫んでいたのだった？

クラクラと頭の芯で眩暈がする。

黒っぽい石造りの壁面が霧の中から浮かび上がる。その様子はあまりにも幻想的過ぎて、ひどく現実味を欠いていた。

霧に取り巻かれ、館はまるで何百年もそこにあるかのように、どっしりとした佇まいを見せていた。玄関前に突き出した雨避けの屋根は上がバルコニーで、そこを中心にほぼ左右対称の二階建てになっている。

さらに上にも小さな窓が見えるのは明かり取りか、あるいは屋根裏部屋があるのかもしれない。

大きな上げ下げ窓の両脇には透かしの入った鎧戸。窓枠も鎧戸も真っ白で、黒い外壁や辺りを包む深い霧とあいまって、まるでモノクロームの世界に迷い込んだかのようなようだ。

壁面を伝う蔓薔薇の真紅が目に残り、憂未はようやく色彩感覚を取り戻した。

そういえば、夢の中でも壁に薔薇が伝っていたような気がする。まるで一点の血の滴のように。

しつとりと霧に濡れた、艶やかな深紅の薔薇。

緋色の貴婦人のように何処か謎めいて美しい、官能的な花卉……。霧のからみつく木々の緑は滴るように鮮やかで、暗い色調の館なのに不思議な瑞々しさを感じさせる。

でも、何故だろう。

何だかとても怖い気がする……。

館を見上げた憂未は無意識に後退った。夢の終わりかで、誰かが叫んでいた言葉を、憂未はやっと思い出した。

行ってはいけない。

行くな、とそれは言ったのだ。

帰れなくなるから。

立ちすくんでいた憂未は、まるで誰かにそっと背を押されたように歩きだしていた。

糸に操られるようなおぼつかない足どりで黒い扉に歩み寄る。呼び鈴は見当たらない。憂未は目の高さにある重たげな真鍮のドアノックカーをゆっくりと叩いた。尾のふたつある人魚が、自分で自分の尾を持ちながら奇妙な笑みを浮かべていた。

音もなく、扉が開く。

扉の奥には古風な引詰め髪の方が立っていた。黒い立ち襟のワンピースに白いエプロンをしている。

憂未は一瞬、十九世紀末か二十世紀初頭のヨーロッパにタイムスリップしたかのような錯覚に陥った。

半白の髪をきれいに撫でつけた女は日本人には珍しい鷲鼻の持ち主で、深く落ち窪んだ眼窩の奥で底光りする黒目がこちらを凝視している。肅然とした雰囲気は閉鎖的な屋敷の女中頭か、灰色の女学校の舎監を彷彿とさせた。

「あ、あの……。藤崎と申しますが、こちらは如月さんの……？」

気押されるように口ごもると、黒服の女はにこりともしず頷いた。

「承っております。どうぞ」

「お邪魔します……」

おずおずと中に入ると、ガシャンと耳障りな音をたてて背後で扉が閉まった。反射的に振り向いた憂未は、自分が罫に嵌まった獣か何かみたいに感じて思わず苦笑した。

玄関を入るとゆったりとしたホールになっていた。正面に広々とした階段、左右に伸びた廊下にはいくつか扉が並んでいる。

高い天井から下がる豪華なシャンデリアを見上げていると、厚手の絨毯の敷かれた階段からパタパタと小さな足音がした。

視線を向けると、美しい少女が手すりに軽く腕を乗せて微笑んでいた。先日もらった写真の少女だ。間違いない。少女は写真よりもずっと美しく生き生きとした目を輝かせ、階段を駆け降りるなり憂未に抱きついた。

「やっと来てくれた……！」

さすがに驚いて、憂未は無邪気に自分に抱きついている小柄な少

女を見下ろした。ふんわりと波うつ黒褐色の髪。身に着けているのは白地に薄い小花模様と水色のストライプが入った、パフスリーブに丸襟の清楚なワンピースだ。レースの縁取りつきの白いソックスに、黒いエナメルのローファーを履いている。

セピア色の肖像写真を思わせる、ゆかしいお嬢様スタイルだ。それがまたよく似合っている。

顔を上げてにっこりと笑う少女の顔を、憂未はまじまじと見つめた。

しみはもちろんホクロひとつない肌は白磁のように透きとおり、唇はさつき見た蔓薔薇が霧に霞んだようなしっとりした薄紅色をしている。

光線の加減が不思議に青味がかって見える黒曜石のごとき瞳。すらりと抜ける細い鼻梁や優美な弧を描く眉。まるで精緻に作られた人形のように美しい少女だ。

「待っていたわ。ずっと待っていたの」

甘えるように少女は囁く。憂未はぎこちない笑みを浮かべた。

「ようこそ白霧館へ」

「……はくむかん？」

戸惑う憂未に、少女はにっこりと笑う。

「この辺は、こんなふうによく霧が出るの。だからここは白い霧の館、白霧館。素敵でしょう？」

「ええ、そうね」

得意気にかすかに鼻腔をふくらませる少女が可愛らしく、憂未はいくらか緊張を解いて微笑んだ。

「沙羅^{ウツク}、きちんとご挨拶をしなさい」

聞き覚えのある声に振り向くと、左手の廊下から如月聖樹^{きんづきせいじゅ}が姿を現した。自宅だけあって寛いだ様子だが、妹同様このまますぐにも外出できそうな格好だ。聖樹は端整な顔に人懐こい笑みを浮かべた。

「お待ちしてましたよ。霧が出てきたので心配していたんです。大

「丈夫でしたか」

「ええ、どうにか。運転手さんは急いで帰っていききましたけど」
「迷うと帰れなくなるのよ」

少女が憂未に抱きついたまま笑みを含んだ声で呟いた。
帰れなくなる。

誰かの声が脳髓でゆらめく。虚ろに見下ろした憂未を見上げ、少女は悪戯っぽく微笑んだ。爪先立ちをして内緒話をするように耳元でこっそり囁く。

「あのね、迷うと霧に食べられちゃうの。骨も残らないのよ」
「沙羅、また変な映画を見てたな」

耳聴く聞きつけた聖樹が、あきれたように肩をすくめた。

「すみません、先生。気にしないでください。どうせ愚にもつかないB級ホラー映画か何かの話ですから。それより沙羅、ちゃんと挨拶しないとお茶に呼ばないよ」

嬉しそくに憂未に抱きついていた少女はしぶしぶといった様子でようやく離れ、ペこりとお辞儀をした。

「如月沙羅です。先生がいらっしやるのをずっとお待ちしていました」

「初めまして、藤崎憂未です。どうぞよろしくね。……ええと、沙羅ちゃんって呼んでいいのかしら？」

「もちろん」

沙羅は嬉しそくに頷いた。

十三歳と聞いていたが、仕種や表情は少し子供っぽい。おとなびた挨拶や端麗さとその幼さが絶妙の均衡をとり、少女を非常に蠱惑的に見せていた。気後れすることなく甘えてくる一方で、聖樹と似て何処か超然とした雰囲気もある。

おずおずと微笑みかけると、沙羅は嬉しそくに笑ってまた無邪気に抱きついてくる。まるで人恋しい仔犬か何かのようだ。

聖樹が申し訳なさそうな声で脇から詫びた。

「すみません、先生。物心つく前に母親が亡くなったせいかな、この

年になつても大人の女性に甘えたがるんです」

「だって、お兄様が留守だと私ひとりなんだもの」

沙羅は唇を可愛らしく尖らせて抗議した。

「これでやつと寂しくなくなるわ。先生はずっと私と一緒に居てくださるんでしょう？」

「そうできたら嬉しいわ」

沙羅はにっこりと笑つて憂未を腕を取った。

「先生のお部屋に案内してあげる。こつちよ」

沙羅は軽い足取りで歩き出した。気がつくくと、黒服の女は憂未の荷物とともに姿を消していた。気を利かせて先に持つて行つてくれたのだろう。

憂未は沙羅に手を引かれて鉛色の手摺りの付いた階段を昇った。二階の天井にも、やや小ぶりなシャンデリアが下がっていた。カーテンが閉められて薄暗いせいか灯が点いている。

階段には細かい薔薇や草木の模様が織り出された絨毯が引かれ、真鍮のポールで段ごとに押さえられている。ふと、憂未は自分が靴を履いたままだということをようやく思い出した。そういえば沙羅も聖樹も靴を履いていたっけ。

二階に上がると一階と同じように長方形の広いホールになっていた。沙羅はホールの向こう側を指さした。

「あつちにお部屋が三つあるの。一番南側がお兄様の寝室。北側のふたつが私のお部屋。あとでご案内するわ。先生のお部屋はこつちよ」

沙羅は憂未の手を引き、階段の上がり口からそのまま真っ直ぐ進んだ。右側を指し、風呂場とトイレはここだと教える。その前の廊下は短い階段を降りて長く右手に続いている。木立と霧に紛れて外では気付かなかつたが、この先にも建物があるのだ。

廊下を挟んで上へ続く階段が横向きに見えた。屋根裏へ上がる階段だそうだ。急勾配で、見上げた先は暗闇だった。ほとんど使っていないという。階段の向こう側にある部屋のドアを開け、ここが予

備室だと沙羅は言った。

「授業の準備なんかはここでなされればいいと思うわ。先に送っていただいたお荷物もこちらへ置いておきました」

覗き込むと六畳ほどの広さの部屋で、背の高い窓がひとつあり、その前に大きな机。壁際には空の書棚が天井まで作り付けてある。

「寝室はこつちよ」

通路の突き当たりが憂未に当てられた部屋だった。南側の壁が半円形にせり出していて、全部で十二畳くらいの広さはある。正面と左手に上げ下げ窓。どの窓にも落ち着いたオールローズの床まで届くカーテンがかけられている。真つ昼間なのにそれらは何故かきつちりと閉じられていた。

シャンデリアから優しく降り注ぐ光がカットグラスに反射してノスタルジックに輝いている。右手の壁に頭を付けるようにして置かれたベッドは白く塗られた鋳鉄製のアラベスク模様。ファブリックはカーテンと同じ色調のオールローズだった。

せりだした半円形の部分には、小さな丸テーブルと背もたれの中心がダマスク織になった椅子が二脚。優雅な猫脚付きのワードローブと鏡台。天板の両側に階段状の小さな抽斗が付いた書き物机。どれも上質のアンティークのようだ。小さな暖炉である。憂未は&#21854;然と部屋を眺め回した。

「……ここが私の部屋……？」

「そうよ。もしかして気に入らない？」

心配そうな顔つきで沙羅が窺う。憂未は慌てて両手を振った。

「とんでもない。その、あんまり素敵だからびっくりしちゃって」

「それじゃ、気に入ってくれた？」

「ええ、もちろん」

実際、まるで憂未の趣味に合わせて選んだかのように、室内は完璧だった。こんなふうだったら素敵なのになあ、などと擦り切れた畳をカーペットで隠した自室で、雑誌のページを繰りながら漠然と思いついていた部屋が魔法で出現したかのように。沙羅はようやく

安堵の笑みを浮かべた。

「よかった。それじゃ、お茶の用意をするわ。先生は何が好き？
ダーズリン、アールグレイ、レディグレイ、アッサム……。他にもいろいろあるわ。変わったのも、ラブサン・スーチョンとか。フレーザーティーもたくさんあるけど」

「どうやら沙羅は紅茶好きのようだ。銘柄にさほどこだわりのない憂未は、無難なところをお願いすることにした。」

「それじゃ、ダーズリンにしようかな」

「はい。それじゃ、ファーストフラッシュのいいのがあるの。用意が出来たら呼びに来るわ。それまでどうぞごゆっくり」

沙羅は弾むような足取りで出て行った。憂未は何となくほっと息をついた。室内をぐるりと見回し、カーテンに眼を留める。

（どうして閉め切つてあるんだろ。確かこっちは南側よね……？）

憂未はカーテンを思い切り引き開けた。両端に渦巻き模様のついた真鍮のレールをリングが滑り、しゃんと小気味よい音をたてる。

木立の間から青空が覗いていた。まだ霧の名残は漂っていたが、射し込む陽射しは眩いほどだ。窓を押し上げると爽風が吹き込んで来る。心地よい風に憂未は眼を閉じて深呼吸をした。

「高原、つて感じだなあ……」

しみじみと独りごち、大きく伸びをして憂未は荷物の側に歩み寄つた。メイドが運んでくれたキャリーバッグは寝台の足元に置いてあった。本格的な荷物の整理は後でするとして、ともかくあれだけ出しておこう。

憂未はキャリーバッグを横倒しにして留め金とベルトを外した。嚴重にタオルでくるんだものを取り出し、ずしりと重みのある手応えにほっと安堵する。

タオルの中には、この部屋にもあるような猫脚の家具を象つた銀色の小物入れが入っていた。時折磨いているので表面に曇りはなく、落ち着いた輝きを放っている。

憂未は冷たい銀の小筥を両手で持ち、部屋を見回した。書き物机

の両端に据えつけられた小さな階段状の抽斗に目が留まる。試しに左側の抽斗の上に置いてみた。

(うん、なかなかいい感じ。)

これでようやく自分の部屋という感じになった。子どもの頃からずっと持っている、大切な宝物なのだ。

よし、と満足して振り返った憂未は、弾かれたように飛び上がった。ざわりと髪が根元から逆立つ。

いつのまにか、部屋の隅に見知らぬ少年が立っていたのだ。

「だ、誰っ……」

狼狽で声の上擦る。しかし、少年は答えるでもなくじつと憂未を凝視していた。

沙羅よりも年下、十歳くらいだろうか。白い半袖シャツに不規則なストライプの入った蝶ネクタイをつけ、サスペンダーで黒い半ズボン吊っている。ちよつと普段着とは思えない服装だ。親に連れられて親戚の結婚式に出掛けていく子どものような感じ、とでも言えればいいだろうか。

だが、少年にははしゃいだ表情も退屈そうな様子もなかった。見開かれた瞳に浮かんでいるのは、無邪気な子どもには不似合いな、じりじりした焦燥と恐怖だったのだ。

「……どうして？」

少年は憂未をじつと見つめたままかすれ声で呟いた。憂未は戸惑って目を瞬いた。

「え？ な、なに……？」

「どうして来たんだ。ここには絶対来ちゃいけないって、あんなに言ったのに」

少年は今にも泣き出しそうな声で叫んだ。憂未はその悲痛な響きに、不気味な夢をまざまざと思い出した。

行ってはいけない。

ドアを開けようとする憂未を遮り、仄昏い森に訝する警告の声。ザワザワと嘲笑めいて森が梢を揺らす。

行くな。

帰れなく、なるから

凍りつく憂未に歩み寄り、少年は必死に言いつのる。

「ここに居てはいけない。早く出るんだ。今すぐ」

憂未はようやく我に返った。この子は夢じゃない。きっと何か勘違いしているのだ。ともかく落ち着かせようと憂未は少年を宥めた。

「ちよつと待って。ね、落ち着いて……」

「帰れ！」

少年は拳を握って叫んだ。その表情の深刻さに憂未は慄然とした。ふざけているとは到底思えない。追いつめられた無力な獣のようだ。立ち尽くす憂未の背を叩くように、ノックする音が響いた。沙羅の澄んだ声がドアの向こうから聞こえる。

「先生。お茶の用意が出来たわ」

ドアが開いて、沙羅が顔を覗かせる。窓が開いているのに気付くと、沙羅は眼を細め、ドアの陰に隠れるようにした。窓から射し込んだ陽光が、床に木漏れ日を描いている。沙羅はドアの陰に身を寄せたまま頼んだ。

「ごめんなさい、先生。カーテンを閉めてくださる？」

「え？ ええ、待って」

憂未は慌ててカーテンを閉めた。開けたのは正面のひとつだけだったので、すぐに室内は点けっぱなしだったシャンデリアの人工的な電球色に変わった。沙羅はようやく部屋に入ると、訝しげに憂未を見上げた。

「どうかしたの？」

憂未はハツと振り向いたが、少年の姿は忽然と消えていた。出て行けたはずはない。他に出口はないのだ。窓は開いているが、気付かれずに乗り越えられたわけがない。にもかかわらず、少年の姿は何処にもなかった。

混乱する憂未を、心配げに沙羅が呼ぶ。

「憂未先生？」

「あ、いいえ。何でもないわ……。ねえ、沙羅ちゃん。あなた弟さんはいる？」

「いないわ」

沙羅は不思議そうに小首を傾げた。

「お兄様がいるだけよ。私は末っ子なの」

では、あの少年は誰だったのだ？ まさか……。

(……幽霊……?)

そんな馬鹿な……！

「あら、これは何？ 素敵ね」

沙羅のはしゃぐ声に、ハツと我に返る。置いたばかりの小物入れを目敏く見つけ、沙羅は机の前に飛んで行った。

「持ってみてもいい？」

「ええ、いいわよ」

憂未が頷くと、沙羅はさっそく手に取り、眼をキラキラさせながら子細に眺めた。

「素敵。細工も細かく出来てるし……。これ、本物の銀？」

「わからないけど違うと思うわ。放っておくと曇るから時々磨いているけど」

「だったらきつと銀なのよ。銀は錆びるもの。中には何が入っているの？ アクセサリーか何か？」

「それがわからないの」

憂未は実際困って微笑んだ。

「鍵がかかって開かないのよ」

「鍵はないの？」

「ええ。でもきつと空っぽよ。ただ、綺麗だから飾りに置いてあるだけ」

「でも、何か入ってるみたい」

沙羅は耳の側でそつと管を揺すりながら眉根を寄せた。

「……中が布貼りになっているのね。音が曇って何だかわからないわ」

「大したものじゃないでしょう。子どもの頃から持つてるから、入ってるにしてもきつと玩具の指輪とか、そんなものだと思うわ。本人が忘れてるくらいなんだから」

「秘密の小箱ね」

沙羅は興奮した口調で囁いた。

「素敵。きつとびつくりするようなものが入っているのよ。宝箱みたいじゃない？」

この娘にはどうも空想癖があるようだ。思わず苦笑を洩らすと、階下で聖樹が呼んでいるのが開けっ放しのドアを通して聞こえて来た。沙羅は慌てて小物入れを机の上に戻した。

「いつけない。せつかくのお茶が冷めちゃうわ。さ、先生、早く」
沙羅は憂未の手をさつと& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; んだ。勢い良く引つ張られながら、憂未はどうか部屋の電気を消して廊下へ出た。

一階に降りると、玄関を入った正面にある広い部屋へ案内された。「朝食はここ。午後のお茶もね。お昼と夕食は隣の食堂よ」

室内に入ると、大きなフランス窓が四つ並び、ホール側の壁際には暖炉が備えつけてあった。中央には胡桃材のどっしりとした楕円形のテーブル。椅子が全部で六脚並んでいる。ドアから遠い方の端にお茶の用意が整えられ、窓を背に聖樹が座っていた。

フランス窓はどれもたっぷり壁のあるレースのカーテンがかかっている。窓の向こうはテラスになっており、屋根を支えるアーチが三つ並んで見えた。ちよつと修道院の中庭みたいだ。屋根があるので、直射日光は入らず、室内はカーテン越しの光によってやわらかく照らされていた。

聖樹が憂未を差し招き、自分の向かい側の椅子を勧める。テーブルの上にはキルティングのカバーをつけたポットが置かれ、金色の縁取りのある青磁色と白の上品なティーカップが出ていた。三段皿には焼きたてのスコーンと小さなケーキ、白と茶色のパンを使った一口大のサンドウィッチが盛られている。

沙羅は端の椅子に座ろうとして身を屈め、ひょいと何かを持ち上げた。

「ばあ」

いきなり目の前に黒い毛皮がだらりとぶら下がる。長い尻尾が抗議するようにゆらゆら揺れていた。一瞬、ぎよつとしてしまったが、それはただの猫だった。かなり大きな、全身真っ黒な猫だ。沙羅は黒猫を両手で抱えて嬉しそうにニコニコしていた。

「可愛いでしょ。アルレッキーノよ。よろしく」

沙羅が無理矢理お辞儀の真似をさせたので、猫は嫌がつて身をくねらせた。金色の瞳が不審げに憂未を睨んでいる。不機嫌に耳を平たくし、猫は一声も鳴かなかった。綺麗な猫だが目付きは据わっている感じた。聖樹が紅茶を注ぎ分けながらのんびりと尋ねた。ダージリンのすつきりとした芳香が辺りいっぱい広がる。

「先生。猫、大丈夫ですか？」

「ええ、大好きです。可愛いわ」

「よかったね、アルレッキーノ。先生にも遊んでもらえるわよ」

沙羅は黒猫を膝に載せ、優しく背中を撫でた。猫は今度は上機嫌でごろごろと喉を鳴らしている。艶々の毛皮はとても手触りがよさそうだ。慣れたら触らせてくれるだろうか。

「アルレッキーノってどういうの？ 変わった名前ね」

「道化のことなの」

「退屈で死にそうなお姫様を慰めてくれる道化ってことで」

憂未にカップを差し出しながら、にやにやと聖樹がからかう。沙羅は拗ねてべえっと舌を出した。そういう悪戯っ子のような仕種がこの美少女には奇妙によく似合った。

「すぐ立派なお屋敷なんですね。別荘とはとても思えませんわ」
「フランスの田舎で取り壊されそうになっていたのを移築したんです。沼地の畔にあつて、長いあいだ人が住んでいなかったんですよ。持ち主も持て余したような感じで」

「それにしてもいぶん綺麗に見えますけど……」

「かなり改装しました。外側は原型を損なわない程度に壁を補修したり、窓を直したり。内部は暮らしやすいようにだいぶん変えたんですよ。それでも昔っぽい感じを出来るだけ残したつもりです。子どもの頃から西洋館に憧れていましたね」

聖樹の口調にはさりげなさの中に得意気な響きも紛れていたが、憂未は別段不快には思わなかった。自らの力で人が羨むような建物を手に入れたのだから、自慢に思っても当然だ。それに、宝物を手に入れた少年のように目をキラキラさせる様は何だか可愛くて微笑ましい。

「ここ、夏の間しか使わないんですか？」

「いや、冬も来ますよ。スキー場にも近いし。先生、スキーはしますか」

「子どもの頃にやったきりですね」

「よかつたら教えますよ」

たとえ社交辞令であつても彼の声は心地よい。

「本当は自宅用にするつもりだったんですが、都会では土地が広く取れないし、それじゃせっかくの雰囲気が生かせないでしょう。それで、思いきってこちらに」

「こつちのほうが涼しくていいわ」

クッキーを摘みながら沙羅が口を挟む。

「先生は冷房が苦手なんですか？ 私もなの。だから、夏はずっとこつちにいるのよ。今まではひとりで退屈だったけど、先生が来てくれたから楽しくなりそう」

わくわくと瞳を輝かせる妹を、聖樹は軽く睨んだ。

「先生に来ていただいたのは勉強のためだ。通信教材をずいぶんサボってるだろう。きちんと勉強しないと先生と一緒に遊んでくれないよ」

「はあい」

少々強い口調で諭され、分が悪そうに沙羅は肩をすぼめた。聖樹はふと気がついた様子で真面目な表情を憂未に向けた。

「ところで、先生にお願いしておきたいことが二、三あります」

「何でしょう」

「沙羅が病気だということはお伝えしたと思いますが……」

憂未はさつと横目で沙羅を眺めた。少女は殊勝な顔で黙っている。

「……妹は生まれつき日光に対して重度のアレルギーを持っています。ポルフィリン症の一種で、直射日光に当たると皮膚が火傷したようにただれてしまうのです」

「まあ……」

まさかそんな特殊な病気とは思わなかった。聖樹はしかつめらしく頷いた。

「それで、館の周囲の木をあまり伐らずに残して陰を作ったり、昼間からカーテンを引いたりしているわけです。薄暗く陰気な感じにするかと思いますが、事情が事情なのでどうか我慢していただきたい」

深刻に頷いた憂未を見て、聖樹はくだけた口調で笑いかけた。

「ああ、もちろん先生の部屋は好きにしてくださいさってかまいませんよ。せつかく気候のいい高原にいるんだし、新鮮な空気を満喫してください」

先ほど部屋に入ってきた沙羅がカーテンを閉めてくれと言ったのはこういうことだったのか。悪いことをしたと思って沙羅を見ると、少女は気にしたふうもなくにっこりと笑った。

「だからと言って家に籠もりきりというのもよくありませんからね。日光アレルギー以外は特に問題はないんです。日が沈んだ後には散歩に連れ出したり、ドライブしたり、外で食事したりもします。僕がここに居る時はいいのですが、仕事で急に出掛けたりもするので、そんな時は先生に散歩の付き合いをお願いしたいのですが」

「わかりました」

「それと……」

聖樹はためらうように言いよどんだ。

「実は、この家にはもうひとり病人がいます」

初耳だったので憂未が驚いていると、聖樹はすまなげに頭を下げた。

「黙っていて申し訳ない。こちらは弟なのですが……」

「弟さん？」

弟はいないと沙羅は言っていたはずだが。面食らって目をしばたくと、聖樹は頷いた。

「ええ、すぐ下のね。今二十一です」

つまり、沙羅にとってはもうひとりの兄なのだ。

「沙羅とは違って、弟はほとんど寝たきりの状態でして。専任の看護師をつけてあります。もしできれば、本当に気が向いた時でいいので、たまに話し相手になっていただけると有り難いのですが……」
「ええ、もちろん。私でよければ」

義務感というのではなく、率直に憂未は頷いた。いくら資産家では大変なことだ。しかし、聖樹はそんな重い気配をまったく感じさせなかった。妹に向けるまなざしは優しく愛情に満ち、妹もまた兄へ素直な心に向けている。

ふと、恵吾の面影が脳裏をかすめる。恵吾もまた二十一だ。とたんに冷や汗がどつとわき、背筋が冷えた。

馬鹿なことを。たとえ同じ年の青年だとしても、こっちは気の毒な病人ではないか。

憂未はカップを手にとり、気を紛らわすように紅茶の匂いをかいだ。ファーストフラッシュ独特の、ちよっと青臭いような清々しい香りがする。

わだかまりなく笑いあう兄妹の姿を立ち上る芳香の向こうに眺めながら、憂未は黙々と紅茶を啜った。

第3章 黒い獣（前書き）

この章には残酷描写が含まれます。
苦手な方は該当箇所を適当に読みとばしてください。

第3章 黒い獣

お茶の後、聖樹の弟、馨かおるの病室へ案内された。沙羅はついて来なかった。

馨の部屋は館の西翼、二階のホールとは反対側の廊下の先だった。廊下の窓には白いレースのカーテンがかけてられているだけで、北側からの光とはいえ薄暗さに慣れた眼にはかなり明るく感じられる。沙羅が来なかったのはこのせいかもしれない。

廊下には幾つかドアがあったが、どれも空き部屋だそうだ。来客や将来家族が増えた時のことを考えて部屋数を大目にしたという。聖樹が結婚を考えているのだと思うと妙に落ち着かない気がした。

(馬鹿ね、何考えてんの。)

憂未は我ながら呆れて頭を振った。

廊下の一番奥、左手が目指す部屋だった。反対側は窓になっており、一階部分の屋根が見える。ノックをして、聖樹はすぐにドアを開いた。室内からの返事は聞こえなかった。促されておずおずと一歩踏み込み、室内の暗さに立ち竦む。

闇の中から濃密な百合の香りがどつと押し寄せた。強烈な芳香にぐらりと眩暈がする。光量を抑えた間接照明が点いてはいるのだが、明るい廊下から入るとまるで真つ暗闇に踏み込んだかのような。

窓を覆うカーテンはたつぷりとドレープをとって括られており、ほとんど下の窓の三分の一くらいしか見えない。白いレース越しに弱い光が射していたが、それも木立に遮られてかなり陰になっていた。

憂未は覚束ない足取りで聖樹の後に従った。ドアに近い方には椅子と丸テーブルが置いてあり、テーブルの上には大輪の白い百合が生けられた花瓶が載っている。おそらくヤマユリだろう。あまり病室にふさわしい花とも思えないが……。

ようやく目が慣れ、部屋の奥に天蓋付きの寝台が据えられている

のが見て取れた。枕元の辺りに白い紗が垂れ下がっていて病人の顔は見えなかった。ただ、上掛けの盛り上がりからそこに人が横たわっていることがわかるだけだ。

足元の方へ視線を移した憂未は、部屋の隅に人影を見出して思わず息を飲んだ。誰かが隅に置かれた椅子に腰掛けているのだ。

憂未の反応に気付いた聖樹が低声で囁いた。

「看護師の寺沢さんです」

「ど、どうも……」

ドキドキする胸を押さえながら、憂未はぺこりと頭を下げた。寺沢看護師は黙ったまま小さく会釈を返したようだった。椅子から立ち上がる気配はなく、照明も窓からの光も当たらない陰にいるため顔だちも年齢もよくわからない。ただ、光沢のあるストッキングを履いた脚をすらりと斜めに揃えているのが妙になまめかしかった。

聖樹は寝台の側に行つて病人の顔を覗き込んだ。

「譬、起きてるか」

微かに身じろぐ気配がした。聖樹は嚙んで含めるようにゆっくりと告げた。

「沙羅の家庭教師をお願いした藤崎憂未さんだよ。挨拶に来てくれた」

聖樹が憂未を振り向く。意を決して歩み寄ろうとして、はっと足を止めた。枯れ枝のような腕が、天井から吊り下げられたかのようにすつと上がったのだ。ぜいぜいと喉を鳴らす音がした。

「……すみませんが、そのままです」

ひび割れた声が囁く。

「すっかり面やつれしてしまって、お恥ずかしいので……」

聖樹を見ると、彼は無言で肩を竦め、寝台の端に腰を下ろした。憂未はごくりと唾を飲んで喉を湿し、お辞儀をした。

「藤崎憂未と申します。妹さんのことは一生懸命やらせていただきますので、どうぞよろしくお願いします」

咳き込むような曇った音の後で、ほとんど息遣いだけの声が出た。

「こちらこそ……お願いします……」

「憂未さんは時々こちらへも顔を出してくれるそうだよ。いい気晴らしになるんじゃないかな」

「ああ……嬉しいよ……」

その眩きはまるで泣いているかのように憂未には思えた。聖樹は弟の身体を布団の上から優しく叩いた。

「また後で来るよ」

立ち上がった聖樹に促され、憂未は部屋を後にした。別れの合図か、髻の腕がゆっくりと上がる。折れそくに細い手首がカクリと揺れ、骨に皮膚が貼りついたような指が憂未を追ってゆるゆると伸びた。憂未は何故かゾツとして、逃げるように部屋を後にした。

明るい廊下に出た途端、病人に対してそんな感覚を抱いた自分が恥ずかしくなる。

「驚いたでしょう」

首を振りながら、聖樹は溜め息まじりに呟いた。憂未はおずおずと頷いた。

「ずいぶん悪いようですね」

「原因がわからないのです。治らないにせよ、沙羅はまだ病名がはつきりしてますからね。あいつはいつの頃からか次第に衰弱し始めて、今では歩くことも出来ません」

「まあ……」

「手の施しようがないので、入院させておいても仕方ない。看護師をつけて自宅療養させることにしました。こちらは空気が綺麗なので、少しはいいようですよ」

「あの……。お花の匂い、少しきつすぎるんじゃないでしょうか」
差し出がましいかと思いつつ言ってみると、聖樹はあっさり同意した。

「僕もそう思うんですが、あいつは百合の香りが好きでね。気分がよくなるんだそうです。ま、好みは人それぞれですから」

聖樹は憂未の部屋の前で立ち止まった。

「それでは夕食まで一休みしてください。沙羅の相手は明日からということで。支度が出来ましたら呼びに来ます。だいたい七時くらいになるかと思えます。どうぞごゆっくり」

礼を言い、憂未は自室へ引き取った。ドアを開けて暗い室内を眼にすると、先程の謎の少年のことが急に思い出された。意を決して一目散に窓へと駆け寄り、カーテンを全開にする。

振り返った室内は明るい陽射しの中できちんと整って見えた。恐る恐るベッドの下や暖炉の中、備え付けの家具まで覗いて回ったが、誰かが潜んでいたような痕跡は見つけられなかった。

やはり夢でも見ていたのだろうか。ひよつとして、疲れて気付かないうちに一瞬寝てしまって、わけのわからない夢を見て、ノックの音で目が覚めた。というのがいちばん合理的な解釈だろう。憂未は幽霊の存在を頭から否定はしないが実際に見たことは一度もない。霊感ゼロ、と思っている。

(別に見たくもないけど。怖いし……。)

「……ま、電車で吊り革に掴まったまま居眠りしたこともあるしね」
憂未は独りごち、夢だったということでの思考の堂々巡りはやめた。時計を見るとまだ三時半くらいだ。荷物の整理でもしようかと、あらかじめ送っておいた段ボールをひとつ開いてみたものの、急に疲労を感じてスリッパを取り出すだけにした。

スーツを脱ぎ、キャミソール姿でベッドにひっくり返る。足がだるい。やはり新品の靴は失敗だった。夕食の時は何を履こう。そう、ストラップのついたサンダルを持ってきた、はず。

急激に眠気に襲われ、憂未は吸い込まれるように瞼を閉じた。明け方に変な夢を見たせいだろうか、やたらと眠い。さっきも車の中で眠ってしまったし、どうやら立ったまま居眠りまでしたようだ。

そうだ。疲れたし、少し寝ておこう。夕食の最中に聖樹の目の前で居眠りでもしたら、それこそ恥ずかしくてたまらない。

憂未は眠りの淵へ意識が滑り落ちるに任せた。

……誰？ 誰かが何か、叫んでる……。

『……レ』

……なに？ 何て言ってるの？

カ
エ
レ

イマスグココカラタチサレ！！

すぐ耳元で怒鳴られたような衝撃で、憂未は跳ね起きた。爆発し
そうに心臓がドキドキしている。部屋はしんと静まり返っていた。
開け放した窓から吹き込む風が、レースのカーテンを涼しげになび
かせている。梢のざわめきが、あたかも静かな雨音のようだ。

憂未は無意識に自らの肩を抱いた。いつのまにか室内は翳り始め
ていた。机の上に置いた銀の脚付き小物入れが鈍い輝きを放つ。そ
れがまるで静かに嘲笑うかのように見え、憂未は慄然と身を震わせ
た。

夕食の席に着いたのは聖樹と沙羅、憂未の三人だった。看護師は
同席しないらしい。給仕係のメイドがふたり、黙々と立ち働いてい

る。館に到着した時に顔を合わせたひとり、もうひとり、いくらか若い感じの女性がいた。どちらも似たような印象だった。伏目がちで足音をほとんど立てない。

沙羅は昼間とは異なるワンピースを着ていた。鎖骨の端が見えるほど肩ぐりを大きくカットした袖無しの黒いサマードレスで、蝙蝠の翼のような変わったかたちの大きな襟がついている。腰の後ろを幅広のリボンで絞り、ややバスル風に襷を寄せてある。昼間とは違ってすごく大人っぽく見えたが、憂未に向ける笑顔は変わらず天真爛漫だった。

「憂未先生、学校のお話をして」

沙羅は無邪気にねだった。病気のため、沙羅は一度も学校に行つたことがないのだという。憂未は乏しい経験の中から懸命に沙羅の好奇心を満たせそうな話題を探した。

実際、憂未は半年ほどしか教員としての勤務経験がない。免許は取ったものの正式に採用されず、とある私立の中学に臨時教員として雇われた。富裕層の子女が多く、付属の小学校からそのまま上がつて来た子がほとんどだった。

その中にいわゆる「女王様」と目されるひとりの少女がいて、それが何故か憂未に眼をつけたのだ。裕福な家庭で甘やかされて育つた、典型的な我が儘少女だった。目鼻だちのくつきりした華やかな容貌をしており、本人もそれを充分に承知していた。

ティーンズ向けのファッション雑誌のモデルをしていて、同年代の少女たちに絶大な人気があるらしい。校内でも薄く化粧をしていたが、誰も咎める者はいなかった。成績はトップクラスで、しかもそれ以上に悪知恵が働く娘だった。思い出したくもない陰湿な嫌がらせを半年間受け続け、結局憂未は退職した。

後で知つたのだが、少女が退職に追い込んだ女性教師は憂未だけではなかった。少女にも、彼女なりのストレスや鬱屈があつたのかもしれない。しかし退職後、彼氏からも突然別れを告げられ、際限なく落ち込んでいた憂未に、思春期の少女の心情など思いやっ

る心のゆとりがあるはずもなかった。

もちろん、そんなことを無関係の沙羅に聞かせるわけにはいかない。憂未は何とか楽しそうなことを話そうとしたのだが、どうしても言葉は詰まりがちになった。沙羅はそんな憂未の窮状を悟ったか、心配そうに眉を寄せた。

「ごめんなさい、先生。私、悪いこと聞いた？」

「あ、いいえ、違うの。ただ私、あまり長く学校にいなかったから、そんなに話せるようなことが見つからなくて……。ごめんなさい」

「いいのよ！」

沙羅は急いで言った。

「きつと厭なことがあったのね。そうよ、学校なんて意地悪な子が多いもの。お話の主人公は大抵、学校に入るとひどく苛められるのよ」

沙羅は憤慨した様子で『小公女』や『デーヴィッド・コパーフィールド』を持ち出した。沙羅のこれまでの友人は世界文学全集であったのかもしれない。憂未は何やらむきになって聖樹と言い合っている沙羅を微笑ましく見つめた。

憂未を標的とした少女も華麗な顔だちをしていたが、沙羅の方がずっと美しく、何よりも気品がある。あの少女は美貌の下に時折卑しい表情を垣間見せたが、沙羅の美しさは玲瓏と曇りない鏡のように澄んでいる。

沙羅は断固として宣言した。

「私、先生を苛めたりなんかしないわよ、絶対」

「当たり前だよ。わざわざこんな田舎まで来てもらったんだから。言うこと聞かないと、すぐに帰ってしまわれるぞ」

「いやっ」

からかった聖樹に沙羅は本気で不安そうな顔をした。キラキラと輝く黒瞳で縋るように憂未を見つめる。

「先生、ずっと居てくださるでしょう？ 帰ったりしないわよね？」

「まだ来たばかりなのよ、沙羅ちゃん」

憂未は思わず苦笑した。

「そんなに早く誠にされたら困っちゃう」

「よかった」

沙羅は満面に笑みを浮かべ、機嫌よく食事を再開した。やはり反応がやや子供っぽい。だが、変に大人びているよりもずっと好ましいように憂未には思えた。

「先生、食事の後、一緒にゲームをしましょう。ね？」

憂未が応じる前に、聖樹がたしなめた。

「沙羅。先生と遊びたかったら残さず食べなさい。残したら数学のワークブックを寝るまでやらせるぞ」

眼を瞠ったかと思うと、沙羅は懸命に料理を片付け始めた。必死な様子に聖樹も呆れて諫める。

「何も急いで食べなくていいんだよ。消化に悪いだろう。よく噛んで食べなさい」

憂未は小さく笑みを洩らし、ワインを一口含んだ。美しくカットを施されたワイングラスにシャンデリアの照明が映え、液体に微妙な陰影を与えている。テーブルの上には本物の蠟燭を挿した燭台と緑がかつた白い薔薇。席に着くのは人形のように美しく可憐な少女と、ほとんど憂未の理想が具現化したかのような美青年。

何だか現実とは思えない食卓だった。映画の中か、あるいは夢の中に迷い込んだような、ひそかな酩酊を憂未は感じていた。

(やだ。ワインの飲み過ぎ……?)

憂未はこっそりと頭を振った。ふと眼を上げると聖樹と視線が合った。炎を映してちらちらと瞬くようなその瞳に、いつしか憂未は吸い込まれるように見入っていた。

『待っていたよ』

夢の中であの人が囁く。

『ずっと待っていた』

差し出された手を取ると、あの人は扉を開ける。黒い扉がゆっくりと開いてゆく。中から眩い光が溢れ出る。

何処かで誰かが叫んでいる。

行くな。行くな。行くな。……

それは蜜蜂の羽音のように小さく、もはや聞き取れない。振り向いたあの人の顔は、すっかり聖樹の顔になっていた。優しく、誘うように微笑んで腕を引く。

『さあ、行こう』

憂未は頷き、足を踏み出した。

風呂を使って部屋に戻り、憂未はほつと息をついた。広々とした浴室は大理石の床に金色の猫脚付きの白いバスタブが置かれていて、薔薇やラベンダーの香りのシャワージェルも好きに使うことが出来た。

タオルはどれもふかふかで仄かに柑橘系の香りがする。これまで行ったことのあるどのホテルよりもずっと快適だった。

難を言えば、浴室が自分の部屋と直結していないのでバスロープ姿でホールの端を横切らなければならなかったこと。しかしこれはホテルではないのだから仕方ない。

いちおう、各人が使用する時間帯は決まっていて、憂未が最初、聖樹が最後ということになっていた。遠慮する憂未に、聖樹は笑って、僕たちは夜遅くなってから風呂を使うので、先に入って貰えるとその方がありがたいのだと言った。

ベッドに腰を下ろし、タオルで髪を拭いながら部屋を眺めていてふと憂未は気付いた。そういえばこの館にはテレビというものも存在しない。食事のあと暖炉のある二間続きのリビングに移って沙羅とゲームをしたが、そこにもテレビはなかった。

沙羅が言ったゲームというのはテレビゲームではなく昔ながらのランプだったのだ。その部屋は昔の洋館という撞球室で、確かに立派な造りのビリヤード台も置いてあった。

ステレオからは抑えた音量でクラシック音楽が流れていた。使わ

れていない暖炉の前で聖樹は長い脚を組み、ウイスキーのグラスを片手に本を読んでいた。窓の外から聞こえるのは、梢のさわさわ鳴る音と、鼻が鳴く声くらいだ。聞き慣れた車の走り去る騒音など、何処からも聞こえては来なかった。

髪を乾かし、さて寝ようかと憂未は窓際へ寄った。窓を閉めておこうと思ったのだ。高原の夜は都会とは比べ物にならないくらい涼しくなる。窓を開けて寝ると風邪ひきますよ、と聖樹からも忠告された。

上げ下げ窓を引き下ろそうと腕を上げた時、何処からか絃の音が聞こえた気がした。耳を澄ますと、やはりそうだ、ヴァイオリンの音が聞こえる。誰かがCDをかけているのだろう。聞いたことのある曲だったので、しばらく憂未は耳を傾けていた。

(何だっけ、この曲。)

そう、クライスラーだ。確か、『前奏曲とアレグロ』。家でも時々かかっていた。養父がクラシック音楽が好きで、その影響か弟もヴァイオリンの曲を好んで聴いていた。一方ではハードロックに夢中になり、よくライブハウスに出掛けたりもした。

その弟が時折自室で思い出したようにかけていたのがクライスラーのCDで、特にこの曲が好きだったような記憶がある。

姉さん、と呼ぶぶつきらぼうな弟の声が不意に脳裏に蘇った。憂未は激しく首を振り、勢いよく窓を下ろした。厚みのあるペアガラスに遮られ、音楽はぶつりと途絶えた。それでも憂未は耳を手で押さえた。

恵吾は家を出て行ったのだ。もう戻っては来ないだろう。たとえ戻って来たところで、二度と一緒に暮らすつもりはない。この仕事でまとまった収入が得られたら、どこかに引っ越そう。あの家に住むなんて耐えられない。すべてをリセットして忘れてしまおう。そして、新しく始めるのだ。

憂未はカーテンを固く閉ざすとベッドにもぐりこんだ。とりあえず、この仕事をしっかりやらなければ。幸い、生徒の沙羅は素直な

いい子だ。聖樹も、夢の中のあの人に似ていることを除いても、とても感じがいい。きつと楽しくやれる。厭なことは忘れて、一生懸命やるだけ。

ともかく、今日は寝よう。眠ってしまったえば、夢でまたあの人に会えるかもしれない。聖樹に似た、あの人。いや、聖樹があの人に似ていると言うべきなのか。

あの人は聖樹ではない。聖樹はあの人ではない。でも、ふたりは似ている。顔も声も、雰囲気も、そっくり……。

冷たい風を感じて、自分が眠っていたことに気付いた。枕元の電気スタンドを消した記憶はなかったが、灯は消えていた。ただ、窓から月光が射し込んで室内をぼんやりと浮き上がらせている。レースのカーテンが夜風に音もなく翻った。

(窓……閉めたはずじゃ……?)

朦朧とした頭で憂未は記憶を辿った。確かに窓は閉めたはず。あの音楽を聞きたくなくて。

『前奏曲とアレグロ』。

あの旋律を閉め出し、忌まわしい記憶を追い払うために、窓もカーテンもびったりと閉ざした。なのに、どうして窓が開いているのだろうか……?

閉めなければ、と憂未は起き上がった。ベッドから出ようとして凍りつく。何かの気配を強く感じた。

室内に、何かがいる。

低く唸るような物音が何処からか聞こえて来る。そして、甘く冴えた濃密な百合の香り。水のような月光に満たされた室内を、恐怖心を必死に押し殺しながら見回す。

ベッドの足元で視線は止まった。

黒々とした影が床の上にうずくまっていた。

(アルレッキーノ?)

一瞬、沙羅の愛猫が脳裏に浮かんだ。だが、あの黒猫は猫にしてはずいぶん大きいとは言え、この影よりもずっと小さかったはず。燐光を放つ緑色の丸いもの。あれは……眼だ。獣の眼。キラキラと燃える、毒々しい緑の眼の怪物。

胸が悪くなるような異臭とむせ返るような百合の香りが執拗に絡み合う。

獣がゆらりと身を起こした。四つ足の獣は大きな犬のように見えた。だが、肩の辺りが瘤のように盛り上がり、脚の形も異様だった。たてがみのような長い真っ黒な毛髪が頭から短い首、背中、背中の辺りまで垂れ下がっている。

奇妙にぎくしゃくとした動きで怪物は前へ出た。腐ったような異臭と百合の芳香が混じりあい、強烈に鼻を刺す。

怪物は緑の眼で憂末を見据えたまま、耳まで裂ける大口を開いた。汚く変色した乱杭歯が黒とピンクのまだらの歯茎から無数に飛び出ている。錆びた車輪を無理矢理動かすような軋んだ唸り声が、咽喉の奥から洩れた。

人狼。

頭にその単語が浮かんだ瞬間、怪物は憂末に襲いかかった。真っ黒な鋭い爪を備えた巨大な手が布団を剥ぎ取り、逃げようと無意識に身じろいだ憂末の左足を巨大な顎が虎挟みのように噛んだ。

骨の碎ける音とともに、憂末の左足は一瞬にして食いちぎられていた。

憂末は魂消るような絶叫を上げた。血潮が噴水のように迸り出て壁と天井を真っ赤に染める。黒い獣は食いちぎった脚を音を立てて咀嚼していた。苦痛と涙に歪む視界の中、獣が喉を鳴らして肉片を飲み込む様が見えた。

血を失うにつれ、視界がどんどん暗くなる。ポンプで汲み出されるように血が流れ出して行くのがわかる。

獣は骨のかけらを吐き出し、ガクガクと痙攣する憂末に飛び掛か

った。

左肩に無数の牙が食い込む。神経が焼き切れそうな激痛に襲われ、憂末はなすすべもなく泣き叫んだ。顔や身体に熱い飛沫がかかる。視界が真っ赤に染まった。それは食いちぎられた左腕からの大量の出血だった。

目の前に白く長いものをくわえたおぞましい獣の顔があった。びっしりと剛毛に覆われ、ただ緑の眼だけがギラギラと異様に輝いている。

口にくわえているのは、噛みちぎった憂末の左腕だった。獣の口の端から血と涎の入り交じったものがたらたらとこぼれる。

茫然と見開いた憂末の眦からとめどなく涙が溢れた。

獣は腕を骨ごと噛み砕き、飲み込んでいった。獣は血で真っ赤に染まった憂末の下着を引きちぎった。ほとんど全身朱に染まった憂末の肌を、獣はざりざりした舌で舐めた。皮膚を剥がれるような耐えがたい痛みにも憂末は呻いた。

もう悲鳴を上げる力もなかった。

獣はごぼごぼと血が溢れるような唸りを上げた。

『ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ……』

呪文のように獣は唸り続ける。

『ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ……』

その一方で、澄んだ少年の声が何処かで悲痛な声を上げている。

『ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ……』

『ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ……』

『ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ、ニゲテ……』

どちらがどう叫んでいるのか、すぐにわからなくなった。双方の

叫びがわんわんと銅鑼のように鳴り響く。獣が喚き、少年が悲痛な声を絞る。

獣の叫びは憎悪と執着にどす黒く塗りたくられていた。少年の透明な哀願は極彩色のペンキをぶちまけられたように遮られ、聞こえなくなっていた。獣は血まみれの憂未の片脚を担ぎ上げ、棍棒ほどもある醜悪な陽物を有無を言わずねじ込んだ。

全身をふたつに引き裂かれるような激痛が走る。だが、憂未の喉にはもう悲鳴を上げる力は残っていなかった。ひゅうひゅうと空気が抜けるように喉を鳴らし、涙腺が壊れたように際限なく涙があふれた。

『ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ、ニガサナイ……』

獣は譫言のように繰り返しながら執拗に憂未を突き上げる。何の悦びもなく、まさにそれは地獄そのものの責め苦だった。

憂未はもう自分が生きているとは思えなかった。壊れた人形のように、眼を見開いたまま揺すぶられている。獣は苦しげに呻きながらおぞましい行為に没頭していた。

『ココニイルンダ、ズット、ココニ、イルンダ、ココニ、ココニ、ココニ、イルンダ』

獣は号泣し、哄笑し、狂ったように吼え立てた。焦点を失ったガラス玉のような憂未の瞳が、獣の頭上を旋回する蝶を捉えた。

ぼんやりと光り、青白い火の粉のような鱗粉をまき散らしながら、大きな蝶が飛び回っている。まるで獣の行為を止めようとしているかのようだ。しかし、獣は一顧だにせず憂未を貪り続けた。

ごぼり、と生暖かい血が大量に憂未の口から噴き出した。

光る蝶の果敢ない羽ばたきが、翳りゆく視界で最後に見た光景だった。

第4章 光る蝶

目覚めは唐突にやって来た。

薄暗い部屋の中で、憂未はしばし動けずにいた。茫然と天井を眺め、眼球だけを動かして横目で左半身を見る。

自分の肩が見えた。ゆっくりと左手を動かしてみる。布団の中から抜き出した腕にはかすり傷ひとつなかった。

憂未は弾かれたように起き上がり、布団を撥ねのけた。どちらの脚も健在だ。こわごわ脚を動かしてみたが、何ともない。指も膝も踵も臍も腿も、全部大丈夫……。ようやく肩のこわばりが解け、憂未は両手で顔を覆って長い溜め息を吐き出した。

「……何て夢……」

すべて夢だったのだ。獣に襲われたことも、脚や腕を喰われたことも。

今まで見たこともないほど凄まじい悪夢だった。夢だとわかってもしばらく手足に力が入らなかった。

枕元に置いてあった携帯電話のアラームが鳴り出す。それを止める気力も出ず、憂未はぼんやりしていた。アラームが止まる頃になつてようやく気だるく身じろぎをし、携帯電話を開いて五分おきのスヌーズになっているアラームを切った。

ベッドから降りると、気のせいかふらつくような感覚があった。

悪夢の影響か、脚がうまく動かない。よろめきながら窓辺に歩み寄り、カーテンを開けた。

外は濃い霧に包まれていた。射し込む陽光を乱反射しているのか、霧全体が発光しているように奇妙に仄明るい。

窓を開けると、ひんやりとした空気が流れ込んできた。ふと、残り香のように幽かな百合の香りをかいだような気がしたが、清涼な風に紛れてすぐにわからなくなった。

新鮮な空気を深々と吸い込むと、だいぶん頭がすっきりした。顔

を洗って化粧をすれば悪夢の残滓も脳裏から追い出せるだろう。ともかく着替えようと憂未は自分を奮い立たせてワードローブを開いた。

教えられていたとおり朝食室へ行くと、食卓には聖樹がひとり座って珈琲を飲んでいた。憂未を見てにこりと愛想よく微笑む。

「おはよう、憂未さん。よく眠れましたか」

「はい……」

憂未は無理に頷いたが、聖樹は眉をひそめた。

「何だか顔色が悪いですね」

「ちよつと、夢見が悪くて」

憂未は曖昧に笑って席に着いた。

「どうしたんです？」

「ちよつと脚を」

人狼みたいな化け物に喰われる夢を見た、とはさすがに言いにくい。憂未は当たり前障りないように言い換えた。

「脚が痛いなあって感じの夢を見たもので……」

聖樹は、ああ、という表情で頷いた。

「そういうの、僕も時々ありますよ。脚が疲れてだるいと、夢に見るんです。走らなきゃいけないのに、脚が重くて走れないとか。きつと昨日は移動で疲れたんでしょう」

そうかもしれない、と憂未は頷いた。聖樹が珈琲を注いでくれた。憂未はミルクをたっぷり入れて静かにカップを傾けた。

そのうちにメイドがやって来て、朝食一式を並べてくれた。スクランブルド・エッグにカリカリに焼いたベーコン。焼きトマトと小さなさめのソーセージ。銀のパン立てに薄切りの三角トースト。果肉たっぷりのマーマレード。グレープフルーツジュース。……

憂未は大学の卒業旅行で行ったイギリス湖水地方のB&Bを懐かしく思い出した。また少し、平常心が戻って来る。

卵を食べていると、英字新聞を読んでいた聖樹が自分のカップにお代わりを注ぎながら話しかけて来た。

「朝食が済んだら少し散歩でもいかがですか。一緒に」

憂未はまるでデートに誘われたようにドキツとした。

「ありがとうございます。……ぜひ。あ、でも沙羅ちゃんはい

「あの子はいつも朝遅いんですよ。宵っ張りですね。まだ当分起きて来ないと思います」

実際、憂未が食事を終えても沙羅は現れなかった。憂未は底が平らなサンダルに履き替えて外に出た。聖樹は玄関前のアプローチで待っていた。

先程よりは薄くなったが、やはり館の周囲には霧が立ち込めていた。振り仰ぐと、ところどころ霧を透かして夜露を含んだ梢や青空が垣間見える。小鳥の鳴き交わす声も盛んに聞こえ、高原の朝というイメージどおりの爽やかな空気に包まれていた。

歩くに連れて霧の粒子が生き物のようにゆるゆると周りを流れて行く。雲の中を歩いているような、不思議な感覚だった。湿った黒土の地面も時折霧に紛れて見えなくなる。

「すごい霧……」

思わず憂未は呟いた。さすが白霧館と名付けただけのことはある。振り向くと、背の高い白樺の木立とたなびく霧の向こうに黒い洋館がひっそりと佇んでいる様は、幻想的で神秘的ですらあった。

隣を歩く聖樹の姿も気のせいか霞みがちで、粒子の荒いモノクロ写真のようだ。それがまた聖樹の端正な相貌を引き立てているような気もする。聖樹はちよつと眉を寄せ、前方を見遙かした。

「もう少しして空気が温まればだんだん霽れると思いますよ。この辺、朝と夕方は特に濃い霧が出るんです」

「何だか道に迷いそう」

不安そうな憂未の声に聖樹は軽く笑った。

「一本道だから大丈夫ですよ。木立の中に入り込んだら迷うかもしれませんが。僕は沙羅を連れてよくここらを歩くから慣れてます」

そう言っている間にも霧は濃くなり、まるで行く先を遮るように道を塞いで何も見えなくなってしまうた。さすがに聖樹も歩みを止めた。

「うわ、今日は凄いな。これじゃ歩いても何も見えないや。引き返しましょう」

「そうですね」

憂未は何となく不安にかられて従った。このまま歩いて行ったら何処か知らない世界に迷い込んでしまいそうだ。憂未の不安を察したのか、聖樹が自分の左腕を軽く示した。

「よかつたら& amp ; # 2 5 6 8 1 ; まっってください。足元がよくないから、転んだりしたらいけない」

「はい……」

憂未はためらったが、見れば足首の辺りが定かでないほど霧が濃い。それに、聖樹の目の前で小石にでも蹴つまずいて転ぶなんてみともないところは見せたくなかった。憂未は遠慮がちに聖樹の腕に右手を添えた。

正直言つと、けっこう嬉しかったりして、胸がドキドキした。頬が緩むのが抑えられない。霧が濃いことがありがたかった。にやけた顔を見られないで済む。

まるで夢の中にいるようだ。夢で繰り返し出会った人とそっくりな人物と腕を組んで歩くなんて。夢の中のあの人と同じように聖樹は優しい。夢の中でもこんなふうに腕を組んで霧に取り巻かれた小径を歩いたような気がする。

そして家へ帰るのだ。ふたりの住む家が霧の中から現れる。白い窓枠に深紅の薔薇が絡まる、ひっそりとした黒い館。

木立と霧のあわいから影のように白霧館が姿を現す。

夢で見た家は、本当にこの館にそっくりだった。

夢と現実が交錯し、憂未は自分がどちらに居るのかわからないまま立ち尽くした。傍らで訝しげな聖樹の声がする。

「憂未さん？」

「あ、はい」

はっと眼を瞬き、憂未は聖樹を見上げた。皓齒を見せて聖樹は笑った。

「着きましたよ」

白霧館の黒いシルエットが目の前にあった。壁を這う蔓薔薇の花びらは、霧の中で朝露を含み、にじんだ水彩画のようだ。

朝食室へ戻ると、沙羅がひとり食卓に着き、つまらなそうにフォークで料理をつついていた。憂未に気付いた途端、ぱっと表情が明るくなる。

「あつ、先生」

「おはよう、沙羅ちゃん」

「おはようございます。憂未先生、朝御飯はこれから？」

「何言ってるんだ」

聖樹が呆れたように口を挟む。

「僕たちはもうとつくに済んだよ。散歩に行つて来たところさ」

「ええーっ」

沙羅は不満そうに唇を尖らせた。

「ずるーい。私も行きたかった」

「朝はだめだよ。わかつてるだろう？」

「それは、わかつてるけど。でも朝御飯はご一緒に……」

「だったら早起きなさい。そうすれば日が昇る前に外にも出られるだろう。夜遅くまで本を読んでるからいけないんだ」

沙羅は肩を竦めた。

「だって、誰が犯人なのか気になって仕方ないんだもの」

「寝る前に読むのは推理小説以外にしろって何回言ったらわかるんだ」

もつともな小言に、憂未はこっそり笑ってしまった。憂未も好きな作家のミステリを読んでいて、つい徹夜してしまうことがある。

「それじゃ、憂未先生。僕は仕事をするので、あと頼みます」

「はい、わかりました」

聖樹は憂未ににこりと笑いかけ、沙羅の頭を軽く小突いて出て行った。沙羅は桃色の舌を覗かせて兄の後ろ姿を睨んだ。憂未は笑みを抑えながら沙羅の向かいに座った。

「お兄さん、ここでも仕事してらっしゃるの？」

沙羅は口に放り込んだトマトを咀嚼しながら頷いた。

「昨夜トランプをした部屋の南側が、お兄様の書斎なの。東京からパソコンを持って来て、昼間はずっと書斎に籠もりきりよ。パソコンと電話があれば何処に居ても大抵何とかなるんですけど」

「まあ、確かに今はそうよね」

インターネットが普及して、SOHOという働き方も珍しくなくなつて来ている。ふと思いついて憂未は尋ねた。

「沙羅ちゃんもパソコン持ってるの？」

「持ってるわ。そうだ、使いたかったらいつでも言ってるね」

「ええ、ありがとう」

憂未も自宅にパソコンを持ってはいるが、デスクトップ型なので持ち運びが出来ない。テレビのないここではニュースぐらいインターネットでチェックした方がいいだろう。

憂未は沙羅が食事を終えるころ席を立った。今日の授業に使う本を選んでおくのをすっかり忘れていた。とりあえず今日は沙羅の学力を見て計画を立てるくらいで終わってしまうだろうが……。教室として使うのは二階の北側の部屋だということを確認し、憂未は朝食室を後にした。

階段室まで来た時だった。目の前を、すつと光るものが通った。

顔を上げると、薄暗い階段の手摺りの辺りを青白く光る蝶がひらひらと飛んでいた。

憂未は昨夜の悪夢を思い出した。もうだいぶイメージは薄らいで来ていたが、怪物じみた獣の頭上を狂ったように飛び回っていた蝶が一匹いたことははっきりと覚えている。

蝶、それとも蛾だろうか。確か、蛾の中には青白くて大きな種類もあったような気がする。ひょっとしたら、夢現に部屋の中を

飛び回る蛾を見ていたのかもしれない。憂未はその蛾だけか蝶だけかをよく見てみようと思いで追った。

どうも羽の形としてはアゲハチョウに似ているような気もする。だが、アゲハチョウのような黒いすじは見当たらない。全体に夜光塗料のような青白い感じで、模様もなかった。何処かに止まらないかと見ていると、蝶はひらひらしながら階段の上の方へ移動し始めた。憂未は手摺りに掴まりながら後を追った。

二階のホールはかなり暗かった。四方を壁に囲まれていて、直接外光が入るのは玄関上のバルコニーに出る扉だけなのだ。扉は区切られたガラス張りだったが、厚めのレースがかかけられており、また北向きでもあることから薄明が射しているだけだった。

蝶は階段を昇りきった辺りを飛び回っていたかと思うと、館の西翼へ続く廊下の方へ消えた。急いで後を追ったが、角を曲がった時にはもうその姿は見えなくなっていた。この先には馨の病室まで廊下がまっすぐ伸びているだけだ。窓から外へ出たのだろうか。廊下の先まで探しに行くのはためらわれた。

何となく、馨の部屋には足が向かない。ただでさえ薄暗い館の何処よりも暗い、奇妙に澱んだ闇の気配に満ちた部屋。むせ返るような濃密な百合の香り。……

そうだ。あの息が詰まりそうなほどの芳香の記憶が、あんな悪夢を見せたのだ。きつとそうに違いない。

満開のヤマユリ。一輪だけでも匂いのきつい花なのに、花瓶には二、三本は挿さっていた。一部屋にあんなにたくさん置くななんてどうかしてる。しかも病人のいる部屋に。いくら百合の香りが好きだと言っても、あれはちょっとやりすぎではないだろうか。

(そういえば、あの看護婦さん。どうしてるんだろう。)

食事の時も全然姿を見かけない。部屋が暗くて顔もよくわからなかった。ただ印象に残っているのは綺麗に揃えられた両脚と、腿の上で重ねられていた指の長い白い手だけ。まるでマネキンがそこに座っているように、生きてる気配を感じなかった。

憂未は頭を振った。変な夢を見たせいで、まだ頭がうまく働いていないのだ。とにかく、授業に使う本を出さなければ。段取りを考えながら、憂未は自室の手前にある予備室のドアを開けた。大きな上げ下げ窓の下が開いていて、透ける白いカーテンがさつと翻る。ドアを閉めると同時に背後で声がした。

「どうして帰らなかったの」

憂未は飛び上がった。蒼白になって振り向くと、部屋の隅に昨日見た少年が立っていた。昨日とまったく同じ、白い半袖シャツに蝶ネクタイ、サスペンダー付きの黒い半ズボン。ただ、昨日よりもずっと顔が青白く血の気が失せて見える。

「あ、あなたいったい……」

憂未は震える声で囁いた。本当に幽霊なのだろうか。確かめようにも、手を伸ばして触れるなどんでもない。それどころか一歩も近寄りたくない。がくがく震えながら少年の背後を見て、憂未は限界まで眼を見開いた。

少年には影がなかった。窓から射し込む光で憂未の影は壁に映っているにも関わらず、少年の後ろには薄い濃淡すら見えないのだ。

「……誰なの、あなたは」

少年は答えず、悲しげな黒い瞳でじつと憂未を見つめている。

「昨日、あんなに言ったのに。聞かないからあんなことになるんだ」
はっと思ひ当たり、憂未は少年を睨んだ。

「あなたね！ あなたがあんな酷い夢を見せたんでしょ」

少年の表情はますます悲しく絶望的になった。少年はゆるゆると首を振った。

「……今ならまだ間に合う。早く逃げて。逃げなきゃだめだよ、」

最後に呟いた言葉はよく聞こえなかった。憂未は勇気を奮い起こして尋ねた。

「どうして逃げなきゃいけないの」

「捕まってしまう」

「何ですって？」

「捕まってしまうよ。僕みたいに」

少年の瞳から、突然涙がこぼれた。それは血のように赤かった。

憂未は短い悲鳴を上げ、口許を手で押さえた。少年の頬を赤い涙が伝ってゆく。

「捕まってしまったら、もう逃げられない……」

コンコン。

場違いなほど明るく、ノックの音が響く。無造作にドアを開き、

沙羅が顔を覗かせた。そちらに一瞬気を取られ、視線を戻したその時にはもう少年の姿は消えていた。憂未は口許を押さえたまま無意識に首を振った。訝しげに沙羅が呼んだ。

「先生？ どうしたの。何かあった？」

憂未は黙って首を振り、そそくさとカーテンを閉めた。沙羅は部屋の中をぐるりと見回した。嗚咽を堪えているような憂未を見上げ、沙羅は細い眉をひそめた。

「どうしちゃったの、先生。まるで幽霊でも見たような顔してる」

憂未はぎよっとして沙羅を見た。硬玉のような光沢を帯びた底光りのする瞳で、少女はじつと憂未を見上げている。まるで何もかも見通しているかのような透徹としたまなざしだ。憂未は声を震わせ、て呟いた。

「……見たの」

「見たって、……幽霊？」

憂未は頷いた。きつと笑われる。いい大人が何を言っているのかと。だが、沙羅は小さく溜め息をつく、後ろ手を組んで居心地悪そうにもじもじと足を動かした。

「やっぱり」

「……やっぱり、って？」

「出るのよ、コジ」

沙羅は上目遣いで憂未を見た。

「幽霊、本当にいるの」

憂未は茫然と沙羅を見下ろした。沙羅は言い訳のように部屋の中を歩き始めた。

「先生を怖がらせちゃいけないと思って黙ってたんだけど、ここね、幽霊が出るの。本当に。私も時々見かけるわ」

沙羅は困ったような表情でゆっくりと歩き回っている。

（冗談のつもり？）

憂未をからかって愉しんでいるのだろうか。それにしても口調が普通すぎるような気がする。まるで虫が多くて困るわとも言ってしまうに、少しうんざりした調子で、ごく普通の会話の延長のように沙羅は話を続けた。

「幽霊つて、見える人には見えるけど、見えない人には全然、でしょ？ 先生がどうなのかわからないし……。それに、幽霊つて言っても別に悪さをするわけじゃないのよ。『カンタヴィルの幽霊』みたいに鎖をじやらじやら鳴らして歩き回ったり絨毯に血の染みを作ったり冷たい手で突然触ったりはしないわ。ただ、暗い隅にぼつんと立っていたりするだけなの。ほら、この家はもともとフランスにあった古い館を移築したものでしょ。きつと向こうから幽霊もくっついて来ちゃったのよ。別に家付き幽霊はイギリスの専売特許つてわけじゃないものね」

「……それは小さな男の子の幽霊なの？」

「いろいろだわね」

沙羅は立ち止まり、小首を傾げて考えた。

「男の子は、私はあまり見ないわ。大人の女の人や男の人が多いかしら。」

「そ、そんなにたくさん？」

憂未はびくびくして辺りを見回した。こんな素敵な館がまさか幽霊屋敷だったなんて、思いもしなかった。憂未の恐れ戦いた様を見て、沙羅は慌てて手を振った。

「そんな毎日出て来るわけじゃないわ。時々よ時々。それにね、本当に何にもしないの。ただの通りすがりみたいなものよ」

通りすがりの幽霊……。ちょい役でもいてほしくない。

「でも、私が見た男の子は変なこと言ったのよ」

憂未はとにかく怖くて、辺りを横目で窺いながら訴えた。

「早くここから出て行けって言うの。私、幽霊さんに気に入られてないみたい。何かされたらどうしよう」

それを聞くと、沙羅は憤激して眉を吊り上げた。

「まあ、ひどい。先生にそんなこと言うなんて。絶対、許さないんだから！」

沙羅は机の抽斗を開けて何か探し始めた。

「……沙羅ちゃん？」

「確かここに……。あつた！」

取り出したのは赤いチョークだった。呆気にとられる憂未を尻目に、沙羅は部屋の隅に屈み込んで何やらごそごそと書き始めた。

「何してるの？」

「おまじない」

真剣な声が返って来る。見ると、沙羅は壁と床が接する辺りに小さな星型を描いているのだった。そこが終わると、別の隅に飛んで行って、同じものを描き始めた。

「それを描くと幽霊が出ないの？」

「そうよ」

自信満々に沙羅は答えた。あつというまに部屋の四隅に星型を描き終え、沙羅は予備室を飛び出した。

「先生のお部屋にも描いてあげる」

「だめよ、入っちゃ」

慌てて憂未は沙羅を引き止めた。

「カーテンが開いてるの。日光に当たっちゃいけないでしょ？」

「そうね」

しぶしぶ沙羅は頷いた。

「でも、心配だわ」

「大丈夫、後で自分で描くから。チョークを貸して」

赤いチョークを受け取り、憂未は予備室へ戻った。

「四隅に星型を描けばいいのね？」

確認すると沙羅は頷いた。憂未はチョークを机の上に置き、積んであった本を手当たり次第に抱えた。

「遅くなっちゃったわ。さ、始めましょう」

「先生」

「なあに」

「帰ったりしないわよね？」

憂未は思わず沙羅の顔をまじまじと見た。まるで泣き出しそうに悄気た表情をしている。憂未は両手で本を抱えながら大きく頷いた。「もちろん、帰ったりしないわ。言ったでしょ、まだ来たばかりなのよ。そんなに早く追い出されたら困っちゃう」

「よかった」

「沙羅ちゃんがおまじないをしてくれたから、もう幽霊さんも出ないでしょう」

「そうね。でも、先生の部屋にも忘れずに描いておいてね」

「はいはい」

（おまじない、か。）

自分が中学生くらいの年頃には、やはりおまじないとか占いとか、そういうものにすごく興味があり、それなりに信じてもいたものだ。そういうものは時代が移っても変わらないらしい。

弾むような足取りで先を行く沙羅を眺め、憂未はほのぼのとした気分微笑んだ。

第5章 緋い室

午前中の授業は沙羅の学力を見るための小テストで終わった。三教科しか出来なかったが、沙羅は昼食のあと身体を休めるために昼寝をする習慣だそうなので、再開はその後ということにした。

昼食の席に聖樹は姿を見せなかった。沙羅によると、いつも書齋で仕事をしながらサンドウィッチのような軽いもので済ませるそうだ。

沙羅が自室に引き上げたあと、憂未は自分の部屋へ戻り、教えられたとおりチョークでドアの隅に星型を描いた。

我ながら子供っぽいとは思ったが、これ以上わけのわからない幻影に悩まされるくらいなら迷信でもなんでも効果がありさえすればいい。

しばらくの間、睨むように部屋を見回していたが、幽霊が出るかどうか見張っていても仕方ないので、読みかけの文庫本を持って外に出てみることにした。

霧はとうに霽れてすっきりした青空が見えていた。綿あめのような白い雲の浮かぶ青い空、白樺とカラマツの林。からりとした涼しい風。

生き返る心地がする。きっと東京は今日も真夏日だろう。梅雨が空けた途端、連日のように猛暑に見舞われているのだ。

(今夜、智子ちこに電話してみようかな。)

憂未はこの仕事を紹介してくれた友人の顔を思い浮かべた。

(こっちは涼しくて快適よ、なんて言ったら、きっと羨ましがるだろうな……。)

資格があつたら自分が行きたいと、繰り返し言っていたのだから。憂未は今朝聖樹と散歩した道をぶらぶらと歩いてみた。彼が言っていたとおり迷いようもない一本道なのだが、何となく歩くのは白霧館が見える範囲内においておいた。まさか、戻って来たら館が消え

ていた、なんてことがあるわけもないが、ふとそんな想像を巡らせてしまうような現実離れた雰囲気がこの館には確かにある。

木立に見え隠れする黒い館を眺めつつ、ゆっくりと引き返した。最初、霧の中から現れた建物を見て何処となく不気味に思えたのが嘘のように、館は美しかった。

黒い外壁のために実際よりも小さく見えることが今ではよくわかる。見た感じよりもずっと広く、奥行きがあるのだ。

滴るような緑に包まれて、黒い館は声高にその存在を主張するのではなく、ひっそりと風景に溶け込むようにしてそこに在った。

憂未は玄関前で立ち止まり、ちよつと考えて館の左手へ行つてみた。撞球室の前を通り、半円形に突き出した格好の喫煙室の角を曲がる。白い木製の階段が庭へ降りていて、喫煙室の扉は開いていた。ここから入っても構わないだろう。

その隣は聖樹の書斎のはずだが、窓にはカーテンが下りていた。聖樹も日光が苦手なのだろうか。ふと考え、すぐに思い直す。ここへ来る時、カブリオレの幌を思いっきり開けていたではないか。

そういえば車庫は何処にあるのだろう。西翼の下あたりだろうか。館の東側から南側に出ると、美しく輝く緑の芝生が広がっていた。館からなだらかな傾斜を描きながら奥の木立へと続いている。テラスの前や木立の手前あたりは花壇になっていて、綺麗な花がたくさん植わっていた。

高い梢がざわざわ鳴る音以外には、人の声も何もしない。美しい庭は少し寂しいくらいに静かだった。

憂未は何故かぞくりとするものを覚えた。美しく快適に整えられた場所に人が居ないというのは、どこか異様な恐ろしさがある。

マリー・セレスト。

唐突にそんなイメージが浮かんだ。

無人で漂っていた客船。船内は争った様子もなく何もかもが整然としていたという。乗客と乗員が一人残らず消えていた以外は。

憂未は頭を振って益体もない連想を追い払った。

ここの住人はちゃんと存在している。沙羅は自室で昼寝をしているのだし、聖樹は書斎で仕事。病室には警と看護師がいる。メイドたちだって、きつと何処かで働いているか休むかしているのだ。周囲に他の別荘がない一軒家だから、静かなのは当たり前だ。東京の騒音に慣れてしまっているから、実際以上に静かに感じてしまうのだろう。

現代の日本人は騒音に鈍感なのだと言ったことがある。電車やバスでは企業広告を含むアナウンスがひっきりなしに流れ、街頭放送も途絶えることがない。

いつからか、私たちは静寂に耐えられない体質になってしまったのだろうか。昔は蛙が池に飛び込む音にさえ興趣を覚えたくらいなのに。

ただ風の音しかしないというだけで、この世界に自分ひとりが取り残されたような気がしてしまう。誰もが自分の存在に現実感を持ってないのかもしれない。

とりとめもない不安から、実体のないものに依存している。絶え間ない騒音やリアルな仮想現実、意味もなく頻繁に取り交わされる携帯メール。

そして、自分は決して傷つくことのない、身勝手な優しい夢。

「憂未さん」

快活な声が呼ぶ。振り向くと、テラスに聖樹が立っていた。その立ち姿にどきりとする。それはまさしく夢の中のあの人そのものだ。今、自分はどちらの側に立っているのだろう。夢か、それとも現実か。呼んでいるのは聖樹なのか、それともあの人なのか。

聖樹は少年のような屈託のなさで手を振った。

「一緒にお茶をどうですか」

憂未は微笑んだ。

どちらだって構うものか。これが夢ならいつかは覚める。どうしてしばしの間幸せな夢に浸っていていけないというの？

これが現実だとしたら、二カ月もすればまた忙しない日常へ戻ら

なければならぬのだ。どうしていま、ハンサムで人当たりのいい青年の誘いを断る手があるのか。

いずれにせよ、ここは別世界なのだ。深い霧と木立に囲まれた小さな別世界。ここにいるのは聖樹と沙羅と私だけ。残酷で高慢な生徒も、自分に都合のいい女しか認めない身勝手な男も、信頼を踏みにじった弟もいない。

理想の恋人そのままの青年。素直で可愛い理想的な生徒。どうして彼らから離れて汚穢に満ちた現実へ急ぎ帰らなければならぬのか。

「……いま行きます」

憂未は黒い館に向かってゆっくりと歩き出した。

ほら、聖樹が私を待っている。まるで家族のように出迎えてくれる。

『今ならまだ間に合う……』

頭の中で、警告を発する少年の幻像が、脆い砂のように崩れてゆく。

『逃げるんだ……』

(いやよ。私は帰らない。)

白い木の階段を一段一段踏みしめるように登る。

『捕まってしまうよ』

少年が血の涙を流し、光る蝶が狂ったように闇に舞う。

『どうしてわからないの？』

朝食室の前のテラスには鑄鉄製の優美な脚のついたテーブルと椅子が出されていた。モザイクタイルを貼ったテーブルの上に、銀のポットとアラバスク模様のカップがふたつ。憂未がテラスに上がると、聖樹がすかさず椅子を引いてくれた。

憂未は椅子に座り、聖樹を見上げて微笑んだ。

見知らぬ少年の声など、気にしなくていい。

『捕まってしまうたら、もう二度と戻れないんだよ。僕みたいに』
戯言よ。そんなもの。

ゆったりとした歓談のうちに時は過ぎ、聖樹は書斎へと戻って行った。

また夕食の時に、と言ってにこりと笑った聖樹の顔を思い出すと、自然と頬が緩んでしまう。聖樹は、もう何年ものあいだ、まさしく夢に見ていた人にそっくりだ。好意を持たずにいられるわけがない。はたと我に返り、ともすれば茫洋としてしまう頭を、憂未は激しく振った。

(いけない、いけない。これからまた仕事なんだから。)
残り二教科のテスト問題を持ち、憂未は教室へ戻った。

薄手のカーテンが引かれた部屋は無人だった。灯も点いていない。壁面のスイッチを入れると、すりガラスで花を象ったシャンデリアがふたつ点灯する。

午前中、沙羅が使っていたテーブルの上には何もなかった。お昼に引き上げる時、沙羅はノートもペンケースもすべて持ち帰ったのだ。

ギリシャのスフィンクスを象った置き時計を見ると、約束の三時を少し過ぎていた。まだ寝ているのだろうか。あまり長く昼寝をすると夜寝られなくなる。沙羅が宵っ張りなのはもしかして昼寝にその一因があるのかもしれない。憂未は沙羅の部屋に行ってみようと教室を出た。

確か、沙羅は北東側の続き部屋を使っているのだと言っていた。ホールの角にはドアがふたつ直角に並んでいる。どちらから入ったものかと考え、とりあえず両方ノックしてみたが返事はなかった。

ノブを回してみると角部屋の方は鍵がかかっていた。真ん中の部屋は開いている。ドアを細く開けて覗いてみたが、暗くてよくわからない。呼びかけても返事はなかった。やはりまだ寝ているのだろうか。憂未は部屋に入り、ドアを閉めた。

部屋はカーテンを閉め切り、ごく小さな電灯だけが燈っていた。天井の中央には古い教会にでもありそうな黒い鉄製のシャンデリアが鎖で吊るされていたが、灯は点いていない。部屋を照らしているのは壁に取り付けられた燭台風の電灯だった。

大きな上げ下げ窓を覆うカーテンは床まで届く緋色のベルベット。遮光になっているのか、まるで暗幕のようだ。壁は憂未の肩辺りまでが作り付けの本棚になっており、その上には壁を埋めつくすかのように様々な絵画が飾られていた。

部屋の中央、灯の点いていないシャンデリアの下にはどっしりとした円形のテーブルがあつて、いろいろな物がごたごたと載っている。

部屋の奥に天蓋付きの寝台があつた。馨の部屋にあつたのと同じような古風な造りで、誰かそこで眠っているようだ。やはり沙羅は寝過ごしているらしい。起こさなければ、と憂未は足を踏み出した。不意に右手できらりと何かが光り、憂未はぎくつと足を止めた。人の顔が見えて一瞬竦み上がったが、それは人形だった。脚の長い装飾的な椅子に座つた、六十センチほどの人形だ。アンティークドールだろうか。

近寄つて見てみると、それはいわゆる球体関節人形だった。精緻な美しい少女の顔が憂未を見返している。現代作家のものなのだろう。顔だけはアンティークドールのそれとはかなり異なっている。

あるかなきかの笑みを含んだ、ふつくらとした唇の艶やかさ。焦点が微妙に合っていないような、何処を見ているのか判然としない不思議なまなざし。ガラスの瞳は昏い赤、髪はゆるやかに波うつ黒。細い首に古風なチョーカーをつけ、コルセット風の金と緋色のドレスを着ている。そつと指を伸ばして頬に触れてみると、かすかにざらりとして冷たかつた。

ビスクなのだ。

憂未は腰を屈めて少女人形の顔を覗き込んだ。

見つめるほどに惹き込まれていくような、冷艶な表情をしている。

人形には何処か沙羅に似た面影があった。彼女から無邪気で人懐こい笑顔を消し去ったら、その美貌に秘められた蠱惑的な魅力がきつとこんなふうにあやしく輝き出すのである。仄昏い灯を映すガーネットの瞳は、謎めいた微笑をたたえて静かに憂未へと向けられていた。

もつと見ていたかったが、そういうわけにもいかない。憂未は身を起こし、そろそろと歩き出した。足元が暗い上、床の上にも無造作に物が置かれている。うっかり蹴飛ばして壊れ物でもあったら大変だ。

作り付けの本棚には古めかしい革の装丁を施された本がぎっしりと詰まっていた。全部洋書で、かすれた背表紙には英語やフランス語らしき題名がどうにか見て取れる。しかし、見覚えのあるタイトルは見つからない。どうやら小説や詩の類ではないようだ。

そして、書棚の上の壁面を覆う様々な絵画。何気なく見上げ、憂未は眼を瞠った。

赤い筋肉を骨にまとわりつかせた骸骨がこちらを見ていた。何故か顔だけは生きているようで、年齢も性別もはっきりしないなめらかな顔に、かつらのような白い髪を長く垂らし、骨だけの手で黒い屍衣のようなマントを広げている。

これは死神だろうか。何とも言えない不吉な雰囲気だ。憂未は気味が悪くなって別の絵に視線を移した。

しかし、この部屋に飾られた絵画はどれも一風変わったものばかりだった。ラファエル前派や象徴派の絵画が多いようだが、それにして……。

憂未のわかる限りでも、クノツプフの『愛撫』、『眠れるメドューサ』、『モローの『スフィンクス』、『サロメ』、『ウォーターハウスの『ヒュラスと妖精たち』、『シャロットの女』、『エドワード・ロバート・ヒューズの『夜が星をしたがえて』等々……。

暗澹たるルドンのリトグラフ。悪夢を写し取ったようなゴヤの連作『カプリチヨス』。そして、憂未の知らないさまざまな廃墟の絵。

寝台からずり落ちそうなほどのけぞった女の胸にゴブリンのような怪物が座り込んでいる絵もある。

部屋の奥へ進むほど、描かれる世界は暗く混沌としてゆくようだ。憂未は息苦しさを覚え、暗黒の絵画に埋もれた壁に背を向けた。

今度は大きなテーブルが目の前にあつた。さまざまな様式の椅子がテーブルを囲んでいる。最初から統一する気がないのか、ひとつとして同じ椅子はなかった。テーブルの真ん中には五つに枝分かれた燭台が載っていて、それぞれで細い蠟燭が燃えている。

何気なく燭台を眺め、憂未はぎくりとした。

それは人間の手首を象っていたのだ。

蠟燭が燃えているのはそれぞれの指先だった。もちろん作り物だろうが、骨のかたちが浮くほど貼りついた皮膚は奇妙に又メ又メしていて、死蝋というものを思わせた。

燭台の隣にはくすんだ金色の鳥籠。蔓草が絡んだような凝った造りで、中は空っぽだ。あちこち欠けた小さな怪物の石像。中世の騎士のミニチュア人形。玩具のギロチンの刃は実際に切れそうなほど不吉な光をはらみ、悪い冗談のようにバービー人形が首枷に挟まれている。

開かれたまま放置された本には人体解剖図が載っていた。すべて写真で、若く美しい女性が内臓をさらけ出して横たわっていたり、眠るように眼を閉じた青年の頭蓋が切り取られて脳の断面が見えていたりする。

側に置かれた大判のノートにはそこから写し取ったらしい頭蓋骨や手足の骨、心臓などの臓物の絵が描かれていた。

憂未は吐き気を催してよろよろと後退った。

いったいここは何なのだ？ 沙羅の部屋ではないのか。こんな不気味なものばかり飾ってある部屋なんて。

踵が何かに当たって一瞬倒れそうになる。どうにか踏みとどまり、憂未は泣きそうになりながら振り向いた。大きな肘掛け椅子に骸骨が座っていた。反射的に喉がぐつと鳴る。変な具合に悲鳴を飲み込

み、憂未は喘いだ。

まさか、本物の骸骨のはずがない。きっと等身大の骨格標本だ。もちろんプラスチックか何かで出来た……。

だが、骸骨が座っている椅子が何なのかに気付いて、憂未は飛び出しそうなほど眼を見開いた。その椅子は表面すべてに鋭い棘が付いていた。こんなところに座れるわけがない。つまり、これは普通の椅子ではない。拷問用の椅子なのだ。

見れば骸骨は両手首と足首を革のベルトで椅子に括りつけられている。そして、膝の上には重しが載っていた。憂未は無意識に首を振り、顔を背けた。

よろよろと歩き出すとまた目の前に何かが現れた。今度はずんぐりした等身大の人形のような。優しげな女性の顔が見て取れる。マリア像だろうか。三角形の頭巾を着けて、穏やかに微笑んでいるようにも見える。だが、首から下はマントで覆われたようになっており、腕も脚もなかった。憂未は、有名な処刑道具 鉄の処女 を思い出した。

ギギ、と奇妙な音がした。見ると像の真ん中に切れ目が入っている。観音開きに開くようになっていたのだ。

(まさか、本当に……!?)

触れもしないのに、像はゆっくりと懐を開いてゆく。憂未は金縛りにでもあったように動けなかった。内部に仕込まれた無数の鋭い針が灯を反射して鈍い光を放った。それがどうしても赤く濡れているように見えてしまう。

中は空だった。憂未はほっと肩を下ろした。悪趣味な人形も骸骨も入っていない。ただ、像の底に赤い薔薇が一輪、落ちていた。仄昏い灯のもと、薔薇は驚くほど瑞々しく艶めいて見えた。まるで流されたばかりの血のように……。

射竦められたように眼を離せないでいると、薔薇の傍らにぼたりと小さな雫が落ちた。それは花びらと同じ色をしていた。

またひとつ、ぼたり。無数の針の先端から、ひとつ、またひとつ

と赤い雫がこぼれる。血の滴る音が静まり返った部屋に鮮明に響いた。

ぼたり。

ぼたり。

ぼたり。

……

「いやあああつ」

憂未はついに悲鳴を上げた。部屋の奥の寝台へ駆け寄り、眠っている沙羅を必死に揺り動かす。

「沙羅！ 起きて、沙羅！」

だが、沙羅は眼を覚まさなかった。固く瞼を閉ざしたまま、静かに横たわっている。憂未は恐る恐る沙羅の頬に触れてみた。

冷たい。

滑らかな頬にはぬくもりのかけらもなく、固く冷えていた。少女は眠ったまま死んでいた。

「沙羅……！」

「なあに、先生」

茫洋とした声が背後から聞こえて来た。憂未は悲鳴を上げて振り向いた。白い袖無しのネグリジエを着た沙羅が、眠そつに眼をこすっている。

憂未はすっかり混乱して寝台に横たわる沙羅と欠伸をしながら立っている沙羅を交互に見た。沙羅は欠伸を噛み殺し、顔をしかめた。「ごめんなさい、先生。目覚ましが止まっていたの。電池が切れちゃったみたい」

「沙羅……？」

「はい？」

憂未の様子がおかしいのにようやく気付き、沙羅は訝しげに首を傾げた。寝台の傍らにへたり込んでいる憂未を見て、眼を丸くする。

「まあ、先生。どうしたの。気分でも悪いの？」

「い、いえ……」

沙羅は寝台の上の自分を見て、得心が行ったように頷いた。

「ああ、それ。よく出来てるでしょ」

「沙羅ちゃん……、これは……」

「蠟人形よ、それ」

沙羅はこともなげに答えると、憂未の腕を取って助け起こした。

「蠟人形……？」

「ええ、そう。私の寝室はこっち。ここは違うの。勉強部屋よ」

沙羅は憂未の手を引いて隣室へ導いた。ドアを抜けると眩しいくらいに電灯が点いていて、憂未は思わず眼を細めた。

明るさに慣れると、そこは隣室とはまったく異なる別空間だった。厚いカーテンが同じように引かれてはいるが、ロココ調の花柄だ。室内を照らすシャンデリアは白い枠に花やビーズが飾られた可愛らしいもので、細長い蠟燭型の電球が皓々と燈っている。

壁は珪藻土で、塗り跡がほどよく残っている。壁の下半分は黒褐色の腰板張り。置いてある家具はやはり湾曲した猫脚付きだが、どれも新しく白い家具だった。いかにもロマンチックな女の子の部屋という感じだ。机の上には薄型のノートパソコンも置かれている。

暖炉の上に一枚だけ、大きな絵がかけられていた。金色の装飾額縁に入った絵は、小舟に横たわる若い女性を描いたもので、どうやらリトグラフのようだ。マントルピースの上には天使の飾りの付いた燭台と小皿に盛ったポプリが飾られていた。

くすんだ金色の枠がついた寝台は枕がずれ、上掛けがめくられたままだ。確かに今起きたばかりらしい。沙羅は憂未の手を放し、ワードローブに向かって歩きながら可愛らしいピンクの二人掛けソファを示した。

「その辺に座って待っていてくださる？　すぐに支度するわ」

「え、ええ……」

憂未は落ち着かない心持ちのまま、おどおどとソファに腰掛けた。着替える沙羅に背を向け、ちょうど眼に付いた本棚を見るともなしに眺める。『人狼』という単語が飛び込んで来てどきりとしたが、

それは憂末も読んだことのある推理小説のタイトルの一部だった。そういえば、わりと最近その小説を読み直したのだ。そのせいで人狼のような化け物が出て来る夢を見たのかもしれない。

印象に残った本や映画がカラージュされたような夢を見ることはこれまでもよくあった。思っていたよりも影響を受けやすい質なのだろうか。

沙羅はミステリが好きなので、その手の文庫やノベルスが並んでいた。古典的な怪奇小説やゴシック小説、ファンタジーの本に混じって、沙羅の好みに沿ったファッション雑誌もある。年頃の女の子らしいところがよくやく見えて来た。

「本当にごめんなさい」

着替えながら沙羅が詫びた。

「てつきり動いていると思って、よく見ないで目覚ましをかけて寝ちゃったの。隣の部屋で先生の声がして、やっと眼が覚めたのよ」

「いいのよ。仕方ないわ」

髪にブラシを当てながら、沙羅はふたたび謝罪を繰り返した。

「……それより沙羅ちゃん。あの、隣の部屋のベッドに寝てる人形は」

「よく出来てるでしょう」

沙羅は嬉しそうに応じた。

「あれを作るために写真を百枚以上撮ったのよ」

「そうなの。でも、どうしてそんな人形……」

「だって、日本は火葬でしょ」

沙羅は唐突なことを言い出した。憂末はわけがわからず、そうね、と応じた。

「でも私は土葬にしてほしいの。絹張りのクッション付きの素敵なお棺に入れてもらって、この家のお庭に埋めてほしいのよ。蠟人形の屍体なら腐ることもないでしょう。永遠に美しいままでいられるわ」

ブラシを手にしたまま沙羅は振り向き、不思議な笑みを浮かべた。

「私ね、十歳の時から毎年蠟人形を作ってもらっているの。いつ死んでもいいように。隣で眠っているのは今年の私よ。去年までの私は地下室にいるわ。ちゃんと柩に入れてね。私は納骨堂って呼んでいるの。本当はカーヴなんだけど」

柩の隣にワイン棚があるのよ、と沙羅は楽しげに笑った。憂未は呆気にとられて無邪気な沙羅を眺めた。

「……どうしてそんなこと」

「だって私、もうすぐ死ぬんだもの」

沙羅の声はまるで悲愴感がなく恬淡としていた。憂未はびっくりして腰を浮かせた。

「何言ってるの。そんなわけないじゃない」

死ぬような病気とは聖樹は言わなかった。ただ日光に過度に反応して火傷するのだと、そう言っただけだ。それとも沙羅の手前婉曲に言っただけなのだろうか。

「大丈夫よ、先生。私は死んでも死なないわ」

沙羅はまたしてもわけのわからないことを言い出した。ひよっとしてまだ眼が覚めずに寝ぼけているのだろうか。それとも憂未をからかっているのか。

「何を言っているのよ、沙羅」

「ねえ、先生。私、お日様に当たれないでしょ。それって、もしかしたら私が吸血鬼だからだとは思わない？」

「吸血鬼、って……」

どうも突拍子もないことを言い出す。やはりからかわれているのか？ しかし沙羅は至極真面目な顔で憂未を見つめていた。

「私、吸血鬼なんじゃないかと思うの。吸血鬼にはね、生ける吸血鬼と死せる吸血鬼がいるのよ。ルーマニアでは、現在は生きていくけど死後は吸血鬼になることが運命づけられた者のことを生ける吸血鬼と言ってますって。生ける吸血鬼はモロイイ、死せる吸血鬼はストリゴイイと呼ばれていて、モロイイは死ぬとストリゴイイになるの。そしてモロイイはね、たいてい女なのよ」

沙羅はブラシを置き、滑るように部屋の一角へ歩み寄った。そこには脚の長い、彫刻を施した椅子があり、両手で持てるくらいの子人形が座らされていた。昏いガーネット色の瞳。波うつ艶やかな黒髪。謎めいた微笑……。憂未は思わず息を呑んだ。

沙羅は椅子の傍らに屈み、人形に無邪気に頬を寄せた。

「綺麗でしょう。名前はリリトよ」
リリト。

何処かで聞いたことのある名前だ。でも、何だっただろう……。

「ねえ、先生。私が死んだらこの子を形見にあげる。この子は天使よ。私が死ねば天使になるの」

憂未は混乱した。あの人形は隣の部屋にあっただはず。いつのまに移動したの？ 沙羅が持つて来る時間などなかった。それともあれは幻？ 最初から、ここであの人形を見たのだった？

「私たちが似てるってお兄様は言ってたわ。でもどうかしら。自分ではわからない。先生はどう思う？」

「どうって……」

憂未は無意識に喘いだ。そう。確かに似てると思った。本質的な何処かが。人形の不可思議なまなざしに奇妙な圧力を感じる。人形が笑っているような気がする。私を憫笑している。

「ねえ、先生。この子を私だと思って、ずっと私のこと忘れないでね……」

混乱して茫然としている憂未を、沙羅は真剣な顔で見つめていた。かと思うと、突然破顔して声を上げて笑い出した。

「あはははは。信じた？ いやあん、憂未先生ったら」

「沙羅っ」

やはりからかわれたのだ。憂未はかんかんになって立ち上がった。笑いすぎて涙を滲ませながら、沙羅は両手を合わせて拝むふりをした。

「ごめんなさい。先生があんまり可愛いから、ついからかってみたくなったのよ」

十歳以上も年下の少女から可愛いと言われて喜べるものか。憂未は憤然と眼を吊り上げた。

「か、可愛いって、もしかして馬鹿にしてるの!?!」

「違う違う。そんなんじゃないの。本当にごめんなさい」

沙羅は身を縮めてしきりに謝っている。あまり本気で腹を立てるのも大人げないかと思いい、憂未は腕を組んで沙羅をじろりと睨んだ。「もう、大人をからかうんじゃないわよ。私はこれでもあなたの先生なんですからね」

「はい。わかってます」

沙羅は殊勝に頷いた。

「もう二度と変な冗談は言わないわ。だからお兄様に言いつけたりしないでね」

「今度こんなことしたら言いつけます」

「だからもうしないってば。ああん、先生、信じてよ」

「……わかったわ。まったくもう、私は本気で心配したんだから」

「ごめんなさい」

沙羅はぺこりと頭を下げたかと思うと、憂未の腕をぐいっと&a
mp ; # 2 5 6 8 1 ; んだ。

「お詫びに私の宝物を見せてあげる。こっちへ来て」

沙羅は憂未を引っ張って隣の部屋へ歩き出した。憂未は仰天して抗った。

「い、いいわよ。見なくても。さっき見たから」

「ねえ、先生はああいう絵は好きじゃない? 私、ラファエル前派が大好きなの」

「別に嫌いじゃないけど」

あの変な拷問椅子とか骸骨とかは理解不能だ。沙羅のこの可愛い頭の中はいったいどうなっているのだ?

沙羅は憂未の抵抗など気にも留めず、ドアの脇にあるスイッチを入れた。ぱっと天井のシャンデリアが灯る。思ったよりワット数の高い電球が付けられていたようで、部屋は皓々と照らし出された。

大きな肘掛け椅子がすぐ眼に入り、憂未は竦み上がった。しかし、何かがおかしい。さっきと違うような気がする。沙羅は憂未をぐいぐい引つ張って肘掛け椅子に歩み寄った。

「紹介するわね。彼はグレゴリーよ」

古びた赤い革張りの肘掛け椅子に鎮座ましましているのは、スーツを着込み、ソフト帽を被った骨格標本だった。

「……グレゴリー？」

沙羅は頷き、昔の美男俳優の名前を上げた。憂未も知っている名ではあったが、どうして彼なのか。

「だって似てるんだもの。そう思わない？」

そう言われても、骸骨で見分けがつくものか。いや、それよりもこの椅子、さっきは棘だらけの角張った拷問椅子だったはず。それとも暗くて変なふうに見間違えたのか……？

「沙羅ちゃん、これ、本物じゃないわよね」

「まさか」

沙羅はこころと笑った。

「もちろんレプリカよ。でも、関節も全部ちゃんと動いて、好きな位置で止められるのよ。こうしてね」

「いいつ、やらなくていいからっ」

「そお？」

沙羅は残念そうに引き下がったが、めげずに言い足す。

「この服、お兄様のいらぬ服を貰って来たの。裸で恥ずかしそうだったから。だいぶさまになったわ」

「そう……」

憂未はがっくりと頷いた。さっきは服なんか着てなかった。四肢を革ベルトで拘束され、重しを載せられて棘だらけの椅子に座らせられていたのだ。

（でも、そうよ。そんなことあるわけない。）

十三やそこの女の子が、そんな悪趣味なことをするわけがない。見間違えたに決まってる。この 鉄の処女 だって。

「先生、これ見て」

目の前にあつたのは、これは見間違えようもなく 鉄の処女 だった。だが、沙羅は何の屈託もなく把手を掴んでぐいと両開きの扉を開いた。反射的に眼を閉じてしまった憂未を沙羅が明るく呼ぶ。「ねえ、先生。ちよつと面白いでしょ」

いやいやながら眼を開くと、鉄の処女 の内部は大きな鏡になつていたのである。扉の内側には針などではなく、小物を入れるための戸棚が付いている。

「鏡台なのよ、これ。白雪姫の鏡台」

「……白雪姫？」

「『スノー・ホワイト』っていう映画に女の人の顔の付いた鏡が出て来るの。それにちよつと似てるかな、って思つて。……あ、あれは継母の鏡だつたっけ」

ま、いいか、と独りごちながら沙羅は扉を閉めた。憂未は混乱のあまり頭がぼうつとして来た。先ほど見たものはいったい何だったのだろう……。沙羅に手を引かれるまま、憂未はよろよると部屋を歩き回つた。

テーブル中央の燭台は死人の手などではなかつた。ぱつと見には指のように見えるだけの枝分かれした銀の燭台だ。玩具のギロチンは聖樹が冗談半分にフランス土産にくれたもの。挟まれている人形は マリー・アントワネット という限定物のバービーで、沙羅が言うには「ちよつとしたジョーク」だそうだ。無論、憂未は全然笑えなかつた。

人体解剖図はフィレンツェにあるというラ・スペコラ博物館の写真集だった。すべて蠟人形で作られた精巧な模型なのだ。沙羅は理科の自習として人体図を写していた。そういうものを気味が悪いとは思わないらしい。

「だって、自分の身体がどうなつていいのか知りたいじゃない？」
確かにダ・ヴィンチも人体解剖を見学してデッサンしている。ごもつとも、と憂未は頷くしかなかつた。

首から下だけが骸骨になった人物像は、レオノール・フィニの『骸骨の天使』の複製だそう。沙羅は、憂未がウオーターハウスやクノップフはわりと好きだと言うのを聞いて喜んでいた。

絵は、確かに先ほど憂未が見たものと同じだった。ルドンのモノクロのリトグラフやゴヤの『カプリチオス』も、明るい光の下だと不気味さはだいぶ薄らいで見えた。中のひとつを指さして沙羅は言った。

「私のお気に入りはこちら」

それは机に突っ伏して眠る人物の背後に梟や猫、蝙蝠が群れをなしている絵だった。戯画のようでもある。

「……何か文字が書いてあるのね」

「『理性が眠るとき、怪物が目覚める』」

沙羅はキラリと猫のように眼を光らせて憂未を見た。

「それから、ルドンのはこれが好き。タイトルはね、『夢は死を通して完成する』というの」

沙羅が指さしたルドンのリトグラフは、空中を浮遊するような髑髏と水に沈むような髑髏が描かれた陰惨な感じのものだった。沙羅は後ろ手を組んで、伸び上がるように熱心に絵を眺めた。

「どっちも真理よね……」

沙羅は独り言のように呟いたかと思うと、憂未を振り返ってにこりと笑った。

「ねっ？」

「……そうかもしれないわね」

憂未は曖昧に頷いた。

まさしく、先ほど見た幻はそういうものだったのかもしれない。まだ慣れない環境で、わけがわからない少年の『幽霊』まで目撃した。平気なつもりでも、やはり心の何処かでは怯えているのだろう。だから、薄闇にありもしない幻覚を見るのだ。

そう。

きつと、そうよ。

メゾン・ド・コシュマール～悪夢の館～

すべて錯覚なんだわ……。
憂未は沙羅を促し、小さな妖異博物館めいた部屋を後にした。

第6章 蒼い庭（前書き）

この章にはやや残酷な描写が含まれます。苦手な方は御注意ください。

第6章 蒼い庭

その夜、聖樹は晚餐の席に姿を見せなかった。急な用事で東京へ戻ったという。そういえば沙羅のテストを見ていた時、車の出て行く音が聞こえたような気がした。窓が閉めてあったのではつきりわからなかったのだろう。

沙羅は懸命に話題を見つけて場を盛り上げようとしていたが、やはりふたりきりの食卓は少し寂しかった。メイドたちは相変わらず足音もたてず黙々と給仕をする。微かな衣擦れの音だけが、彼女たちの存在を知らしめていた。メイドというより沈黙の誓いを立てた修道女のようなようだ。

夕食後、憂末が撞球室で休んでいると、黒猫をお供に従えて沙羅がやって来た。手には白っぽい表紙の本を一冊持っている。

「憂末先生。馨兄様かおるに本を読んであげるのだけど、付き合ってください？ くたびれたら途中で交代してほしいの」「いいわよ」

憂末は立ち上がった。聖樹にも、出来たら馨の相手をしてやってほしいと言われていたのだ。ひとりである病室を訪れるのは気が進まないが、沙羅と一緒にならそう気詰まりでもないだろう。

馨の病室へ続く廊下は真ん中辺りにぼつんと小さな灯がひとつ燈っているだけで、かなり暗かった。レトロな花鉢型のすりガラスのシェードを通して、白熱灯の橙色の光が廊下を仄かに照らしている。歩くうち、灯の届かない隅の方で影がじわじわと伸び縮みしているような気がして身体が竦んだ。

昼間、沙羅の奇妙な趣向の部屋を見てから、闇が少し怖い。また妙な幻覚を見るのではないかと不安になってしまふ。白霧館に来て以来、今まで経験したことのないような奇妙なことばかり起こる。聖樹や沙羅の親身な対応のおかげであまり気にしないでいられるが、よく考えればかなり奇怪おかなことばかりだ。

憂未は無意識に首を振った。

疲れているのだ、きつと。嫌がらせを受けて退職したことが、自分で思っていたよりもずつとシヨックだったのかもしれない。いろいろと厭なことも続いた。ここでは何もかもがあまりに快適だから、却って気が緩んだのだろう。

逆に言えばちょうどいい機会かもしれない。ここで気持ちをリセットして、また新たに始められる。心の整理も着くはずだ。失業、別離、弟とのギクシャク。そんな諸々の混乱にケリをつけられる。足首にすつとやわらかいものが触れた。びくつとして見下ろすと、黒猫が尻尾をゆらめかせながら悠然と追いついて行った。猫だけにまったく足音がしないうえ、アルレッキーノはほとんど鳴かない。名前を呼んでも金色の瞳を黙って巡らせるばかりだ。

神秘的で素敵ではあるけれど、もうちょっと愛想があってもいい、と憂未は思った。犬も猫も好きだから抱っこしたり撫でたりしたいのだが、警戒しているのかあまり寄って来ないのだ。

部屋の扉を開くと、洪水のように百合の香りが押し寄せた。

憂未はちよつと憂鬱になった。今夜もまた悪夢に魘されそうだった。百合の匂いは嫌いじゃないけど、これは少しきつすぎる。鼻孔の奥にいつまでも残り香が付きまといつて消えない。幻覚の香りに窒息しそうだった。

室内に入ると案の定、花瓶に大きなヤマユリが何本も飾ってあった。花粉がこぼれてテーブルにまばらに散っている。

沙羅は寝台に歩み寄り、病人を覗き込んだ。後に続いた黒猫が音も立てず寝台の端に飛び乗る。

「お兄様、お加減いかが？」

「ああ……」

消え入りそうな声がして、枯れ木のような腕が持ち上がった。弱々しく黒猫の頭を撫でる。アルレッキーノはおとなしく撫でられながら尻尾をゆらゆらさせていた。

「憂未先生も来てくれたの。一緒に本を読んでさしあげるわ」

「……ありがとう……」

かすれた吐息のように呟き、馨は憂末に向かってわすかに手を振ったようだった。憂末は離れたところに立ったまま、見えないだろうと思いつつも会釈をした。

その拍子に部屋の隅に座っている看護師の姿が眼に入った。暗がりにはひっそりと座っている。はつきり見えるのはすらりと揃えられた脚だけ。彫像のように身じろぎひとつしないその姿はまるで美術館の監視員のようなのだ。

沙羅に従ってテーブルを挟んだ椅子に腰を降ろすと、間近の百合がいつそう濃密に香った。服にも香りが移りそうだった。煙草の匂いが染み着くよりは、余程ましではあるが……。

何となく憂末は『源氏物語』の一節を思い浮かべた。葵の巻、六条御息所が生霊と化して葵上のもとへあくがれ出で、現身に戻っても悪霊を祓うために護摩で焚く芥子の匂いが身体中に染み着いて取れないと嘆くのだ。……

これは、現実なのだろうか。

ふっと己の立ち位置がわからなくなる。自分は本当に馨の病室に居るのか。それとも、そういう夢を見ているだけなのか。

どちらであってもおかしくない。そんな気がした。いずれにせよ百合の香りは消えないだろう。風呂に入り、全身を洗ってもなお、それはまといつくように香り続けるだろう。

恋着の想いのように。

「……日は午なり。あらら木のたらたら坂に樹の蔭もなし。」「

沙羅が本を開いて読み始めた。

「寺の門、植木屋の庭、花屋の店など、坂下を挟みて町の入口にはあたれど、のぼるに従ひて、ただ畑ばかりとなれり。番小屋めきたるもの小だかき処に見ゆ。谷には菜の花残りたり。路の右左、躑躅の花の紅なるが、見渡す方、見返る方、いまを盛なりき。ありくにつれて汗少しいでぬ。」

空よく晴れて一点の雲もなく、風あたたかに野面を吹けり。

一人にては行くことなかれと、優しき姉上のいひたりしを、肯か
で、しのびて来つ。おもしろきながめかな。山の上の方より一束の
薪たきぎをかつぎたる漢おのおり来れり。』」

古めかしい文章に、最初は古典を読んでいるのかと思つたが、ど
うも違つようだ。

「『……細き道をかたよけてわれを通せしが、ふりかへり、
「危ないぞ危ないぞ。」

といひずてに眦まなじりに皺を寄せてさつさつと行過ぎぬ。』」

沙羅が読み進むにつれ、次第に見当がついてきた。

泉鏡花の『龍潭譚』だ。

真つ赤な躑躅の咲き乱れる丘で遊んでいた幼い少年が、美しい女
に導かれるようにこの世とも異界ともつかぬ不思議な場所で一夜を
過ごす。鏡花の代表的な幻想譚である。

沙羅の声はあまり感情が伴っていないが、却つてそれが物語
に潜む凄味を引き出しているようにも思えた。

少年は満開の躑躅に囲まれ、そのあまりの美しさに恐ろしくなる。
姉の待つ家へ帰ろうとすると、キラキラと五彩に輝く美しい毒虫に
触れてしまい、顔が腫れて、心配して探しに来た懐かしい姉にすら
別人と思われてしまう。

「『……一足すさりて、

「違つてたよ、坊や。」とのみいひずてに衝つと馳せ去りたまへり。

怪しき神のさまざまのこととしてなぶるわと、あまりのことに腹立
たしく、あしずりして泣きに泣きつつ、ひたばしりに追ひかけぬ。

捕へて何をかなさむとせし、そはわれ知らず。ひたすらものの口惜
しければ、とにかくもならばとてなむ。』」

少年は、何処とも知れぬ大沼の畔で倒れてしまう。そして、美し
き女の住まう家で介抱され、女の寝姿に亡くしたばかりの母を見る。
翌日少年は家へ返されるが、異界の影響を受けた少年にとってそこ
は敵意に満ちた世界と成り果てていた。涙ながらの姉の声すら怪し
く聞こえ、逃げ出そうと暴れ回つた拳げ句に閉じ込められてしまう。

「たとへば怪しき糸の十重二十重にわが身をまとふ心地しつ。し
だしいだいに暗きなかに奥深くおちいりてゆく思あり。……」

口惜しく腹立たしきまま身の周囲はことごとく敵ぞと思はるる。
町も、家も、樹も、鳥籠も、はたそれ何等のものぞ、姉とてまこと
の姉なりや、さきには一たびわれを見て其弟を忘れしことあり。塵
一つとしてわが眼に入るは、すべてものの化したるにて、恐しきあ
やしき神のわれを悩まさむとて現じたるものならむ。……

……透あらばとびいでて、九ツ笏とをしへたる、たふときうつ
くしきかのひとの許に遁げ去らむと、胸の湧きたつほどこそあれ、
ふたたび暗室にいましめられぬ。』

そこで沙羅は息を継ぎ、遠慮がちにちらりと憂未を見上げた。

「先生、あと少しなただけど代わってくださいさる？　ちよつと疲れち
やつた」

「いいわよ」

憂未は本を受け取った。「千呪陀羅尼」と題された章を読み始め
る。

「毒ありと疑へばものも食はず、薬もいかでか飲まむ、うつくし
き顔したりとて、優しきことをいひたりとて、いつはりの姉にはわ
れことばもかけじ。……」

困り果てた姉は弟を寺へ連れてゆく。読経が始まると同時に凄ま
じい暴風雨が襲いかかる。読経の声と雷鳴が交錯する中、少年は自
分を抱きしめる姉の腕によくやく現実感を取り戻す。美しき女の家
があつた九ツ笏の谷は嵐による出水で一夜にして淵と変わった。そ
の水面を女の化身とも見紛う白い鳥が横切つてゆく。そして月日が
流れ、青年となつた彼の日の少年は碧い淵を静かに見つめるのだっ
た。

「あはれ礫を投ずる事なかれ、うつくしき人の夢や驚かさむと、
血気なる友のいたづらを叱り留めつ。年少く面清き海軍の少尉候補
生は、薄暮暗碧を湛へたる淵に臨みて肅然とせり。……」

読み終えてしばらくは、沙羅も黙したままでいた。部屋を包む薄

闇は水底のように重く、立ち込める百合の香りが眼に見えない霧のごとくさらに闇を深めてゆく。

そつと沙羅が腕を伸ばし、憂未に触れた。おとなびた表情で少女は静かに微笑んだ。

「ありがとう、先生。　いかが？　お兄様」

返事はなかった。沙羅は立ち上がり、寝台に歩み寄った。アルレッキーノは本を読む間もずっと寝台の端で寝そべっていた。馨の様子を覗き込む沙羅を見上げ、黒猫はかすかな鳴き声を上げたようだった。

「……まあ。お兄様ったら寝ちゃってる。せつかく先生が読んでくださったのに」

「ご病気なのだから仕方ないわ。もう失礼しましょう」

沙羅は肩を竦め、猫を抱き上げた。

「そうね。さ、行きましよう、アルレッキーノ」

沙羅に続いて部屋を出ようとした時だった。何の気なしに振り向いた憂未は、閉まりゆく扉の隙間から馨の横たわる寝台を見た。反射的に眼を瞪る。

紗に隠れて判然としない馨の枕元で、青白い蝶が舞っていた。それは今にも力尽きて落ちそうに弱々しい羽ばたきだった。瞬きする間に扉は閉まり、懐愴な百合の香りだけが幽かに残った。

「ねえ、先生」

人懐こい沙羅の声に、はつと我に返る。

「な、なあに」

「斑猫はんみょうつて虫、見たことある？」

斑猫。先ほど読んだ『龍潭譚』に出て来る美しい毒虫だ。

「……そうね。実際には見たことないような気がするわ」

考えながら憂未は答えた。斑猫は人の歩く先へ先へと飛ぶことから みちおしえ とか みちしるべ などと呼ばれることもある。物語の主人公もそうやって虫を追っているうちに異界へと迷い込んでゆくのだ。

「私は見たことあるわ。斑猫って媚薬の素なのよ」
「媚薬？」

憂未はびっくりして沙羅を見返した。少女は恬淡と頷いた。
「媚薬、つまり催淫剤ね。斑猫と言っても綺麗じゃない豆斑猫の方
だけど。成虫を乾燥させてカンタリスという生薬を作るの。脱毛症
や神経痛に効くんだそうですよ。でも、昔から媚薬としても使われてい
たの。モンテスパン夫人は太陽王ルイ十四世にこれを飲ませたと
言
うし、ルイ十五世の寵姫ポンパドゥール夫人は靈薬エリクシルと称して自ら飲
んでいたんですって。そしてルイ十六世治下ではサド侯爵がカンタ
リス入りのボンボンを女に食べさせてた。でも、カンタリスは乱用
しすぎると腎臓障害を引き起こすの。この時代には、愛と死は一体
だったのかもしれないわね。エロスとタナトス。ロマンチックでグ
ロテスクな時代だわ」

憂未は啞然として沙羅を見つめた。これが十三歳の少女の言うこ
とか。

「……沙羅ちゃん。どうしてそんなこと知ってるの？」
「だって本に書いてあったもの」

けろりとして沙羅は答えた。いったいどういう本を読んでいるの
だ。憂未は頭を抱えなくなった。しかし沙羅にはまったく悪びれた
様子もない。かといって知識をひけらかして自慢するふうでもなく
恬淡としている。憂未はしかつめらしく溜め息を付いた。

「あのね、沙羅ちゃん。そういう本は確かに面白いでしょうけど、
もう少し、その、普通の本も読んだ方がいいと思うわ」

「普通の、って、漱石とか？」

「まあ、そうね」

「読むわよ。『倫敦塔』とか『薙路行』なんか、かなり好き」

「『坊ちゃん』とかじゃないの……」

「『夢十夜』の最初のお話も好きだわ。私のお墓の側で百年待っ
てて、っていうの」

うすうす思っただけだが、沙羅の趣味はだいぶ偏向しているよ

うだ。個人の趣味は出来る限り尊重すべきとは思っているので敢えて咎めはしなかったが、課題図書になっているものも読んで感想文を書いてもらおう。絶対。

別れ際、沙羅は真顔になって尋ねた。

「先生。ドアにおまじないした？」

「え？ ああ、チヨークで星を描くやつね。描いたわよ」

沙羅は安堵の笑みを浮かべた。

「だったら大丈夫。もうオバケは出ないわ」

「そう願うわ。沙羅、今夜はあまり夜更かししないで。明日は一緒に朝食をいただきましょう。推理小説なんか読んでちゃだめよ」

「はあい」

悪戯っ子のように肩をすくめて沙羅は頷いた。妙なところでマセているようでも、結局はまだまだ子どもなのだ。

おやすみなさい、と手を振って弾むような足取りで去ってゆく沙羅を見送り、憂未はほっと息をついた。

夜半のことだった。憂未は妙な胸苦しさに眠りを妨げられた。

寝入り端は快適だった。おまじないに安堵したのか、布団に潜り込んだ途端に眠気が差してそのまま眠ってしまったようだ。それが、だんだんと息苦しくなり、ついには不快な覚醒へとつながった。

朦朧としたまま眼を開けると、すぐ目の前に金色のボタンのようなものが輝いていた。ぎょっとして一気に目が覚めた。見る間にむくむくと黒い影が広がる。

黒い、獣。

ぞつとして喘ぐ。また、あの悪夢だろうか。憂未は戦慄おののきながらも懸命に影を見定めようとした。黒い三角形の耳がびくびく動く様が微かに見て取れる。憂未は安堵のあまり腑抜けたように脱力した。

「……アルレッキーノ」

それは沙羅の飼っている黒猫だった。どこから入り込んだのか、猫が憂未の胸の上に乗っかって顔を覗き込んでいるのだ。憂未はぐったりと呟いた。

「どいて、アルレッキーノ。重いわ」

しかし猫は黙ったまましげしげと憂未の顔を凝視している。憂未は猫を持ち上げようとしたが、何故か腕が重くて上がらない。金縛りの一歩手前、といった状態だ。憂未は懸命に身じろいだ。

「お、重いってば、アルレッキーノ。降りてよ」

必死に頼んでいるうち、ふっと胸が軽くなった。同時に金縛りが解けて憂未は跳ね起きた。暗い室内では黒猫の姿は見分けられない。憂未は手探りで枕元のスタンドのスイッチを入れた。すりガラスに天使が描かれたスタンドからやわらかい光が注ぐ。ベッドの上に半身を起こしたまま室内を見回したが、猫の姿は見当たらなかった。

床に降りてベッドの下を覗き込んでみる。やはりいない。辺りを見回し、家具の陰や机の下などを覗いてみたが、猫はどこにも見えなかった。名前を呼んでも返ってくるのは夜半の静寂ばかりだ。

また夢だったのだろうか。昨日から、非現実的なのに妙にリアルな夢ばかり見る。憂未は溜め息をつき、髪を無意識に掻き回した。ベッドに戻ろうとした時、キィ、と小さな音がした。見れば廊下へ続く扉が細く開いている。

(閉めたはずじゃ……?)

そのつもりだったが、鍵をかけた覚えはないから、きつちり閉まらなかったことに気付かなかったのかもしれない。それで猫が入って来てしまったのだ。

憂未は廊下を覗いてみた。左手の予備室の扉は閉まっている。思いきって二階のホールまで出てみることにした。

ホールは壁際に装飾的な暖炉がひとつあるだけで、がらんとしている。暖炉の両脇の壁には燭台型の電灯がふたつ取り付けられているが、光量は充分とは言えなかった。それでもどうやら猫がいないらしいことは見て取れた。

引き返そうとして、ふと床面に灯が射していることに気付いた。ドアの下の隙間から洩れる灯だ。それは沙羅の寝室の扉だった。憂未は眉をひそめた。

（まさか、まだ起きてるの？）

先ほどちらりと時計を見たが、確かもう夜中の二時を過ぎていたはず。

灯を消し忘れたか、それともまた本を読みふけているのだろうか。

憂未はドアへ歩み寄った。ノブに手を伸ばしかけて、ふと動きを止める。中から何か聞こえたような気がしたのだ。そっと耳を近づけてみると、確かに誰かが喋っている声がした。

聖樹の声だ。

（戻って来てたのね。）

憂未はほっとした。一日で往復するのはかなりの強行軍だろうが、やはり病身の弟妹が気になるのだろう。憂未は別に留守中のことを頼まれているわけではないが、やはり聖樹が居ないと何となく不安だった。

安堵して戻ろうとした時、不意に小さな悲鳴のようなものが聞こえた。憂未は慌ててドアに張りついた。聖樹の低声は明らかに怒っている。

『おとなしくしていると良かったらう』

『ごめんなさい、もうしないわ』

噤り上げる沙羅の声。何か叱られているようだ。悪戯でもしたのだろうか。

『覗く奴があるか』

『だって、あの子が邪魔をするんだもの』

『好きにさせてやれ。どうせもう長くない』

何を言っているのだろう。まったく意味が掴めない。

『でも、あの子ばかり狡いわ』

『黙れ』

どさりと何かを投げ出すような音がした。まさか、聖樹が妹に暴力を？ 憂未はひやりとする胸を押さえて耳をそばだてた。抗うような衣擦れの音と忙しない息遣いが聞こえる。泣きじゃくるように沙羅は何度もごめんなさいと繰り返した。しかし、それに応じる聖樹の声はなかった。

苦しげな沙羅の喘ぎが洩れる。それが妙に艶っぽく響いて憂未はどきりとした。押し殺した息遣い。懸命に苦痛を堪えているような、あるいは。

己のとんでもない想像に耳まで熱くなる。憂未は弾かれるようにドアから離れた。しかし、ドアの隙間から洩れる声は聞き間違えようもないくらい露骨だった。無意識に何度も首を振る。叫び出してしまいそうで、憂未は両手で口許を押さえた。

(嘘、嘘でしょ……！)

懸命に眩暈を堪え、ふらふらと憂未は向きを変えた。

何処をどう通ったのかわからないが、ふと我に返ると憂未は月明かりの庭をさまよっていた。階段を降りた覚えも玄関を開けた記憶もないのに……。

月光に青白く照らされる庭を、茫然と憂未は眺めた。

足が冷たい。見れば憂未は裸足だった。夜露の降りた芝生に、裸足で立ち尽くしているのだ。身に着けているのは袖無しの白いネグリジェ一枚きり。ひんやりとした夜気が嘲笑まじりに素肌を撫でてゆく。

しっとり濡れた芝生の向こうには深い森が広がっていた。黒々とした自分の影が、森を指し示すように長く伸びている。憂未は月光に背中を押されるようにして蹠踉そつろうと歩き出した。

仄かな霧が幻影のように周囲を漂う。足元を覆う白い花を踏みしだくたび、憂未の爪先から妖艶な芳香が立ちのぼった。そこは何処とも知れぬ荒れ果てた庭だった。無秩序に咲き乱れる白い花に埋も

れるように、壊れた石像が幾つも打ち捨てられている。

顔の欠けたヴィーナス。翼をもがれた天使。牙をなくした獅子。首のないセイレーン。角の折れた一角獣。粉々に砕けたキメラたち……。

月光に黙したまま、それらは悲嘆の声を上げ続ける。涙にくれ、過ぎた時と許されざる未来とを悄然と嘆いているのだ。鬼気迫るような悽愴な気配が辺り一帯に立ち込めていた。憂未は慄然と足を止めた。

辺り一帯、木の十字架が乱立していた。適当な枝を組み合わせただけの粗末な十字架だ。まるで子どもが無造作に突き刺したようにどれもこれもひどく傾いている。根元の土は今し方掘り返したかのように黒々と濡れていた。

漂う霧の中、月に照らされて人影がひとつ浮かび上がった。白いレースのワンピースを着た小柄な少女。俯いてこちらに背を向けている。気が付くと少女の足元には深い穴がぼっかりと口を開けていた。

長めのおかつば髪を揺らして少女は振り向いた。透けるような白い頬で沙羅が微笑む。静かに上げた片腕から何か黒いものがぶら下がっていた。

喉の奥に悲鳴が張りつく。

淡雪に血がひとしずく滴ったかのような赤い唇で、沙羅は囁いた。
『……罰を受けたの』

沙羅は己の手に掴んだものを憂未に向かって突き出した。だらりと尻尾を垂らし、アルレッキーノが死んでいた。黒猫の首はほとんどぎれかけ、ありえない角度に傾いている。赤い舌が牙を剥いた口からはみ出し、恨めしげな金色の眼が鈍く月光を映していた。

沙羅は艶を失った毛皮に愛しげに頬ずりした。

『可哀相なアルレッキーノ……。でも寂しくないわ。ほら、こんなにお友だちがいる。みんなアルレッキーノと仲よくしたいって言うてるわ』

沙羅は林立する木の十字架を死んだ猫に示した。無邪気な笑い声を上げ、沙羅は黒猫の死骸を抱きしめた。ダンスのステップを踏むようにくるりくるりと優雅に回る。そのたびにぱっくりと裂けた傷口からあふれる血が、少女の真つ白な胸元を朱に染めて行った。

『寂しくないわ』

歌うように沙羅は囁いた。

『死んだら天使になる。死ななければ吸血鬼に。形見は何がいい？ そんなものいらぬ。みんな一緒よ。ずつつと一緒。だってこの世は夢だもの。グロテスクで馬鹿げた夢。私はあなたの夢を見る。あなたは私を夢に見る。だから私たちは存在している。すべてが虚ろな夢だから。私たちはみな、誰かが覗き込んでる水鏡。なんて素敵。さあ、踊りましようよ、アルレッキーノ。笑わせて、あなたは道化なのだから』

ぶつつ、と厭な音をたてて猫の首がちぎれた。首は地面でバウンドし、ころころと憂末の足元へ転がって来た。首はぐるりと回転してちょうど据え置いたように止まった。生命のない淀んだ金の瞳が憂末を見上げる。

憂末の悲鳴と弾けるような笑い声が重なった。憂末は脇目もふらず走り出した。背後から沙羅がからかうように呼びかける。

『だめよ、先生。そっちは毒の花園よ。死んじゃうわ』

悪意のまったく感じられない無邪気な声に、却って底知れぬ恐ろしさが込み上げる。泣きながら憂末は走った。

(夢よ。これは夢。全部悪い夢に決まってる……！)

息が上がり、足がもつれる。壊れた彫像が憂末の狂態を憫笑している。ゆるゆるとただよう霧と月光の向こうから、妖美な花々の一群が現れた。

白やピンクの釣鐘状の花が鈴なりになったジキタリス。紫の小さな帽子のような形をしたトリカブト。白いレースの塊めいたドクニンジン。大きな白い漏斗をぶら下げたようなダチュラ。血の如く赤いアネモネ、死人のように蒼ざめたルピナス。憂末の知らないたく

さんの禍々しい植物たち……。

『毒のある植物なんて珍しくもない』

誰かの声が聞こえる。誰かの……、そんな、嘘でしょう……？

『庭先に植わっているイチイの種にも、アンズやウメの種にも毒がある。アサガオ、ヒガンバナ、イヌサフラン、キョウチクトウ、エニシダ、スズラン、スイセン。みな毒を持っているんだ。棘のない薔薇がどんなに美しくても、心惹かれることはない。危険な魅力があるからこそ、人はどんなに傷ついてもそれを求めて手を伸ばす。それと同じさ。毒のない花など無味乾燥だ。想像力を働かせる余地もない。美しさの中に人を殺せる力を秘めていてこそ、花は愛でるに値する』

す、と冷たい指先が憂未の頬に触れた。青みを帯びた黒瞳で聖樹が微笑んだ。

「そうは思いませんか、憂未さん」

限界まで見開いた憂未の視界を、渦巻く暗雲と不吉な星々が流れた。

愉しげな男女の笑い声が入り交じる。沙羅と聖樹が私を見下ろして嗤ってる……。

気が付くと、憂未は暗い部屋に横たわっていた。

やはり、夢だったのだ。

よかった……。

手で顔を覆い、憂未は弱々しく吐息を洩らした。

キィ、と小さく軋む音がした。見上げると沙羅が微笑とともに覗き込んでいた。憂未は自分が立っていることに気付いた。暗く狭い箱のようなものの中に立たされているのだ。そして今まさに沙羅が蓋を閉めようとしている。沙羅はにっこりと笑った。

「おやすみなさい、先生」

箱はとても狭く、身動きできない。そして憂未は自分が何処にい

るのか悟った。

鉄の処女。

あの残酷な刑具の中に、憂未は立っているのだ。両開きの扉がゆっくりと閉じてゆく。内側には鋭い針が何本も植え込まれている。聖母の顔が刻まれた部分の内側にも二本の太い鋼鉄の針。針先はまっすぐ憂未の両目へと近づきつつあった。そしてすべてが真の暗黒に閉ざされた。

憂未はベッドの上で震えていた。冷たい汗がしとどに全身を濡らしている。浅い呼吸を繰り返しながら、憂未はがくがくと震える腕で自らの膝を抱き寄せた。

また夢を見ていたのだ。

何処までが現実で、何処からが夢？ それとも最初から最後まですべて忌まわしい夢だったのか……。

憂未は嗚咽を上げた。

何がなんだかわからない。ぐちゃぐちゃに頭が混乱していた。

涙で歪んだ視界に、白い影が映った。あの少年がベッドの足元に立っていた。

今までと違ってその姿は輪郭がはっきりしなかった。後ろの壁が透けて見えている。憂未はきつく眉根を寄せた。

「……あなたは誰」

齒軋りするように呟く。少年は答えなかった。ただ哀しげな瞳で憂未を見ている。憂未はカツとして叫んだ。

「あなたがこの夢を見せてるの!？」

やはり少年は答えない。口許が微かに動いたようだったが、声は聞こえなかった。憂未は枕元の携帯電話を掴んで投げつけた。

携帯は壁にぶつかって鈍い音を立てた。

「いい加減にして! 消えてよ、もう二度と現れないで……!」

少年の姿は冷たい陽炎のように揺らぎ、ふっと消えた。後に残ったのは哀しげなまなざしだけだった。憂未は膝に顔を埋めて啜り泣いた。

いま自分が本当に目覚めているのかどうか、それすら確信が持てなくなっていた。

第6章 蒼い庭（後書き）

【参考】

- 『泉鏡花集成3』ちくま文庫1996
- 『鏡花幻想譚1』河出書房新社1995

第7章 悪い種（前書き）

【警告】

この章には残酷な描写及び背徳的シーンが含まれます。
苦手な方は御注意ください。
15歳未満は閲覧禁止。

第7章 悪い種

憂未は足を引きずるようにして部屋を出た。

このまま横になっても眠れそうにない。いや、眠ってしまうのが怖いのだ。またあんな暗黒の残酷劇めいた夢を見るかもしれない、そう思うだけで胸が悪くなる。

誰かに、これが現実なのだと言保証してほしい。そうでもなければ、安穩に眠ることなど出来そうにない。

二階のホールは灯が消えていた。どの部屋からも光は洩れていない。憂未はほんの少しだけ安堵した。

あれはすべて夢だったのだ。不可解な兄妹のやりとりも、粗末な十字架の乱立する月明かりの森で、死んだ黒猫を抱えて邪悪な妖精のように踊っていた少女も。

黒猫が部屋にいたと思った時から、ずっと夢を見ていたのだ。きつとそうだ。きつと……。

階段室には足元を照らす小さな灯が燈っていた。憂未は炎に引き寄せられる羽虫のように階段を降りて行った。まるで眼に見えない糸で操られるかのように、するすると足が動く。

何処からか冷たい風が吹き抜けた。憂未はぞくりとして自らの腕を抱いた。薄く鳥肌のたった皮膚が凍えるほど冷たかった。

真つ暗な玄関ホールで、しばし憂未は立ち尽くした。

濃密な闇が喉を塞ぐようにじわじわと絡みつく。憂未は無意識に喉元を押さえ、闇の薄らいで見える一角へ歩み寄った。

それは撞球室の前だった。ドアの下から微かな灯が洩れている。憂未は何も考えられないままドアを引いた。暖炉の前の椅子にゆったりと腰を下ろしている聖樹の姿が見えた。

「……憂未さん？」

驚いた聖樹の声に、泡が弾けたように我に戻る。まるで夢の中を漂って来たように意識が茫漠としていた。憂未は重たげに眼を瞬い

た。

「あ……、お帰りなさい……」

「どうしたんですか、こんな時間に。ひよっとして起こってしまったかな」

「あ、いいえ。違うんです。ちょっと眠れなくて……」

「まあ、こちらへどうぞ」

聖樹は読んでいた本を座面に置き、立ち上がった。気さくな調子で招かれ、憂未はおずおずと暖炉の前に歩み寄った。

「お邪魔してすみません……」

「とんでもない。雨のせいかな、今夜は少し冷えますね」

「雨、降ってるんですか」

耳を澄ませて憂未は尋ねた。雨音は聞こえなかった。

「霧雨みたいなものですよ。視界が悪くて、辿り着くのにえらい時間がかかってしまいました」

聖樹は声を出さずに笑った。

「……いつお帰りに？ 気付きませんでした」

「三十分くらい前かな」

「沙羅ちゃんのところへは……？」

乱れる鼓動を抑えながら尋ねると、聖樹はかぶりを振った。

「もう遅いので行ってません。もしかして、何かありました？」

「あ、いいえ。何も。大丈夫ですわ」

心配そうな聖樹を見て、憂未は慌てて両手を振った。

（馬鹿ね。あれは夢。それこそ馬鹿げた夢だわ……。）

聖樹は、しかしまだ気がかりそうに憂未を見ている。

「何だか顔色が悪いですよ。どこか具合でも悪いのでは？」

「あ、いいえ。何ともありません」

「やっぱり冷えたのかな。こちらは東京と較べるとずいぶん涼しいですからね」

聖樹は憂未に座るよう促した。暖炉の前には椅子が二脚、炎を囲むように置かれている。どちらもヘッドレストの付いた小さめの肘

掛け椅子だ。憂未は暖炉の方へ向き直り、俯いて炎に手を差し伸べた。化粧もしていないことに今更気付いて恥ずかしくなったのだ。部屋の照明が昏いのがせめてもの幸이었다。

「そうだ。いいものを持って来てあげましょう。ちょっと待ってて下さいね」

立ったままでいた聖樹は何を思ったか急いで部屋を飛び出して行った。お構いなく、と引き止める暇もなく、ひとり取り残された憂未は落ち着かなげに部屋を見回した。聖樹が置いて行った本は英語のペーパーバックだった。ミステリのような。

暖炉で時折薪の爆ぜる音がする他は、部屋は静まり返っていた。昨夜のように音楽もかかっていない。

そのうちに炎に翳していた手足に少しずつ温もりが戻って来た。適度なクツションの入った背に凭れ、揺れる炎をぼんやりと眺めているのは心地よかった。

うとうとしかかった時、ドアの開く音がした。
「お待たせ」

聖樹の声に背もたれから顔を覗かせると、彼は暗紅色の液体の入ったグラスをふたつ載せた小さな盆を持っていた。

聖樹は丸テーブルに盆を置き、憂未にグラスを手渡した。ロシア紅茶を飲むような、銀の持ち手のついたグラスだ。

温かなグラスからは甘酸っぱい香りが芳醇に立ち上っていた。

「スパイス入りのホットワインです。身体が温まりますよ」

「……ありがとうございます」

聖樹は自分の椅子に座り直すと、乾杯のポーズで軽くグラスを掲げて見せた。憂未は微笑んでグラスに口を付けた。スパイスの微かにぴりつとする刺激と柑橘系の香りが入り交じり、こくのある甘味が口中に広がる。

「おいしい……」

思わず呟くと、眼があつた聖樹がにこりと微笑んだ。加熱してアルコールは弱まっているはずだが、くらりと頭の芯がとろけるよう

な眩暈がした。

憂未はぼんやりと聖樹を眺めた。香りを楽しむように、やや伏目がちに俯いた、その横顔が懐かしい。夢の中でいつも間近にあったそれと、見分けがたいくらいに似ている。

火の爆ぜる音を聞いているうちに、瞼が重くなつて来る。狭められた視界にあの人の背中が見えた気がした。憂未は夢つつつに手を伸ばした。

（待つて。）

行かないで。ここに居て。

それでも振り向くことはなく、彼の姿は霧に包まれるように消えてゆく。憂未は膝をつき、泣き崩れた。周囲が濃霧に閉ざされる。ぼんやりとした薄明の中、自分の囁き上げる声だけが虚ろに響いた。白い霧の粒子が生き物のようにゆるゆると動く。霧の中から遠く近く、囁く声が聞こえて来た。

『何を泣いているの』

視線を上げた憂未の頬を、そろそろと霧が撫でてゆく。それはいつのまにか臆の浮いたがっしりとした男の手に変わっていた。憂未の顔を包んでしまうくらい大きな掌が優しく頬を撫でる。

振り向くと肩こしに聖樹が微笑んでいた。いや、違う。あの人だ。夢の中のあの人が憂未を背後から抱き込むようにして立っていた。

憂未は我を忘れて彼に抱きついた。熱い涙がどつとあふれた。

『待つていたよ』

彼は憂未の耳元で囁いた。見上げた瞳の奥で蒼い光が揺らめいている。彼は憂未の髪を払い、頬や頂を撫でながら額を寄せた。

『さあ、行こう。今度こそ、一緒に……』

官能的な囁きに、憂未はぞくりと身を震わせた。互いの唇が触れ合おうとした瞬間。

黒い扉がぱたと開き、凄まじい突風が吹き抜けた。

少年の叫び声が風を圧して響く。

「だめだ、姉さん！」

はつと憂未は瞬きした。抱き合っていたはずの男が霧のように
き消える。

振り向いた先に立っていたのは、あの少年だった。白いシャツに
蝶ネクタイ、サスペンダーで吊った黒い半ズボン。悲しみと怒りが
交錯する瞳の。

あの子。

いいえ。いいえ、違う。

そうよ、この子は……。

「早く逃げて！」

焦燥もあらわに少年は叫んだ。しかし憂未はその背後に気を取ら
れていた。

暗闇の中から誰かが走って来る。口の端を吊り上げ、両手でしっ
かりと持った捕虫網を大きく振りかざして……。少年は気付かずに
必死に訴え続ける。

「逃げて、姉さん！ さもないと僕みたいに……」
恵吾。

そうよ。この子は恵吾。お母さんとお父さんの結婚式の時の恵吾
だわ。

捕虫網が少年めがけて振り降ろされる。

「フーかまーえたっ」

勝ち誇った沙羅の笑い声が響いた。頭にすっぽりと網を被せられ
た少年が、ゆっくりと膝を折り、前のめりに倒れる。網の中には青
白く光る蝶が狂ったように羽をばたつかせていた。沙羅は狂喜の表
情で網を振り回した。

「捕まえたわ。やっと捕まえた！ お兄様に見せなきゃ」

沙羅は小躍りして網の口をしっかりと握り、身を翻した。あつと
いう間に沙羅の姿が闇に飲まれてゆく。憂未は金切り声で叫んだ。

「待って！ 沙羅、待ちなさい！」

沙羅を追って駆け出そうとすると、倒れていた少年の身体が痙攣
を起こしたように跳ねた。

立ち竦む憂末の目の前で、少年は獣のように四つん這いになった。頭を低く垂れ、顔は見えない。涙とも涎ともつかぬものが地面に付いた手の上にぼたぼたと滴っている。

少年は苦しげに唸っていた。四肢が硬直し、はつきりわかるほど大きく震えている。

「……恵吾……？」

少年はわずかに顔を上げた。こわばった頬に涙が汚れたすじを描き、半開きの口の端から涎が糸を引いている。

毒でも飲んだように呻き、悶えながら、少年は徐々に姿を変えて行った。小さな身体が軋みながら次第に成長してゆく。骨や腱が引き攣れるような音がするたび、激しい苦痛に晒されて少年は呻いた。成長に連れて小さくなった衣服が破れ、ずたずたになって散った。肩や背に筋肉が付き、汗ばんだ皮膚の下で生き物のように蠢いている。

もはやそれは小さな少年ではなかった。ふつくらしていた頬からは肉が落ち、口許にはうっすらと生えかけたひげも見て取れる。眉の濃い、くつきりとした相貌の青年が、苦痛に顔を歪めながらそこにくすぐまっていた。

狂気を宿した眼をぎらつかせ、歯を食いしはるその顔は、どれほど面やつれしているようにも憂末にはすぐわかる。憂末は口許を押さえ、無意識に首を振った。

「……恵吾……！」

それはまさしく憂末の弟、藤崎恵吾だった。母の再婚相手の連れ子。もう十年以上も家族として一緒に暮らして来た。両親が亡くなってからは、ふたりきりの家族。

恵吾は乱れた前髪の間から憂末を凝視していた。血走ったその眼に穏やかだった弟の面影はない。あるのはただ欲望と狂気だけだ。

憂末は後退った。

この眼を知ってる。あの時の恵吾はこんな眼で自分を見ていた。あの夜、あれは恵吾じゃなかった。憂末の知っている弟の恵吾では

なかった。

そして恵吾は永遠に弟ではなくなったのだ……。

ぐわっ、と恵吾は獣のような咆哮を上げた。血の涙を流しながら、恵吾の身体は更なる変化を始めた。

背骨が湾曲し、逆立ったたてがみのような剛毛に覆われてゆく。耳元まで裂けた口から鋭い牙が次々に現れ、口吻が前へ突き出る。

顔も身体も漆黒の針のような体毛にびっしりと覆われ、苦しげな呼吸のたびにざわざわと音を立てて波うった。分厚い毛皮の臭いと濃密な百合の香りが絡み合う。

黒い、獣。

白霧館に着いた日の夜、憂未の足を食いちぎった夢の中の怪物。人狼。

あれは恵吾だったのだ。恵吾の獣性を具現した、悪夢の産物。怪物は涎を撒き散らしながら乱杭歯の生えた口を開き、憂未に飛び掛かった。逃げる暇もなく、憂未は床に昏倒した。獣は憂未の右腿にかぶりつき、骨ごと食いちぎった。

血が噴水のように視界を染める。凄絶な悲鳴が喉を裂いた。

「あ……あ……」

涙腺が壊れたようにとめどなく涙を流し、憂未はびくびくと痙攣していた。バリバリと骨を噛み砕く音がする。獣が憂未の足を喰っているのだ。

必死に上半身を起こすと、憂未の脚は両方とも腿の半ばから消えていた。血管や骨、筋肉組織、脂肪の断面がぐちゃぐちゃに露出している。

憂未は思い出した。左足はもう喰われてしまったのだ。白霧館での最初の夜に。

『逃げて』

哀しげな少年の声が脳裏に蘇る。

『逃げて、姉さん』

あれはもうひとりの恵吾。

いや、違う。あれが本来の恵吾なのだ。憂未を助けようと光る蝶に変わって現れた、恵吾の魂……。

憂未は力を振り絞って体勢を入れ換えた。うつ伏せになり、腕の力だけでずるずると床を這い始める。

大量の血が脚の断面から流れ出して床に朱墨のような跡を描いた。獣は憂未の脚を食ることに夢中で気付かない。

骨を齧る音、肉を咀嚼する音がひっきりなしに続いていた。

憂未は暗い玄関ホールを這い進んだ。壁面には赤黒い蝋燭が燃えていた。溶けた蝋が血のように滴っている。

両開きの扉の上から幽かな光が射していた。見上げると、扉の上の半円形のステンドグラスが鮮やかに浮き立っていた。憂未は初めてその意匠をはっきりと見た。

七つの頭に十本の角を持つ赤い獣に乗った美しい女。緋と紫の衣をまとい、金の杯を手に女は冷艶な笑みを浮かべている。女の眼は生きているかのように憂未に注がれていた。凍りついた憂未の目の前で、静かに扉が開いた。

憂未は茫然と扉の向こうの光景を凝視した。

そこは外ではなかった。何処かまったく別の家の室内だったのだ。ソファやテーブル、鉢植えの観葉植物や洒落たフロアスタンドが置かれた、そこは快適に整えられたリビングルームだ。毛足の長い絨毯の上、幼い女の子がふたり座り込んでいる。

無邪気な笑い声がした。ひとりには黒くまっすぐな髪をおかっぱに整えた少女。もうひとりには、よく熟れた麦のような金髪をふんわりと背に垂らしている。

ふたりはお揃いの可愛らしいワンピースを着ていたが、顔だちはまったく異なっていた。黒髪の方は日本人だが、金髪の少女は明らかに外国人。目鼻たちは西洋人のそれだった。

金髪の少女が、ふつと肩ごしに振り向いた。

驚くほど整った美しい容貌が憂未を見る。瞳はラピスラズリのように蒼く、光彩は黄金。少女は驚いた様子もなく微笑んだ。

そして憂未は思い出した。

モーラ。

時の彼方に押しやられていた記憶が蘇る。

それは憂未が九つになったばかりの頃。仕事で海外へ行った父が戻るのを、憂未は指折り数えて待っていた。

憂未の父、佐伯知久は洋酒の輸入販売を手がけており、手頃な値段で質のよいワインの入手先を新たに開拓しているところだった。今回も現地視察で東欧へ行ったのだ。

黒海沿岸の国を回ると父は言っていた。憂未は世界地図を開き、子ども向けの各国案内を見ては見知らぬ国への想像をふくらませた。もう少し大きくなったら憂未も一緒に連れて行くと、父は約束してくれたのだ。

そして、もうひとつ。

誕生日のプレゼントを持って来るよ、という父の言葉が楽しみだった。憂未の誕生日はちょうど父の出張中に当たっていて、憂未はそのことに出発前にかなりごねたのだった。父と母に囲まれてケーキの蝋燭を吹き消すのを楽しみにしていたのに、と。それに対して父は、今までにない素敵なプレゼントを持って帰るよ、と約束してくれた。

出発から一月ばかりして、父は戻って来た。いそいそと出迎えた憂未と母の千鶴子は父を見て面食らった。知久は憂未と同年くらいの西洋人の女の子を連れていたのだ。それは生き人形かと思われるほど美しい少女だった。

名をモーラといった。

憂未とモーラはすぐに仲よくなった。モーラは日本語をまったく解さなかったが、憂未と遊んでいるうちに自然と覚えた。

モーラは佐伯家の養女となり、憂未と同年の姉妹になった。母の千鶴子は自分に相談もなく連れて来たことが面白くないようだったが、きょうだいの欲しかった憂未は嬉しくてたまらなかった。そう。とても嬉しかった……。

憂未は床に腹這ったまま茫然と遠い日の光景を眺めていた。

それは手を伸ばせば届くほど間近でリアルだ。まるで時の断層がずれて過去と現在が隣り合ってしまったかのように。

だが、幼い憂未は現在の憂未が見つめていることにまるで気付いていない。無心にモーラと遊んでいる。

「……私たち、とても仲がよかったのにね」

すぐ耳元で囁かれ、憂未は凍りついた。

頬に金糸のような髪が触れる。くすくすと甘やかな声が笑う。恐ろしいほど間近に体温を感じたが、怖くて振り向けなかった。

少女の声が何処か皮肉っぽく囁いた。

「ただ楽しく遊んでいただけなのに。お母さんが私たちを引き裂いたの」

いつのまにか場面が変わっていた。

庭の一角、駐車場のコンクリートの上にチョークで大きな円が描かれている。四つの星型に囲まれた二重の円。円と円の間には三重にとぐるを巻く蛇の姿が描かれ、蛇の身体にはびっしりと呪文のようなもの書き込まれている。円の真ん中には六つの角を持つ星型が四つ。

その中心に幼い憂未とモーラがいた。ふたりの周りにはもやもやと形のはっきりしない物体が蠢いている。少し怯えている憂未の掌に、モーラは白いもやもやを載せた。それはびくびくと蠢きながら形を変え、赤い眼をした白い仔ウサギになった。憂未は歓声を上げ、ウサギを抱きしめた。

その光景を、母の千鶴子が遠くから蒼白な顔で見ている。

「……無害なラルヴァを呼び出しただけ。おとなしくて何でも私の言うことを聞く素敵な玩具。お母さんにはそれがわからなかった。理解しようとしなかった。ただ私を恐れ、遠ざけようとしたの」
また、少女がくすくす笑う。それは羽毛のように軽やかでぞくぞくするほど官能的でもあった。少女の唇がこわばった憂未の目許に落ちた。

「お母さんは、私を国へ返すようにとお父さんに言いに行ったの。そしてね、見ちゃったのよ」

ばんつ、と板を打ちつけるような激しい音に、憂未はびくりと身を竦めた。黒い扉の向こうに、また新たな光景が広がっていた。

寝台に仰臥した知久の上にモーラが跨がっていた。一糸まとわぬ姿で、ただその腰まで届く豪華な金髪がマントのように背を覆っている。ほとんどふくらみのない胸に、小さな乳首だけがルビーのように紅い。同じ色をした唇でモーラは立ち竦む千鶴子を憫笑した。

「仕方ないわ。お母さんはお父さんと寝てあげなかつたんだもの。憂未が生まれてからずっとね。お母さんにとって、セックスは苦痛でしかなかったの。不感症だったのよ。それを隠してた。でもね、お父さんはお母さんを愛してたわ。とても愛していた。なのに、抱くことが出来ない。可哀相でしょう？ だから私は夢を見せてあげたの。お父さんは私と寝てたんじゃないわ。お母さんと寝てたの。夢の中でね。お母さんにはそれがわからなかった。だってあの人、夢を見ないんだもの。ふふ、つまらない人だわ」

モーラは愛しげに憂未に頬を寄せた。
「だから、現実が悪夢になったの。そして逃げ出した。あんなに仲がよかった私たちを無理やり引き裂いて、家を出て行ってしまったの」

モーラの指がするりと脚の間に入り込む。憂未は我知らず恍惚と吐息を洩らした。優しく指を動かしながらモーラが囁く。

「でも私たち、約束したものね。ずっと仲良しでいましょうね、って。可愛いユーミ。覚えているわよね……？」

下半身がとろけそうに疼く。憂未は朦朧とする意識の隅で、なくしたはずの両足のことを思った。

脚があるのかないのかさえ、わからなかった。腰から下がまるで存在しないかのようなようだ。先刻まで感じていた激痛すら消え去り、憂未はただ巧みに追いつけてゆくしなやかな指先の動きだけを感じていた。

何処かで、泣いている幼い自分の声が聞こえる。

『ママ。モーラはどこ？ どこにいるの』

返って来たのはヒステリックな金切り声。

『忘れなさい！ あの子のことは、金輪際口に出さないで！』

母親の剣幕に恐れをなし、幼い憂未は黙り込む。

モーラのことを喋ってはいけない。お母さんに怒られるから。お母さんに嫌われたくなかったら、モーラのことには全部忘れなければならぬ。……

千鶴子は知久と離婚し、やがてパート先の上司、藤崎亨と子連れ同士で再婚した。憂未には義弟が出来た。含羞んだように憂未を見上げる、幼い恵吾。憂未は恵吾の曲がった蝶ネクタイを直してやる。嬉しそうに恵吾は笑った。

『おねえちゃん。おかあさん、きれいだね』

『そうね』

『パパ、かっこいいね』

『そうだね』

ウエディングドレスにブーケを持った千鶴子。タキシードにカトリアのコサージュをつけた亨。淡い桃色のワンピースの憂未。黒い半ズボンの恵吾。

『さあ、記念写真を撮るよ』

写真館のおじさんが呼んでいる。子ども心にもちよつと緊張して、四人で写真に収まった。新しい家族の肖像。

恵吾。

『おねえちゃん』

『 姉さん』

すっかり大きくなった恵吾が、不機嫌に吐き捨てる。

『 姉さんは絶対、彼氏の選択を間違ってるよ。何であんな奴と付き合うんだ』

放つという。

どうせ、私の本当に好きな人は現実にはいないのよ。

夢の中にしかない。夢の中でしか会えない。

だから、現実では少しでも面影の似た人を探すしかない。

でも、その人は夢の中のあの人とは違う。

全然、違う。

だって、あの人じゃないんだもの……。

第8章 銀の筥（前書き）

【警告】

この章には残酷&グロテスク表現が含まれます。
15歳未満閲覧禁止。

第8章 銀の首

「素敵ね。絵に描いたような、幸せいっぱい家庭だわ。お母さんも今度の旦那様とはうまく行った」

モーラは皮肉っぽく笑った。

「新しいお父さんも、憂未ゆみのこと可愛がってくれたものね。弟もすぐに懐いた。そして私や本当のお父さんのことはすぐに忘れてしまったの。ひどいわ、憂未。それってあんまりじゃない？」

やんわりと詰る口調で囁かれ、憂未はがくがくと首を振った。目の前の光景はまた変わり、見るかげもなく荒れたリビングで知久がモーラの首を絞めている。血走った眼球を見開いた知久の表情には絶望と狂気だけが荒れ狂っていた。

モーラが微笑みながら囁く。

「あれからお父さんがどうなったか、憂未は知らないでしょ。お母さんは死ぬまで黙ってたから……。教えてあげるわ。あなたとお母さんが出て行って、彼は夢から覚めてしまったの。そして私を憎み、恨んだ。すべて私のせいだと言って……」

でも、そんなの酷いじゃない？ だって私は、彼に素敵な夢を見せてあげたのよ。見たがったのは知久ちひこ。私は、彼が好きだったから願いを叶えてあげただけ。なのに知久は私を殺したの。

見て。あんなふう^にに首を絞めて殺したのよ。それから私にガソリンをかけて火をつけたの。知久にもすぐに燃え移った。炎に包まれて、踊るようにくるくる回るのを私は眺めていたわ。

憂未と楽しく暮らした家が跡形もなく焼け落ちるのを、私はずっと見ていた。とても悲しかったわ。そして私の身体はなくなってしまうた。一部分だけを残して、ね……」

憂未の背後から白く美しい指が伸び、すっと一点を指さした。ほとんど人体とは認めがたいほど焼け焦げた真つ黒な煤の塊の中に、ほんのわずか焼け残った部分があった。モーラが無言で笑うのを背

中を感じる。

その黒焦げの亡骸に残された白い部分が何処であるのかに気付き、血の気が引いた。モーラはうっとり囁いた。

「私はずつとあそこにいたの。ずつとあなたの側にいたのよ」

目の前に銀色の鍵が差し出される。ごく古い型の鍵で、クローバー型のつまみがついている。憂未の掌で、鍵は鈍く輝いた。

「さあ、見てごらんさい」

瞬時に周囲の光景は消え去り、憂未は自分の部屋に立っていた。

枕元のスタンドが灯っただけの仄昏い室内。カーテンはそよぎもせず重く垂れ下がり、ベッドは今し方起き上がったばかりのように寝乱れている。

そう。私はいま起きたところだ。

妙に息苦しくて、目が覚めた。窓を開けようと思って起き上がったのだ。

でも。

憂未は胸の前に掲げられた自らの手を見下ろした。まるで水を汲むかのように両の掌をくぼめて、だがそこにあるのは水ではない。

鈍い銀色の、古びた小さな鍵。

憂未は顔を上げ、室内をゆるゆると見回した。同じ銀の輝きが眼に留まる。それは子どもの頃からずつと持ち歩いている、あの、銀の筥はこだった。

どんな時も手放せなかった銀色の筥。優美な脚が付いた、ずつしりと重い、鍵のかかった筥。憂未は引き寄せられるようにふらりと歩き出した。

（そうだわ。これはモーラがくれたんだ。夢の中で、渡された。）

『憂未。可愛いユーミ。これを持っていて。なくさないでね』

美しい少女のモーラが、泣いている幼い憂未に筥を渡す。おずおずと受け取る憂未にモーラは優しく微笑みかける。

『絶対に手放してはだめ。これを持っていれば、いつかまた会えるわ』

『ほんと？』

『そうよ、憂未。だから持っていて。ずっと、持っていてね……』
モーラの声が奇妙に歪んで反響する。憂未は無意識に首を振った。
いやだ。開けたくない。

気が付くと管はすぐ目の前にあった。憂未は頭髮が逆立つような
恐怖に襲われた。氷を飲んだように喉の奥が冷たい。

背骨は氷柱と化し、立ち尽くす憂未の全身を冷気が蝕む。知らぬ
間に右手が前へ動いてゆく。指先には銀の鍵。憂未は見開いた眼球
の動きだけでそれを追った。拘束されたように顔は管に向けられた
まま動かない。

黒ずんだ鍵穴に、銀の鍵がぴたりと嵌まる。

ほとんど力はいらなかった。ほんのわずか回しただけで、カチ、
と小さな音を立てて鍵が外れた。

鍵穴に鍵を挿したまま、憂未の両手は管の蓋にかかる。憂未は冷
たい脂汗でしとどに額を濡らしながら呻いた。

（開けたくない。開けてはだめ。）

お母さんは正しかった。モーラは邪悪だ。

けっして目覚めてはならぬ妖夢の化身。

必死の抵抗に身体中の筋肉が小刻みに震える。

（だめ。開けてはだめ。モーラが目覚めてしまう。モーラの夢に喰
われてしまう。）

しかし手は操られるように動き、蓋は静かに、静かに開いて行っ
た。

管の内部は緋色の天鵞絨てんじゆ張り。毛足の長い、上等な深い緋色の布
地に、白く細長いものが半ば沈み込んでいる。

それはふたつの関節を持ち、ゆるやかなCの字型に曲がっていた。
まるで羽ばたく日の夢を見ている幼虫のように、それは透けるほど
青白く、不思議な輝きを放っている。

先端には桜貝のような愛らしい短い爪。反対側からは鮮やかな赤
い肉と真っ白な骨が覗いている。

それは、小さな子どもの指だった。

「小指よ」

モーラが愛らしく笑う。

「約束したもののね、憂未。あの指で、指切りしたの。覚えているでしょう？」

含み笑いととも頂を冷たい指が撫でる。

憂未は喉が張り裂けるほど絶叫した。長く尾を引く悲鳴を上げながら、管を床に叩きつける。絶望の涙があふれ、視界が醜く歪んだ。蓋が外れ、脚が折れた銀の管から切断された指がこぼれる。

絨毯の上に転がった指は生きているかのごとくひくひくと蠢いたかと思うと、急速に変化し始めた。

青白く瑞々しかった皮膚が艶を失ってゆく。花が萎れ、葉が枯れるように、皮膚は汚い茶色に変わって骨に張りついた。桜貝のようだった爪もまた色を失って朽葉色の中に沈む。

そこにあつたのは、かさかさ乾燥したミイラの指だった。

憂未は身を翻した。一刻も早く、少しでも遠く、あの忌まわしい物体から離れたい。頭にあるのはそれだけだった。

無我夢中で寝室のドアを開け、憂未はホールへと続く通路へ飛び出した。

はず、なのに。

憂未は何処かの部屋の中にいた。振り向くと、閉じかけたドアの隙間から何かが蠢くような異様な気配が追って来る。

「約束守ってよ、憂未……」

面白がるようなモーラの囁きが聞こえた気がした。

憂未は焦って目の前のドアを開いた。また、空っぽの部屋。誰もいない、家具もないがらんとした空き部屋が現れる。憂未は虚ろに反響する床を駆け抜け、辿り着いたドアを必死にこじ開けた。

空き部屋。

部屋を走り抜ける。

ドアを開ける。

空き部屋。

空き部屋。

空き部屋。

空き部屋。

空き部屋。

憂未は息を切らせ、涙が溢れるまま走り続けた。だが、何度ドアを開いても、同じように薄暗く、人気のない、打ち捨てられたような空き部屋が続くばかり。

何処まで行っても、外へは出られない。

空き部屋自体が嗤っているような気がする。空間が歪み、身をよじって哄笑を上げる。声なき声が嘲笑う。

憂未は泣き叫んだ。

「誰か！ 誰か助けて！ 誰か　　！！」

虚ろな筈が返事をする。

ダレカタスケテ。ダレカ。ダレカ。ダレカ。

憂未は噁り上げ、大声で叫んだ。

「……恵吾！」

ぱんつ、とひときわ大きな音をたてて扉が開いた。憂未は崖つぶちに飛び出したかのように踏鞴たたらを踏んだ。濃厚な百合の香りが鼻孔を痛いほどに刺激する。揺らめく燭台の焰が花瓶に挿された大きなヤマユリを照らしている。

こまやかに波うちながら反り返った漏斗状の白い花卉。中心を走る黄色のすじに、乾いた血のような斑点が散る。熟した雄蕊が赤褐色の花粉を重たげに振り撒き、酔いを含んだ空気が水底のように澱んでいる。

反射的に逃げ出そうとした途端、何かに躓いた。見れば白衣の人間が倒れている。奇妙にねじれた姿勢。光沢のあるストッキングを履いた細い脚。

寺沢看護師。

密集した睫毛に縁取られた瞳が虚空を凝視している。生命のない

瞳。それはガラスですらない。そこに転がっていたのは看護師の格好をした一体のマネキンだった。手の込んだ蠟人形でも精緻な球体関節人形でもない、大量生産されたディスプレイ用のマネキンが無造作に打ち捨てられているのだ。

よろよろと後退った憂未の背が壁にぶつかる。惑乱する憂未を嘲笑うように部屋の奥がぼうつと明るくなった。

寝台の上に横たわった馨かおるを囲むように、聖樹と沙羅が立っていた。憂未に背を向けた沙羅が、向かいに立つ聖樹にくすんだ金色の鳥籠を掲げて見せる。

「見て、お兄さま。蝶々を捕まえたの。綺麗でしょう」

蝶は籠の中を狂ったように飛び回っている。籠にぶつかるたび、青白い鱗粉が闇に飛び散った。

沙羅は冷やかに笑った。

「罰よ。おとなしくしていないから悪いのだわ。ケダモノはケダモノらしくしていればいいのよ。今さらいい子ぶってどうなるというの？」

沙羅は鳥籠を掲げたまま、くるりと振り返った。

ひっ、と憂未は息を飲んだ。それは黒い髪髪の沙羅ではなく、神々しいまでの金色の髪をしたモーラだった。モーラは艶美な笑みを浮かべて憂未を見た。

「わかる？ 憂未。これは恵吾よ。そして、これも恵吾なの」

モーラは空いた手で横たわる馨を指さした。馨は仰臥したままぴくりとも動かない。生きて息をしているのかどうかさえ定かではなかった。鳥籠の中で蝶が狂乱して羽ばたく。鱗粉が闇にキラキラと舞い落ちる。

それはまるで、生命が砕け散ってゆくような。

憂未は首を振り、口許を押さえた。

ヤマユリが音もなく花粉を散らせる。

強い強い、脳髓が痺れるような百合の芳香。

そう。これは腐臭を隠すため。生きながら腐敗してゆく恵吾の現

身を悟らせぬため。

憂未の頬を涙が伝った。

蝶が弱々しく羽ばたく。力尽き、最後の足掻きのようにボロボロの羽を打ち振るい、生命の鱗粉を散らせてゆく。

モーラが微笑み、沙羅の声で喋る。姿もまた沙羅に変わる。

「大丈夫よ、先生。彼は死なないわ。恵吾くんは獣になって生きるの。獣のように先生を欲したのだから、獣になって生きるのよ。これは罰。そして彼の夢は叶った」

真っ白なテーブルクロスをかけた食卓が目の前に現れた。茫然とする憂未を尻目に、いつのまにか沙羅と聖樹、そして馨 いや、恵吾が席に着いていた。

うきうきした様子で座っている沙羅。平素と変わらぬ物腰の聖樹。そして、げっそりと頬がこけ、力なく口を半開きにして落ちくぼんだ眼窩の奥でちろちろと燐光を瞬かせる、死人のような恵吾。

そこへ無表情なメイドが足音もなく料理を運んで来た。銀のフードカバーのついた大皿を両手で捧げ持っている。

三人の前に大皿が置かれると、沙羅は眼を輝かせて身を乗り出した。メイドが無言のままカバーを取り去ると、沙羅は歓声を上げた。憂未の生首が皿の真ん中に据えられていた。

血の気を失った、雪のように冷たく白い肌。唇だけはキイチゴのように赤く熟れ、くちづけを待つかのようにかすかに開きかけている。青ざめた瞼は閉ざされ、カールした黒い睫毛の際を花びらが飾る。

大皿の上には憂未の首を中心に、彩り鮮やかな野菜のゼリー寄せや生ハム、トマト、冷肉、美しくカットされたフルーツなどがふんだんに盛りつけられていた。

血走った眼球をギラギラさせ、恵吾は憂未の生首を食い入るように凝視している。傍らで沙羅が手を叩いてはしゃいだ。

「素敵！ なんて綺麗なの」

沙羅は取り分け用のフォークとスプーンに手を伸ばした。

「ねえ、お兄様。唇は私が貰ってもいい？ とても美味しそうなんだもの」

「だめだよ、沙羅」

笑みを含んだ声音で聖樹が答える。

「唇は彼のために取って置きなさい」

沙羅は残念そうに肩を竦めた。

「仕方ないわね。それじゃ、私は眼を貰う。きっと甘くて美味しいわ。舌の上でとろけるまで転がすの」

「独り占めする気かい。僕にもひとつ分けておくれ」

「いいわよ。だったら右眼をどうぞ。私は左眼をいただくわ」

沙羅は嬉々としてフォークを取り、瞼をひっかけて持ち上げた。凍りついた水晶のような眼球があらわになる。

「鼻は残しておいてあげましょう。素敵なお料理の匂いかわかるように。自分の血と肉の香りをかけるように。耳も残しておいてあげる。自分が食べられる音が聞けるように」

形容しがたい湿った音がした。スプーンの上に丸い眼球を載せた沙羅が、うっとり唇を寄せた。聖樹が薄い笑みを浮かべて恵吾の方へ皿を押しやる。

「さあ、君もお食べ。君の愛する姉さんを」

がたり、と恵吾が立ち上がる。途端に食卓は消え失せ、薄暗い室内には恵吾と憂未だけが向かい合っていた。

バタバタと何処かで蝶の羽ばたく音がする。

後退ろうとしたが遅かった。骸骨のように痩せ衰えた恵吾が憂未に掴みかかった。憂未は固い床に押し倒され、悲鳴を上げた。

「いやあつ、やめて、恵吾！」

絶望的に叫ぶ憂未の声が、虚しく闇に吸い込まれる。目の前がぐるぐる回り、抵抗しようにも腕に力が入らない。まるで酔っているように頭がぐらぐらする。

酔っているのだ。

あのとき、私は酔っていた。

性悪な子どもに目をつけられて職を失ったうえ、うまく行っていると信じていた恋人にもふられた。すべてが突然で、続けざま、どうしていいかわからなくて。

落ち込んでいた私を少しでも元気づけようと、智子が飲みを誘ってくれた。私は智子にいつぱいグチをこぼして、泥酔するほど酒を飲んだ。酔っぱらって足元も定まらない私を智子はタクシーで自宅まで送ってくれて、弟の恵吾に私を預けて帰って行った。

ふられるたび、二日酔いするほどヤケ酒を飲んだ。へべれけになって帰って来る情けない私を、恵吾は怒りもせず黙って介抱してくれた。

そう。いつも、いつも。

帰ると恵吾が待っていて、水を飲ませてくれたり、時には吐き戻すの手伝ってまでくれた。そして、ぶっきらぼうに慰めてくれるのだ。

『あんな奴、別れた方がよかったんだ。もつと姉さんにふさわしい相手がいるよ』

いいえ、いるんですか。だって私の好きな人は夢の中に住んでいるんだから。夢に出て来るあの人が一番好きなのよ。

いるはずのない人を私は愛してる。馬鹿だってわかってる。そんなくだらない夢を見る年頃じゃない。でも諦められない。狂おしいほど惹かれるのを止められない。

夢の中であの人と寝たわ。現実につき合った相手と寝るよりもずっと前に。何度も何度も。現実のセックスよりずっと気持ちよかったです。そのたびに現実の男が色褪せてゆく。

わかってるわ。私はどうかしてるのよ。頭が変なの。わかってるわよ！

『……姉さんは、わざわざ合わない相手を選んでもみたいな気がするよ』

そうかもね。だって、あの人が現実にはいないってことがわかってるんだもの。どうでもいいのよ。私は私に思い知らせるために、

わざと間違った相手を選んでは。あの人のことを諦めるために。そしていつかあの人の夢を見なくなったら、きつとどつぷりと現実に浸かって、適当に合う相手が見つかるでしょう。それまでの辛抱よ。心配させてごめんね、恵吾。

「あんたみたいに優しい弟はいないわ。本当の弟じゃないのにな。……そうだよ、本当の弟じゃない。血の繋がりなんか全然ないんだ」

恵吾……？

どうしてそんな眼で私を見てるの。呆れてる？ 当たり前よね。姉のくせに、こんなならしなくて無様なんだもの。私、恵吾に見捨てられちゃうのかな。たつたひとりの家族なのに……。

「姉さんは……、あんたは俺の姉さんじゃない。俺は、あんたのことを姉さんだなんて思っただけ！」

何するの、恵吾？

やめて……！

目の前に迫った髑髏のような顔が、見慣れた弟のものに変わってゆく。マットレスのへこんだ古びた寝台で、スプリングがぎしぎしと厭な音をたてている。

ここは私の部屋だ。

立て込んだ住宅地の一角。庭も取れない狭い敷地。でも、笑い声があった。

あの日までは。

お母さん。再婚相手のお父さん。お父さんの連れ子の恵吾。仲よく暮らしたのは十年にも満たなかった。私が十七、恵吾が十五の時に、お母さんとお父さんが死んだ。

車の事故で、ふたり一緒に。

信号待ちをしていたら、後ろから猛スピードで走って来た車がそのまま突っ込んだ。前に飛び出したお父さんの車は、交差点を通過中の車にぶつかって大破。ふたりとも即死。追突した車は飲酒運転ドライバーは前後不覚なほど酔っていた。

だから恵吾は大人になった今でもほとんどお酒を飲まない。でも私は酔い潰れるまで飲む。厭なことを忘れようとして。恵吾はそれも許せないのかもしれない。

恵吾の眼が狂ったように血走っている。私を嫌ってる？ 憎んでるの？ 恵吾。

「……俺は……俺は……、ずっとあんたが好きだった。姉貴としてじゃない。あんたは俺の姉貴じゃない……！」

恵吾は吠えるように叫び、憂未の着ていたブラウスを引き裂いた。ちぎれたボタンがばらばらと床に落ちる。力任せに下着を筆り取られ、憂未はようやく自分が何をされているのか自覚した。

「やめて、恵吾！」

押し退けようとしても、アルコールの影響でふらふらした憂未にそれに足る力はない。必死で暴れているつもりでも、手足の動きは緩慢だった。劣情を剥き出しにした恵吾の顔を見ると恐怖で身体が竦む。

恵吾がこんな暴力を振るうなんて。

それでも懸命に逃れようとしたが、体格のいい大学生に敵うはずもない。憂未の抵抗を組み伏せ、恵吾は固く屹立する己の欲望をねじ込んだ。憂未は苦痛の叫びを上げた。身体中を切り裂かれるような激痛が走る。

それは恵吾でありながら、いつか見た黒い獣でもあった。憂未を犯し、脚を貪り喰った獣。猛り狂う獣が憂未を傷つけ、荒々しい律動で無理やり快感をえぐりだす。眦から涙がこぼれ、憂未は悲愴に呻いた。

「……いや……、やめて……」

動きが止まる。

長い指が気づかわしげに額に張りついた髪を払う。

「ごめん、痛かった？」

憂未は濡れた睫毛を茫洋と瞬いた。覗き込んでいるのは聖樹だ。心配そうに憂未を見つめ、頬を撫でる。彼が身じろぐと結合した部

分がぬめるのを感じた。彼は何も身に着けていない。着痩せして見える質なのか、思ったよりずっと肩幅が広く逞しかった。

憂未は剥き出しの自分の胸が重く上下するのを感じた。横たわる憂未もまた、一糸まとわぬ裸体を聖樹の眼に晒しているのだった。混乱の中から作り物のように記憶が立ち現れる。

眠れずに階下へ降りた憂未は、遅く帰宅した聖樹と撞球室で出会ったのだ。聖樹は憂未の顔色が悪いと心配して、ホットワインを作ってくれた。暖炉の前でふたりで温かいワインを飲みながら話をしていた、そのうちにどちらからともなくキスをした。

遠慮がちに抱き寄せられても憂未は抗わなかった。夢を見ている気がした。夢の中のあの人のように、聖樹は抱きしめてくれた。憂未は幸福感で泣きたいほどだった。

ずっと夢見ていた。そう、文字通り、夢に見ていたのだ。触れ合った身体を通して聖樹の欲望を感じた。そして自分の内にも同じものを。だから誘われるまま聖樹の寝室に来たのだ。

聖樹は黙って憂未を見下ろしている。汗ばんだ額やわずかに上気した目許がひどく官能的で憂未はぞくぞくした。

「やっぱり厭……？」

気だるげに聖樹が囁く。

「それなら……やめるよ」

少しだけ苦しそうな囁き。憂未は無言で首を振った。涙がひとすじこぼれてこめかみを濡らす。

「……違う。違うの」

嗚咽を上げる憂未をなだめるように聖樹が瞼にくちづける。

「どうしたんだい」

「夢を見るの。変な夢ばかり、たくさん……。目が覚めても夢の続きだったことが何度もあった。だから、これが現実なのかどうか、不安でたまらない……」

「もちろん現実が決まってるさ。これが夢だなんて酷すぎる」

聖樹は低く笑い、憂未を抱きしめた。縋り付くように抱き返す憂

末の耳元で聖樹は含羞んだように囁いた。

「駅に迎えに行つて君を見た時、初めて会った気がしなかった。ずっと前に出会つていたような気がしたんだ」

「私も。私もよ……」

憂未は感極まつて睨り泣いた。背を撫でた聖樹は微笑み、憂未に接吻した。夢見心地のとりけるようなくちづけ。でもこれは夢じゃない。これが現実なんだ。夢のような現実。それとも、現実のような夢……？

聖樹がふたたび動き始める。憂未は広げた脚を絡め、恍惚と胸に顔を埋めた。吐息が絡み合い、意味をなさない睦言が囁き交わされる。互いの肌に指を滑らせ、幾度もくちづけを交わしながらより深い交合を求めあう。

顎を反らした憂未の鼻腔に仄かな甘い香りがした。凄艶な闇を渡る百合の香り。濡れそぼつた身体の奥にかすかな違和感と痛みを感じる。

汗の浮いた滑らかな背を飽かず愛撫していたはずの掌に、奇妙な手応えを感じた。ちくちくと皮膚を刺激する、硬い毛のような……。

だが、それは意識すると同時に消えてふたたび紛れもない聖樹の身体になり、また恍惚に支配されると違和感が頭をもたげてくる。濃密な百合の香りと微かに鼻につく腐臭を伴つて。

深く突き上げられながら夢つつつに思う。

（これはどつちな。いま私を抱いているのは……。）

『選べばいい。君が選べば』

ふたりの声が同時に聞こえる。聖樹？ 恵吾？ それとも、どちらでもない悪夢の声。誰かが忍び笑つてる。モーラ？ それとも沙羅なの？

『選びなさい』

美しい声が絶妙に響きあう。モーラと沙羅が合わせ鏡のように立っている。

『可愛い憂未。あなたは好きな方を選ぶ。他ならぬ可愛いあなた

だから、特別に選ばせてあげるわ』

邪悪で愛らしい妖精のようなふたりの声。涼やかな笑い声が幾重にも広がる。

『選べないの？ ユーミ。ううん、あなたはもう選んだ。恋人は聖樹。恵吾はあくまでも弟。優しくて姉思いの可愛い弟。そういう恵吾に居てほしいんでしょ。そうでない恵吾はいらない。帰って来なくていいわ。そう思ったのよね』

酔った憂未に暴行した翌朝、恵吾は姿を消していた。何日経っても帰らず、連絡もなかった。家族四人で暮らした家に、たったひとり憂未が残った。

憂未は携帯電話を開き、アドレス帳から恵吾の番号を呼び出して眺めたが、実際にかけることはついになく、恵吾からかかって来ることもなかった。憂未は恵吾のことを努めて考えないようにした。姉弟の絆はもう完全に切れたのだ。

『大丈夫よ、憂未』

慰めるようにモーラが囁く。

『恵吾は帰って来るわ。無害な可愛い弟として帰って来る。あなたが望むとおりに』

私が望む？ 私が何を望んだというの。私が望んだものって何？ 混乱して憂未は眉を寄せた。聖樹の律動は早まり、更に奥を突いて来る。憂未は無意識に眉間に皺を寄せ、ぎゅっと聖樹の背を抱え込んだ。

『私、あなたのためなら何でもしてあげるわ。可愛い憂未。あなたは大切な人。私をもう一度蘇らせてくれる、たったひとりの人だから』

(蘇らせる……？)

『そうよ。そのためにあの管を渡したの。そして鍵は彼に渡したわ。いつかふたりが出会った時、鍵は開くことになっていたのよ』

憂未は眼を見開いた。薄闇に立っている聖樹が見える。

あれは……台所だ。ガスレンジと流しがある。ガスレンジには小

小さな鍋。聖樹は棚から小さな缶を取ってスプーンで中身をすくう。ハーブとドライフルーツが入ったホットワイン用のスパイス。

聖樹は私に飲ませるためのホットワインを、これから作るのだ。調理台の上には栓の開いた赤ワイン。そして……、あれは……、あれは……。

猫脚の付いた銀の筥。

どうして聖樹がああな筥を持っているの？ どうして彼が。筥に向き直った聖樹が、襟元から何かを引き出す。銀鎖に繋がれた小さな鍵だ。古びた銀の鍵。クローバー型のつまみがついた、小さな銀の鍵。

聖樹は鍵を鍵穴へ挿す。開かれた筥の中には緋色の天鵝絨で包まれたミイラの指が入っている。彼はそれを見ても驚かない。枯れ木のような指を摘み上げ、しげしげと眺めている。彼は指をまな板の上に置く。

彼が何をしようとしているのか悟り、憂未は必死に叫んだ。

やめて。やめて！

聖樹には憂未の声は届かない。これはすでに起こってしまったことなのだ。

聖樹は包丁を取り上げ、刃を上を持ち替えた。包丁の背でミイラ化した指を叩く。乾燥しきった指はあっさりと骨ごと砕けた。

まな板を叩く音が単調に響き、指はみるみるうちに粉になってゆく。乾燥したハーブが何かのように見えるそれを、聖樹は残さず鍋に入れた。その上からたっぷりとワインを注ぎ、ガスを点けた。

青白いガスの炎に、ぼんやりと聖樹の顔が浮かび上がる。美しくもおぞましい陰影を描くその顔は、静かに微笑んでいた。やがてワインは煮立ち、聖樹はグラスに茶漉を置いて熱いワインを注いだ。ふたり分のグラスを盆に載せ、彼は台所を出た。

「……美味しかったでしょ？ 憂未」

ぞっとする声が喉元を撫でる。うっとりとしてモーラが笑う。

「私はずっとあなたの夢に棲んでいた。そして、今はあなたの身体

の中に居るの。この時をずっと待っていたわ。私はなくした身体を取り戻す。知久が殺して焼いた、あの身体の代わりに……」

ぺたり、と黒焦げの手が後ろから憂未の頬を撫でる。焼け焦げて皮膚が炭化したモーラの腕が、ぐっと憂未を背後から締めつける。

『約束したものね。私たち、ずっと一緒にいるって約束したものね

……』

「……いやああああああああああああああああああああああああああああ……！！」

グラスの中で昏いガーネット色にワインが揺れる。

乾杯。

くちづけ。

こぼれたワインが血に変わる。

魔法陣に鮮血が滴る。

憂未の指先につけた傷を舐めるモーラ。

立ちのぼる白い霧。

形のないラルヴァ。

霧に包まれた木立。

歩いてゆく私と聖樹。

とりとめもないお喋り。

笑い。

霧がすべてを包み込む。

美しい少女の姿をしたモーラが幼い憂未に銀の管を渡す。

持っていて。

ずっと持っていて。ずっとよ。

『私が死んだらこの子を形見にあげる』

無邪気に微笑む沙羅。

『名前はリリトと言っの』

リリト。

ああ、そうだ。

地獄の娼婦。悪霊たちの女王。

地上に混沌と悪夢をもたらす女神。

澄んだ声で沙羅が笑う。

死ねば天使に。死ななければ吸血鬼に。

私は死ぬけど死なないの。

蠟人形を柩に入れて土葬にしまらう。

そして永遠に生きるのよ。

むせ返るような百合の香りに隠された秘かな腐臭。

横たわった聲。

病み衰えた恵吾が息を荒らげる。

眼窩の奥に鬼火が燃える。

獣性だけを腐りゆく肉体に残し、魂は青白い蝶へ、そして少年へと姿を変える。

『逃げて。姉さん。逃げて』

『「違つてたよ、坊や。」』

『龍潭譚』を朗読する沙羅の声が闇に訝する。

『「お前あれは斑猫はんみょうといつて大変な毒虫なの。もう可いいね、まるでかわつたやうにうつくしくなつた、あれでは姉様ねえさんが見違へるのも無理はないのだもの。」』

『逃げて、姉さん!』』

無我夢中で走り出す。

次々に開く扉。

空き部屋ばかりが現れる。

悪戯つばい沙羅の声が聞こえる。

『斑猫つて媚薬の素なのよ。カンタリス。愛と死は隣り合わせ。ロマンチックでグロテスク。誰もが夢を見てる。すべてが夢。グロテスクで馬鹿げた夢だわ』

夢は死を通して完成する。

理性が眠るとき、怪物が目覚める。

『私がお日様に当たれないのは、吸血鬼だからだと思わない？』
くるくると踊りながら歌うように沙羅が問う。
死んだら天使に。死ななければ吸血鬼に。
私は死なないの。
夢の中でずっと生き続けるのよ。
誰かが見てる悪夢の中で。

聖樹が低く呻く。快樂に没入している彼の顔はとてもセクシーだ。
うっとりするほど官能的。胎内に熱い楔を打ち込み、憂未を追い立ててゆく。

脳裏では行き場のない逃避行が続いている。

扉を開けて、開けて、開けて、開けて。

走って、走って、走って、走って。

闇はどんどん濃くなってゆく。

白い霧が暗い雲になり、闇に変わって逃げ場を塞ぐ。

半狂乱で憂未は走る。

その一方で絶頂を待ちわびて喘いでいる。

逃げなきゃ。逃げなきゃ。逃げなきゃ。

何処へ？ 何処へ？ 何処へ？

捕まってしまう。

戻れなくなる。

僕みたいに。

『姉さん。ごめんね……』

恵吾。

逃げよう、一緒に。

帰ろう、家へ。

「もう遅いわ」

美しく邪悪にモーラが笑う。

闇の中に扉が開く。

最後の扉。

そしてもう、足元には床さえもない。

憂未は虚空に投げ出され、悲鳴を上げながら深淵へと果てしなく落ちて行った。

「見てよ、憂未」

モーラが聖樹の髪を撫でる。少女の膝の上で美しい青年が眠っている。

「綺麗でしょ。彼は夢を見ているの。あなたの夢を見ているのよ。あなたが彼の夢を見たように」

「……あれは彼じゃないわ。あなたよ」

憂未は絶望にかられて叫んだ。

「あなたが見せた、くだらない、ただの夢だわ！」

モーラは睫毛の長い瞳を静かに細める。

「違うわ、憂未。あれは確かに私。でも、彼でもあったの。そして彼の夢ではあなたと私は一体だった。私はあなたたちの夢を繋いだの。そして恋と悦楽をあげた。あなたにとって彼は理想の恋人。彼にとっても同じこと」

モーラは聖樹の頬にくちづける。

「ねえ。彼、素敵だと思わない？ とつても綺麗でしょ。でも、心の奥は腐った泥沼よ。彼は見てくれが美しいだけの、下劣な獣。彼がどんなに汚い手段でお金を儲けたか知ってる？ ネットの闇に身を潜めて、心身ともに破滅させた人間の数は両手の指では足りないわ。天使の顔で微笑みながら、いとけない嬰兒をもあっさりくびり殺す。それが彼の正体よ。あなたはその醜い片鱗を見てしまった。もう充分だわ。これ以上は知らぬふりをしていなさい。澱んだ淵には悪夢が棲むわ。あなたは綺麗な表面だけを見ていればいいの。」

彼のこと気に入ったでしょう？ あなたのために選んだの。あなたのために探したのよ。可愛い憂未。あなたには私を産んでもらわなきゃならないから。だから最高の相手を探してあげたの。どうせなら出来るだけ綺麗に生まれたいもの。

彼はあなたの運命の恋人。ロマンチックね。そして限りなくグロテスク。だって互いに幻想しか見ていない。

大丈夫、あなたたちの夢はけっして覚めないわ。相手に幻滅することもなく、素敵な幻想を死ぬまで抱いていられるのよ。夢から覚めて泣くこともない……」

くすくすと愉しげに笑うモーラの声が闇に溶けてゆく。取り残された憂未の前にはくすんだ金色の鳥籠。中では蝶が死んでいる。羽はボロボロにすり切れ、鱗粉ははげ落ち、まるで病葉わくちゅうのよう。

『ごめんね、姉さん、ごめんね……』

恵吾……！

「蝶が死んじゃったわ、お兄様」

無邪気な沙羅の声がする。

「閉じ込めるからだよ」

応じる聖樹の声。どちらも姿は見えない。ただ、移ろう視線の端々にちらりと影が動くだけ。暗い星を見る時のように、焦点をずらしてようやく見える、幽かな影。

「閉じ込めたらいけないの？」

「広いところなら。自分が閉じ込められているとわからないくらい広い檻に入れておあげ。そうすれば、きっと自分は自由だと思いついで生き続けるだろう」

かちやかちやと金具を外すような音がする。沙羅が椅子に縛り付けた骸骨の腕のベルトを解いている。拷問椅子に凭れかかった骸骨に、沙羅は大人びた口調で小言を言う。

「逃げ回るからいけないのよ」

手首、足首、そして首に嵌められた拘束ベルトがすべて外されると、骸骨は呪縛が解けたように崩れ落ちた。沙羅は頭蓋骨を掲げ、

虚ろな眼窩を覗き込んだ。

「お馬鹿さん。私はわざわざあのお話を読んだのよ。なのに、あなたのお姉さんはあなたが誰だかわからなかった。ヒントをあげたのに全然気付かなかったの。ほんと、鈍い女よね」

憂未は涙を流しながら首を振った。

恵吾。ああ、恵吾。ごめんね……。

沙羅は甲高く笑いながら頭蓋骨をボールのように何度も放り上げた。奇怪な遊戯のあいまにぞっとするような優しい声で歌う。

「お馬鹿な恵吾くん。可哀相ね。あんまり可哀相だから道化にしてあげるわ。あなたは新しいアルレッキーノになるのよ。道化なのだからダイヤ柄の服を着なきゃ。きつとよく似合うわ」

沙羅は受け止めた髑髏の頬に音をたててくちづけ、弾けるように笑った。ふんわりした短い裾を翻し、楽しそうにくるくる回る。残酷で優雅な妖精のように。

髑髏の眼窩から涙のように血が流れ出し、沙羅の手を真っ赤に染める。澄んだ少女の笑い声が、深く立ち込める霧の中に竝した。

「……憂未」

温かな吐息が項に触れる。ぐったりと横たわった憂未を背後から聖樹がゆるやかに抱きしめる。

「ずつと側に居てくれるね？」

肩口や背中接吻しながら聖樹は囁いた。

「結婚してほしいんだ……」

憂未は答えなかった。ただひとすじ、眦から涙がこぼれた。それは聖樹の知らぬまにシーツに吸い込まれて行った。

聖樹の掌が憂未の腹をそつと撫でる。

「大切にするよ……」

「私はここに居るわ」

モーラが微笑む。

しばらくすればまた会える。

楽しみに待っていて、憂未。あなたはずっと夢を見ていればいい。
さあ、眠って。

覚めない夢をご覧なさい。

モーラの甘い囁きが瞼を重くする。

閉ざされてゆく薄闇に、幽かな哄笑が響いた気がした。

第9章 夢の檻

「あいにくの天気ねえ」

憂未の呟きを耳に留め、大谷智子は並んで窓から空を眺めた。灰色の寒々しい曇天だ。智子は身を屈め、冬木立の上に広がる空をあちこち見回した。

「そうでもないわ。これから晴れて来るわよ」

「でも雪が降ってる」

心配げに眉をひそめる憂未の後ろで闊達な青年の声がした。

「大丈夫、いま訊いたら向こうは晴れてるって」

「そう。よかつたわ」

受話器を戻す聖樹を振り向き、憂未はにっこりと笑った。智子はうきつきした様子で周囲を見回した。

「さて、それじゃ出発ね。あれ？ 崇クンは何処たかし」

きよろきよろしているとドアが開いて本人が現れた。町田崇。智子の彼氏だ。聖樹の会社が入っているビルを担当する警備会社の社員である。派遣社員として聖樹の会社に勤めていた智子は顔見知りになった崇と夏頃から付き合い始めていた。

「この夏は大収穫だったよね」

というのが智子の最近の口癖だ。智子は気の合う彼氏を見つけ、憂未は家庭教師先の主に見初められてスピード結婚したのだから。

崇は柔道の有段者だけあって大柄でがっしりとした体格をしているが、黒目がちな瞳が優しく人懐こい。智子は誰かから彼のことを訊かれると、決まって『大っきなわんこみたいな人』と答えるのだった。放っておかれたと思ったのか、智子は少し拗ねたような口調で尋ねた。

「崇クン、何してたのよオ」

「車に板積んでた」

「えー、言ってくれれば手伝ったのに」

「なに、大したことないって。ところで天気はどうですか」

「ああ、大丈夫。今日は大きく崩れることはないらしい」

「憂未、悪いわね。ひとりで留守番させちゃって」

「ごめん、と拝む真似をする智子に、憂未は笑った。

「いいのよ、のんびりツリーの飾りつけでもしてるわ」

「脚立から落ちないように気をつけてくれよ」

聖樹はホールの中央に据えられたクリスマスツリーを心配そうに見やった。高い天井に届くくらい背がある、立派な樅の木だ。側には金モールや電飾、オーナメントなどの入ったボール箱とアルミの脚立が置いてあった。

「大丈夫よ」

「帰って来たら手伝うから、脚立に乗らなくてもいいところだけにするんだよ」

「大丈夫だつてば」

心配性ね、と笑われ、聖樹は憂未を軽く睨んだ。

「君ひとりの身体じゃないんだぞ」

「……わかってるわ」

憂未はかなり目立ち始めた腹をそつと撫でた。もうすぐ六カ月。早いものだ。

「本当に気をつけるから。さ、もう行って」

それじゃ、と一同が出発ムードになったところで、バタバタとドアが開いた。髪についた雪を払いながら入って来たのは憂未の弟、恵吾だ。

「あー、待って待って。実はちょっとトラブル」

「どうしたの、恵吾」

「タイヤがパンクしてる」

「ええーっ」

智子が素っ頓狂な悲鳴を上げた。聖樹が急いで前に出てなだめた。

「ああ、大丈夫。替えがある。急いで取り替えよう」

「俺も手伝います」

崇もいそいそと聖樹の後を追った。慌てて続こうとする智子を恵吾が留めた。

「男三人いれば大丈夫だよ。出来たら呼びに来る」

「そう？　じゃお願いしちゃうと」

「恵吾」

憂未は出て行こうとする弟を呼び止めた。

「何？　姉さん」

「そんな格好じゃ風邪ひくわ。上着はどうしたの」

「ああ」

恵吾はひよいと自分の身形を見下ろした。下は黄色とオレンジのスキー用パンツだが、上はグレーのアーガイルチェックの薄いセーター一枚だ。恵吾は頭を掻きながら破顔した。

「車のここに置いて来たんだ。戻ったらすぐ着るよ」

「すぐよ」

「わかったって」

じゃあ、と智子に会釈して恵吾は出て行った。智子はプラム・ピンの上着を脱ぎ、手近なソファにどさっと座り込んだ。玄関正面の暖炉には薪が勢いよく燃え、ふだんはがらんとしているホールもクリスマス飾りつけで華やかだ。撞球室や朝食室から持ち出してきたソファや椅子も置かれている。

智子は暖炉の上に飾られた写真に眼を留め、ふと洩らした。

「恵吾くん、元気になってよかったね」

「……ええ」

星や球型のオーナメントを取り出しながら憂未は頷いた。

「びっくりしっちゃった。山で遭難なんてさ……。で、記憶の方は？」

「だいたい戻ったみたい。春からはまた大学行ってくて言ってる」

憂未は天使のオーナメントを枝に引っかけた。笛を吹く可愛らしい金色の天使がくるくる回る。シャンデリアの灯を受けて弾ける光を憂未は黙って見つめた。

「よかった。……でも、妹さんは残念だったよね。あたし会ったことないけど、すっごい可愛い子だったんだね」

智子の呟きに、憂未は視線を巡らせた。暖炉の上に飾られた写真の何枚かに沙羅が写っている。お気に入りヴィクトリアン風のワンピースを着て、革張りの洒落た肘掛椅子に座っている姿は、まるで少女モデルのようだ。

ウエディングドレス姿の憂未と並んだ写真もある。ローズピンクのシフォンのドレスに赤い薔薇の花束を持ち、憂未と聖樹の真ん中に立っている。ふたりの後ろにはスーツ姿の恵吾も写っていた。

智子はしんみりした様子で鼻を嚙った。

「でもさ、憂未が居てくれて、きつと聖樹さんも心強かったんじゃないかな」

「だといけど」

憂未は俯いてひっそりと笑った。

「そうだよ。だってさ、社長だったらずいぶんノロケてたもん。憂未に一目惚れしちゃったんだって。あたし、感謝されちゃった。紹介してくれてありがとうって。ポケットマネーからボーナスくれたんだよ」

「もう、いやあねえ」

「美男美女で羨ましいと思ったらないわ」

「やめてよ。花嫁衣装を着れば誰でも美人に見えるのよ。すっごい厚化粧するんだから」

「ねえねえ、憂未のドレス、買ったんだよね。あたしに貸してくれる？」

「もちろん、いいわよ。決まったの？」

「んー、まだだけど。そろそろ考えといてもいいかなって」

照れくさそうに智子が笑うと、玄関の扉が開いて聖樹が入ってきた。

「お待ちせ。さあ、行こうか智子さん」

「はあい。それじゃ、憂未。行って来るね」

「気を付けて」

弾むような足取りで智子は外へ飛び出した。聖樹は憂未の額に口づけて微笑んだ。

「なるべく早く帰るよ」

「いいのよ。せっかくだから楽しんで来て」

聖樹は身を屈め、憂未の唇に接吻した。

「それじゃ行ってくる。くれぐれも脚立には乗らないで。いいね」

「行つてらっしゃい」

扉が閉まる。風除室を挟んで外側にあるもうひとつの扉が閉まる音を、その場に立つたまま憂未は聞いていた。

やがて、車が出て行く排気音とチェーンの音がした。スタッドレスタイヤを履いた四輪駆動車だ。カプリオレは都内の自宅に置いて来た。

車が雪道を踏んで行く音が遠くなると、あとはもう物音ひとつしなかった。薪の爆ぜる音が時折響く以外は、しんしんと降り積もる雪の気配が静寂を深めるばかりだ。

憂未はツリーの飾りつけを再開するでもなく、聖樹を見送った格好のままゼンマイの切れた人形のように立ち尽くしていた。

やがて背後で、ボール箱をいじる音がした。無邪気な声上がる。「お姉様。これ、何処に飾る？」

憂未の胎でのたりと何かが動く。重い水泡が弾けるように胎内でひっそりと笑う気配がした。

熱心にオーナメントを眺めている沙羅を、憂未は声もなく凝視した。沙羅は小さな花型の電飾の付いた緑色のコードを引っ張り出した。

「これも付けたいな。チカチカして綺麗なの。あの天辺からいっぱい垂らすと素敵よ。でも危ないからこれはお兄様にしてもらおうわ」

沙羅は黙ったままでいる憂未を心配げに振り向いた。

「どうしたの？ お姉様。気分でも悪いの？ だったら休んでいて飾りつけは私がするわ。私は脚立に乗っても大丈夫なもの」

「……沙羅」

「なあに」

サンタクローヌやトナカイ、ステッキなどのオーナメントを爪先立って枝にぶら下げながら沙羅は応じる。

「これは夢なの？」

憂未の震える問いに、沙羅は答えなかった。ただうつすらと微笑み、蒼く底光りのする瞳を向ける。

「あなたは選んだのよ、憂未」

「……違っわ」

「いいえ、違わない。あなたは選んだ。一番居心地のいい世界を。何もかも、あなたの思いどおり」

沙羅は立ち上がり、憂未に歩み寄った。漆黒の髪を長めのおかっぱに切り揃え、襟の詰まったクラシカルな臙脂のワンピースを着ている。古き良き時代の令嬢のように、婉然と上品に沙羅は微笑んだ。「そうでしょ？ あなたはずっと恋い焦がれていた夢の中の恋人にそっくりな聖樹と結ばれた。彼はあなたを熱愛してる。何でも言うことを聞いてくれるわ。子育ても手伝ってくれるだろうし、あなたが外で仕事がしたいと言えば全力でサポートしてくれるでしょう。恵吾くんもあなたの望んだとおりになった。姉思いの優しい弟。あなたのことをずっと大事にしてくれる。あくまでも弟としてね。あなたに虚しい恋心なんて抱かない。あなたは大切なお姉さんなのだから」

沙羅は突然くすくすと笑い出した。

「ねえ、あの道化模様のセーター、とっても似合ってると思わない？ 私が選んだのよ」

憂未は無言のまま凝然と沙羅を見つめた。

「夢は死を通して完成する。……彼は一足先に夢の住人になったの。ずっと幸せでいられるわ。素敵じゃない？ そして、あなたを苛めた女の子や振り回した男たちはみんな破滅するの。悪夢に吞まれて自滅するのよ。あなたはそれを見ていて好きなだけ笑えばいい。あ

あなたは何もしくなくていいの。みんな私がしてあげる。お兄様と一緒に。そういうの、お兄様はすごく得意なのよ。それよりあなたは身体を大事にしなきゃ。生まれて来るモーラのために」

沙羅は無邪気に憂末に抱きつくと、ふくらんだ腹部に頬を寄せた。

「……モーラの笑ってる声がする。きつと愉しい夢を見てるのね」

憂末は喘ぎ、足元をふらつかせた。

「沙羅。あなたは……あなたは死んだのよ。なのにどうしてここに居るの」

「もちろん、死ななかつたからよ。天使になりそこねたわ。でも構わない。こつちの方がずっと愉しいもの」

沙羅は含み笑った。

「ねえ、憂末。私もモーラになるの。そして夢を渡るわ。たくさんの人の夢。たくさんのお宿な悪夢。でもね、あなたが寂しいのならこのままここに居てあげる。そしてあなたのために上手くやってあげるわ。今のようにな」

「沙羅……!!」

「だって、憂末ったらすっかり引込み思案になっちゃったんだもの。せつかく友だちが遊びに来てくれたのに、ぼんやりしてたら心配させちゃうでしょ。あの智子って人、いい人よね。可愛いし。私、好きだわ」

「沙羅。お願い、やめて……!!」

「あら、あなたのためにしてるのよ。でも、そうね。慣れたら代わってあげてもいいわ。それまであなたはのんびりしてればいいの。」

「ここは広いわ。現実よりももっと広い、果てのない世界なの。ここに居ればあなたの願いは何でも叶う」

憂末は激しく首を振り、拳を握りしめた。

「私は閉じ込められたくない!!」

「閉じ込めてなんかいないわ。何処へでも行ける。外に出たければどうぞ。でも今は勧めないわね。雪が降ってるもの」

「でも、この世界からは出られないんですよ……」

沙羅は駄々つ子をなだめるように微笑んだ。

「世界の外なんてないのよ、憂未。わかってるでしょう？」

憂未は窈窕と微笑む沙羅を、凍りついたように凝視した。

「閉じ込めたらいけないの？」

無邪気に尋ねる沙羅の声。考え深げに聖樹が答える。

「閉じ込められているとわからないくらい広い檻に入れておあげ。

そうすれば、きっと自分は自由だと思って生き続けるだろう」

鉄格子も網も、そんなものは何処にもない。でも、感じる。眼に見えない鉄柵を。黒ずんだ石壁を。窓も扉も塗り込められ、何処にも出口はない。かぼそい蠟燭の灯にぼんやりと夢だけが立ち上がる。閉じ込められた女が、絶望の中で在りし日の夢を見ている。

夢は美しく、夢は恐ろしい。

これは奈落にたゆたう夢……。

「ユーミ。愉しいことを考えましょうよ」

沙羅が悪戯っぽく呼びかける。それはモーラの声によく似ていた。沙羅は飾りつけを中断して、テーブルの上にあったボードゲームを床に置いた。暖炉の前、毛足の長いムートンに座り込み、駒と骰子を手際よく準備する。

「お姉様、泣いてないでこっちへ来て。ゲームで遊びましょう」

操られるように憂未は暖炉の前へ歩み寄った。ぺたんと座り込み、盤面に視線を落とす。輸入物のゲームらしく、英語で表示がしてあった。古めかしいお屋敷の中をくねくねしたルートが伸び、マスで細かく区切られている。双六風に追いかけてつこをする単純なゲームだ。

「私がお客とオバケの両方をやるわね。お姉様はホスト役。お客をオバケから守りながら自分も逃げるのよ」

「……どうせすぐに捕まるわ」

「それじゃつまらないじゃない。がんばって逃げてくれなきゃ」

憂未の瞳から涙がひとしずく、ぽたりと盤面に落ちた。沙羅は眼を睜って憂未を見上げた。

「まあ、泣かないで、お姉様。何がそんなに悲しいの」

沙羅は身を乗り出すと憂未の目許に親密な接吻をした。涙に潤んだ瞳を覗き込み、静かな笑みを浮かべる。

「私たち、みんなお姉様のことが大好きよ。愛してるわ。お姉様は私たちが嫌い？」

憂未は黙って首を振った。沙羅はにっこりと笑い、憂未の手に骰子を握らせた。

「だったら愉しく遊びましょう。さあ、骰子を振って。ゲームを始めよう」

促されるままに骰子を投げる。駒を進めながら沙羅が尋ねた。

「そうだよ、お姉様。お兄様のプレゼントはどうなったの？ ちゃんとふたつ用意しなきゃだめよ。誕生日とクリスマス。お兄様、いつもそれで文句言ってたんだから」

「……ええ。わかってるわ」

憂未は茫漠と呟いた。分裂した自我のように、右眼だけから涙が溢れる。左眼は何の感情もなく、ゲームの盤面に注がれていた。

扉を開け放した撞球室から、静かに音楽が流れ出した。

『前奏曲とアレグロ』。

幻のように百合が香る。

憂未は声にならない嗚咽を洩らした。

心の奥の牢獄で、独り叫び続けている。

どうかお願い！

メゾン・ド・コシュマール～悪夢の館～

『メゾン・ド・コシュマール～悪夢の館』……了

覚めて。

第9章 夢の檻（後書き）

【後記】

まずは最後まで読んでくださって有り難うございました。貴重なお時間を割いていただいたことに感謝いたします。m（ ）（ ）m

この作品はあくまでホラー小説なので、主人公は最後の最後まで救われません。最後はハッピーエンドでホッとして、というのは、私の思うところのホラーではないのです。

宙ぶらりんで投げ出される居心地の悪さとても言いましょうか。最後まで何の解決も救いもない、あるいは一見解決されたようदैいて根本的な原因は取り除かれない、というのが私の考えるホラーです。よって、結末についての苦情は一切受け付けません。何と言われようと変えるつもりはありませんので。

この後も夢魔たちは好き勝手に悪夢を撒き散らすことでしょう。事実、世界は悪夢にうなされています。

ところで夢魔が退治される系の作品も書いてます。ブラックな終わり方がとりわけ好みというわけではありません。基本的にはハッピーエンドが好きです。ラノベ系の作品ですが、そのうちに掲載させていただけますので、ご縁がありましたらよろしくお願いします。

ここまでお付き合いいただきまして、有り難うございました。感想などいただけますと嬉しいです。文句や悪口はノーサンキュー。また別の作品でお会いしましょう。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2760e/>

メゾン・ド・コシュマール～悪夢の館～

2009年3月24日09時50分発行